メフィストの夢

レイアン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
メフィストの夢

【Ｎコード】
Ｎ８９６８Ｖ

【作者名】
レイアン

【あらすじ】
運命を変えることができる世界。そんなものが存在すれば、世の中苦労はしない。
だが、クレイデスはそれに似た世界を知っていた。
『メフィストの夢』、そこは、現実とは裏返しに作られた、いわば、影となる世界。だが、その世界の存在はメフィストと呼ばれる者たちしか知らない。
彼らはみな、願望を持って、その世界に入る。その世界は影とはなっているものの、時間の進みは、現実より、はるかに遅い。

つまりは、増大した時間を使用して、不可能を可能に近づけていくことができる世界。
そこで、クレイデスは何を望み、何を見て、何を得るのか・・・

プロローグ　とある男の物語

深夜、辺りは静寂で満ちていた。
だが、辺りは真っ暗というわけではない。月が辺りを照らしているのだ。だが、そういうふうなわけで、暗くはない辺りも、雲が風によって流されてきて、月を隠すことによって、すぐに、周囲を暗闇に沈まる。
その雲は止まることを知らず、風によって流されていく。そして、ついには再び月が見え、雲がなかった頃と同じように月の光によって照らされる。
その暗闇が、消えたとき、何もいなかったそこには一人の男の姿があった。
その男は、何か激戦でもあったのだろうか、顔には縦に入った一筋の傷があり、黒い短髪、そして、服装はというと、タキシード姿で、腰に一本の刀をぶら下げるという軽装であった。
現れてから一歩たりとも、足を動かすこともなく、その場でずっと静止し続けて、俺の隙をうかがっている、そんな熟練し、殺し合いを知った男の行動から、こいつがある人物であることを確信する。
『終焉の騎士』
その名は、彼が行ってきた行為からつけられた二つ名。正確に言うなら、終焉をもたらす騎士と言ったほうがいいか。
そんなやつと俺はお互い、隙がないかの探りあいで、しばらく沈黙していた。だが、そんな沈黙は永遠には続かなかった。そして、その沈黙を破ったのは、男のほうだった。
突然、男の今まで一歩たりとも動かさなかった足を大きく前に踏み出した。
それに対し、先攻を取られたので俺は守りに入ることを即座に決める。そして、自分の身長ほどある剣を構え、男の初撃をガードしようとする。

だが、構え終わった頃には、やつは目の前まで迫ってきていた。
剣の方は心得ている面があって、剣術の世界では迅速剣士とまで、呼ばれるほどのものだった。それから、考えると、こいつのスピードは異常なものだといえる。
そう、正直なところ、俺が剣を構えるのにかかる時間は、皆無なのだから。
迅速とまで呼ばれるほどのスピードで剣を振り下ろす。
しかし、その男は不気味な笑みを浮かべながら、軽々と俺の振り下ろした剣を避けてしまう。
だが、それに対し、俺は驚かないし、それでは、終わらない。
内ポケットから銃を取り出し、避けた方向へ一発、それを避けた際の逃げ道を塞ぐように、少し時間をずらしてから、各方向に一発ずつ撃ち込む。その後、銃を即座にホルスターにしまうと、剣を大きく振り構えた。
すると、その男は不気味な笑いを浮かべつつ、俺をあざ笑うかのごとく全ての銃弾を避ける。
弾は避けきったが、さすがに、俺の大振りは避けきれないと判断したらしく、腰にぶら下げていた刀に手をかける。
勝った。そう思った。
今、刀に手をかけたのであったら、確実に俺の剣は防げない。そう、もう剣は直撃寸前なのだ。
しかし、男は俺の予想の遥か上を行く。
辺りに、金属と金属が強大な力でぶつかり合う轟音が響き渡った。
だが、俺には刀を抜いたのが見えなかった。抜いたということに気づけなかった。そう、剣と刀がぶつかって初めて気づいたのだ。
俺は仮に、防がれたとしても、男は無傷で済むとは思っていなかった。俺はこの一振りに全てをかけていたのだ。それがどうだ、そんな一振りを、こんな細い一本の腕で俺の剣を押し戻そうとさえしている。
さすがの俺もこれには絶句する。

こいつは一体何だ。こいつは俺の攻撃完璧に避けるし、完璧に防御する。おそらく、いまだに、少したりともダメージが与えられていないだろう。
はっきり言って、化け物だ。
俺も自身のことは化け物だとは思っている。いや、実際に化け物なのかもしれない。だが、それの比にはならないほどの力をこいつには感じた。
それだとしても、こんなやつに敗北するわけにはいかない。俺は彼女のために進まなければならないから。
「今から、この戦いのかたをつけさせてもらう。」
すると、男はクックと俺を嘲るように、笑うと言った。
「かたをつける？それは俺を倒すってことか？笑わさせてくれる。貴様風情にそんなことができるなどと、いきがるなよ。」
俺が剣をもう一度振りかぶり、繰り出そうとしたそのとき。
俺の上を腕が飛んでいることに気づいた。よく見ると、それは左腕。その後、すぐに、左肩に激痛が走る。そう、飛んでいる腕は俺のものであったのだ。
心臓から左腕に送られる予定であった血が流れてくる。だが、左腕はない。行き場を失った血はその勢いのまま空気中に流れ出て、地面に血の海を作り出す。
「まずい、まずい、まずい。本当にまずい。」
俺は一旦、男との距離をとるために、後方へバックジャンプする。
だが、これはこいつに対しては正直言って、無駄な策だろう。こいつの異常なスピードはさっき経験している。そして、それは明らかに異常な物であった。
だとしても、俺は考えなければならない。例え、考える時間が一瞬であったとしても。
考えるのをやめてしまって、負けを認める。そうしたら、最後。俺はは死ぬだろう。
だが、そうはいかない。左腕のない今となっては力技は出来ない。

だとしたら、どうすれば、勝てる？
俺は思考を止めない。さっきからこいつと戦っていて、こいつには策という策が通じないということが分かった。それならば、真っ向勝負で戦ったほうが、まだ、勝つ確率はゼロではなくなるはずだ。
そうなれば、まだ、勝機はあるかもしれない。
地面に着地すると、不規則なステップで、男の懐に踏み込む。
そして、右腕で振り構えた剣で力を込めた斬りを男に向かって放つ。
だが、その腕に目の前の男を斬った感覚が至ることはなかった。俺の剣はやつには届かなかったのだ。なぜなら、やつが俺の剣を指で斬ったからだ。俺の剣の片割れは無残にも宙を舞う。
「うそ・・・だろ・・・。」
意味が分からない。
まさか、やつは俺の斬りを受けてから、一瞬で指に力を込めて、俺の剣を破壊したとでも言うのか。
こんなことがあっていいのか？こいつは何だ・・・
俺はこんなやつに勝てるのか・・・・・一瞬だけそう考えてしまう。
だが、すぐにそんな思考を止め、ホルスターにしまった相棒を取り出し、構える。
残弾は一弾のみ。
つまり、これが外れれば、俺は死ぬだろう。
しかし、この最後の一弾は特別だった。
魔法効果を付加しているタイプの相当レアなものであったからだ。
しかも、追尾、硬化の二つの種類が付加されたタイプ。
普通はあったとしても、一種類の魔法が付加されているだけだ。なぜなら、銃弾に二つの魔法を付加すると、お互いが反発したり、気が合わないのか知らないが、魔法自体がどちらも自壊してしまう。
しかし、これはそれを防ぐために、長い月日をかけて魔法を付加させていったのだ。そう、徐々に魔法と魔法を同調させていったのだ。
そうして、出来上がったこの銃弾なら、この絶望的な状況だろうとしても、変えてくれるはずだ。

俺は引き金を引く。
銃弾は男目掛けて一直線に飛んでいく。男に直撃する、そう思ったそのとき。
突然、男は消える。
銃弾はさっきまで男がいたところを通り抜けると、上へ向かった。
上を見る。すると、やつはいた。どうやって、一瞬で移動したかは分からない。
だが、これで、かたがつくはずだ。俺は少し安心した。
しかし、またも、有り得ないことが俺の目の前、空中で起こった。
あの硬化の魔法を付加しているのにも関わらず、銃弾がやつの刀によって、真っ二つに分断されたのだ。
そして、銃弾を真っ二つにすると、男が突然消える。
俺の体は上半身と下半身が分断され、宙を舞う。
どうやら、俺はやつによって、体を真っ二つにされたようだ。
「くそ・・・が。」
そう、呟くと、俺の意識は、闇に落ちていった。

プロローグ　とある男の物語（後書き）

どうも、レイアンと申します。
このたびは、メフィストの夢を読んでいただき、ありがとうございます。
とりあえず、読んでみていかがだったでしょうか。
おいおい、突然死なすなよとかいうふうに感じられたかもしれません。
とは言え、これが、始まりにふさわしい、そう思わせるストーリーでしたので、こうさせてもらっています。
この物語を楽しんでもらえれば、うれしいです。

最後に、
このたび、メフィストの夢を一新させてもらいました。
完結のものとして、作り上げたものとしています。
よろしくお願いします。

始まりの少女（1）

俺の目の前に一人の男が現れた。
普通の人間ではない、一見してそう思った。
年は五十から六十の間だろうか、顔に刻まれたしわ、顔の至るところにある傷、開くことがあるのだろうかと思わせるようなきつく閉められた口、そして、スキが全く見当たらない構えから、激戦を潜り抜けてきたのが、うかがえる。
そして、俺が普通じゃないと思う理由は簡単だ。こいつがさっきから放っている殺気だ。抑えるため、微弱だが、それは冷たくて鋭い。気が付いてしまえば、一般人は、目の前に立たれただけで、すぐに縮み上がるようなもの。
ついに、この殺気漂う男はその固く閉ざされた口を開き、
「深紅に染まった短髪。強い決意に満ちた金色の瞳。そして、比較的、背は高く、後ろには自分の身長ほどあろうかと思われる一本の剣を背負っている。そうか、お前が最終選考試験まで進んできたクレイデスか？」
「俺がメフィストの最終選考試験まで進んできたクレイデスです。よろしくお願いします。」
と丁寧に言うが、まるで興味などないように、彼は話を続ける。
「貴様の受ける最終選考試験はいまだに誰も踏み込んだことのない未開の場所の地図を完成させることだ。一週間後にここに来い。そして、今回の最終選考試験ではお前以外の一般人の仲間とともに行くことを許可をする。」
メフィストの最終試験らしい課題だと思う。
メフィストとは、もともとは測量士なのだから。
しかし、いったい、何故今まで許可されるようなことがなかった一般人の仲間を連れることが許可されるようになったんだ・・・？
しかし、俺には分からない。

ゆえに、俺は、聞く。目の前の男に何か思惑を感じたから。
「何故今になって、仲間を連れることを許可した？」
男は無表情なまま、言った。
「理由は簡単だ。未開の場所に単独で挑むバカがどこにいる？何が起こってもおかしくない。しかし、仲間がいるからこそ、対応できることもある。それだけだ。あと、最後に聞いておく。この試験で、命を落とすかもしれない、覚悟はできているか？」
その男は顔の表情を全く変えずにそう告げた。それに、俺はいつになく真剣に考える。ここで進むことを決めれば、もしかしたら生きて帰ったとしても、もう昔のような生活はできなくなるかもしれない。そして、死ぬ可能性すらあるのだ。
死んだら、俺のやらねばならないことをやれずに終わってしまう。
だが、それでも、俺は進む。もう後には引けないから。もう、色々なものを犠牲にしてきているのだから。
そして、俺は言った。
「行ってやるさ、そして、メフィストになってやる。」
それが俺による答え。死に対する俺の反逆の意志表示。男はそんな俺の答えを聞くと、
「では、一週間後に。」
と一言だけ言って、その場から消えた。なにも、魔法も詠唱するわけでもなく、消えた。まるで、そこには、誰もいなかったように。
「ったく、まじでメフィストってのは化け物かよ。」
そして、俺は考える。これから一週間で何をすべきかを。
未開の場所でどうすれば、地図を完成させられるか、そして、仲間を連れて行くかどうか。考えるべきことはたくさんある。時間が足らない。
しかし、これでようやく、未来へと進むための歯車が、ようやく、かみ合い始めた。もうすぐだ。もうすぐで・・・。
まずは、未開の地に行く上で生き延びるための手立てを考えなければならない。俺は近くにあった椅子に座り込み、考え始めた。

そのときのことだった。俺の目の前に一人の少女が立った。
「ったく、何の用だ・・・？」
ようやく、思考を始めだした頭をわざわざ一時停止させると、俺は目の前を見た。
透き通るようにきれいな黒色の長髪に、透き通ったクリアブルーの目、そして、おれと変わらないくらいの身長。面倒見がよさそうで、優しそうな顔立ち。
マリア。
昔から変わらない俺にかけがえのない幼馴染の姿がそこにはあった。
　それは、俺が十三歳になった年の夏。
俺はマリアに出会った。
俺は、いつものように森に行って修行をしたり、木の実などを採集したり、鹿などを追ってはとらえたりしていた。
「落ちるーーーー。危なーーい。」
そんな俺に対して、突然上から、そんな声が聞こえてきたが、その声が聞こえてきたのはどうやら本当にぶつかる直前だったらしく、反応が遅れてしまい、俺の頭には空から降ってきた女の子が直撃した。
「ぐはっ。」
俺は突然の上からの衝撃で、地面に叩きつけられる。その直撃を受けた頭は割れてはいないものの、地面への衝突もあったため、激痛が走っている。
どうやら、女の子は無傷のようだった。ただし、高いところから落ちてきたせいだろうが、気を失っている。その女の子を見つめる。黒髪の艶やかな長髪で、真珠のように白く輝くその顔は、きれいだった。思わず、見とれてしまうほどに。
どうしたものかと少し迷ったが、さすがに、こんな場所に一人の少女を放っておくわけにもいかなかったので、とりあえず、俺は家までその女の子をかついでいくことにする。
かついでみると、思ったより、重くはなかった。一人の少女として

は、これが平均ぐらいの重さなのではないかと思う。だが、実際にどうなのかは俺と同い年ぐらいの女の子を持ったことがこれが初めてなので、わからない。
とりあえず、これが人目のない森の中であったのは、良かった。こんなふうに、女の子を担いでいることはなんとなく恥ずかしかったからだ。
家からこの森までかなり距離があるので、俺と同い年くらいの女の子をかついで運ぶなんて、俺みたいに鍛えているようなやつじゃなかったら無理だろう。
そう考えていると、何故彼女は、こんな森の奥深くに、という疑問が浮かぶ。
俺のように、修行しているようなやつには、見えないし・・・。
そんなことを考えているうちに、もうすぐで森を抜けられる位置まで来ていた。
そこで、木陰に潜む何かの気配に気づいた。
「一体なんだ。」
俺は瞬時に警戒態勢に入る。集中して、目を閉じる。自分の耳以外の感覚を停止させる。そのかわりに、全ての感覚を耳にあてる。たとえ、木陰に潜んでいたとしても、呼吸はしている。風や無視などの鳴き声に混ざる呼吸というイレギュラーな音を探す。
見つけた。これは、おそらく、人間の呼吸音。
潜んでいるのは、まぁ、だいたい、山賊とかその辺のやつらだろう。だが、問題となるのは、数だ。
俺は耳の感覚をもっと鋭く研ぎ澄ます。
二、四、六、八・・・。
合計三十の人間が木陰や、地面の下に潜んでいる。
おそらく、誰でもいいから、来たら襲おうと考えていたのだろう。
まだ、その山賊と思われる集団はこちらに気づいていない。
なら、チャンスだ。
耳に集めていた全ての感覚を、元の状態に戻し、目を開く。

そして、樹の彼女を立てかけ、その後、体中にある細胞に火を灯すような感覚の魔法を発動しようとする。その魔法は、俺が編み出した中でも、お気に入りのものであった。なぜなら、森と家とをかなりの短時間で行き来することが出来るからだ。
だが、今回はそれを使ってはいなかった。
使ったまま、一人の少女をかついで行ける自信がなかったからだ。
俺は体中の細胞が活性化したのを確認し、前に進む。俺が近づいてきたのに、気づいてから、木陰などに潜んでいたやつらは出てくる。それぞれが斧や短剣といった武器を持った俺の予想通り、山賊だった。
だが、そんな武器は俺に対しては無意味であることを彼らは知らない。
それは、無論、山賊なんかには、俺の速度に付いてこれるやつがいないからだ。次々と、目の前の山賊をなぎ払っていく。その俺の脅威のスピードに山賊たちは驚愕して、逃げ出そうとする。
「てめぇら、こんなガキ相手に逃げたら、あとで、どうなるか、分かっているよな？」
リーダー格らしき男がそう告げる。すると、今にも逃げ出しそうだった山賊も、顔を青ざめさせ、狂ったように襲いかかってきた。だが、そんなでたらめな攻撃は俺に当たるわけがない。
かわして、攻撃の際に生じた隙を的確に突いていき、すぐに、そんな山賊たちを地面に積み上げていく。
俺の圧倒的なスピードについて来れるやつはいないようだ。
だが、最後のリーダー格が残るのみといったところで、体がだいぶ疲労してきていた。
魔法で細胞を無理やり魔法で活性化させているだけなので、細胞自体は変わっていないのだから、激しい消耗になるので、当たり前なわけだが。
だが、そんなしんどい状態であっても、表には出さない。まるで、全く疲労していないかのごとく。

「あんたの部下、まだまだだなぁ。」
「ああ、そうだな。この部下たちは、てめぇを殺してから、仕置きが必要だろうな。」
残っているのが、やつ一人だというのに、やつの余裕の笑みは消えない。
「何故、そんなにも余裕なんだよ。まさかと思うが、この状況で、俺に勝てるとでも、思っているのか？」
「ああ、勝てるさ。」
そう言って、男は動き出す。それは獅子のような獰猛な動き。大きく鉄槌を降り構えると、俺に向かってたたきつける。
今までの山賊のように、攻撃を受け流すように、避けようとする。
だが、それは、今までのでたらめな攻撃とは、全く違った。
重く、鈍い音が俺の顔のすぐ横を通り抜ける。
その直後、地面に鉄槌がぶつかるとてつもない音がして、思わず横を見る。
「地面がえぐれて・・・いるだと。」
あまりの驚きに声を出してしまう。おそらく、あれを喰らったら、まず、原型は残らないだろう。
「とんでもねぇ、怪力だなぁ、おい。」
それにこの命中精度。次は避けられるかは分かったもんじゃない。
だが、あの槌に注意していれば、大丈夫なはずだ。
だが、そう思った矢先、蹴りが俺の鳩尾に対して、めり込む。
「ぐはっ。」
あまりの威力に、体は宙に浮き、吹き飛ばされる。そして、轟音とともに、樹に激突した。
全身に響き渡る激痛により、気を失いそうになる。
そんな俺の目の前一人の少女が立つ。
空から降ってきた少女。木に寄り添わせて寝かしておいた少女。そんな彼女は、俺の知らない魔法を唱えていた。おそらく、オリジナルの魔法。それを認識すると同時に、この少女がかなりの魔法使い

であるという事実を悟る。
周りに、なにやら、よくわからない煙が充満していく。これは、吸ってはならないものだと体が叫ぶが、力が入らない。
体の制御が少しずつ、だが、刻一刻と効かなくなっていき、意識がどんどん遠のいていく・・・。
そして、俺の体の制御が完璧に途切れようとしていたちょうどその時。
「起きろーーーーーーー！」
そう耳元で突然叫ばれた。
俺はその叫び声で、脳から送り出される信号を体が受け取り始めたのを感じる。だが、あまりの声のでかさにばらく耳鳴りが続く。
「声でかすぎだろ、俺の耳の鼓膜をつぶすつもりか、アホが。」
思ったことを素直に言ってやった。すると、女の子は明らかにむすっとし、俺に極限まで顔を近づけて言った。
「だれがアホなのかな。よくわからないな。まぁ、もし、もう一度言ったら、炎の魔法で丸焼きってことで。」
そうそれは顔はにこやかに、だが、目は笑ってはいない。てか、言ってることがすさまじいだろ。丸焼きってオイ。
俺はは素直に謝らなければ、本当に丸焼きにしてきそうなくらい殺気を放つ少女に対し、素直に謝ることにした。
「アホなんて言って、すまなかった。なんでも言うことを聞くからゆるしてくれ。」
このとき、おれは思った。なんで、俺、出会ったばかりの女の子に謝ってるんだろ、そして、無力だなぁと。
「わかればいいのです。何でもするの？じゃあ、私は疲れたから、私をかついで、両親が今行っているガイアスって人の家まで連れてって。」
とりあえず、なんとかこの女の子の機嫌を取り戻すことに成功したようだ。
まったく、ひやひやさせてくれる。

てか、ガイアスって俺の親父の名前じゃねぇか。そういや、今日は客が来るって言ってたような・・・。
「ガイアスは俺の親父だから、そこまでの道なら、行き慣れているから、あと二十分ぐらいで着くことができると思う。そういや、自己紹介がまだだったな。とりあえず、俺の名前はクレイデスだ。お前は？」
「私？私はマリア。君はクレイデスっていうんだ。でも、なんかクレイデスって言いにくいなぁ。」
そう言って、なにやら考え始めた。
何を悩んでいるのだろうか。名前だったら、そのままクレイデスと呼べばいいではないか。
「そうだ、これから君の事クッスーって呼んでいい？クレイデスを略してクッスー。いい感じのニックネームでしょ？」
驚いた。俺に対してこんなふうに接してきたやつは初めてだ。
俺は普段、修行してばかりで、人とあまり接することはなかったし、その年代の子が普通は何をしているのかを知らなかった。
それゆえに、人と話したとしても、話があうことはなかった。だが、それだけなら、良かったと思う。
過去に俺は一般の闘技大会に出て優勝してきたことがあった。そんな出来事によって、俺の孤独はいっそう加速しいった。そう、親父とかその大会の主催者にはいいように思われた。だが、俺の近くにいる他のやつらの中には、強さを恐れたのか俺を避けるようなやつも出てくるようになった。
そう、俺は、一般の大人よりも強くなっていったことにより、孤独になってしまったのだ。
力がありすぎたが故に、人から恐怖の存在として見られた。
俺は、思わず聞いた。
「俺の強さをみて、まだなお、俺が怖くないのか？」
マリアはすぐ答えてきた。
「何が怖いの？強いっていうのは素晴らしいことだと思うよ。だっ

てさ、強ければ大切な人を守ることができるじゃん。」
そんな一言を言ってきた。
それは、俺が心に誓い、それでも、記憶から消えていたこと。
俺は、人から避けられるようになってからというものの、今まで以上に修行に没頭していった。
それは孤独をまぎらわそうとしていたからかもしれない。
だが、それは俺が忘れていたからだ。おばが盗賊に襲われたとき、おばは俺をクロゼットの中に隠れさせ、山賊と戦って死んだことを。
その時、俺に出来たのは、死にゆくおばに対して何もすることができず、ただ、クローゼットの中で、震えていることだけだった。
俺はそのときの自分の無力さを悔やみ、修行を始めたのだった。
そう、力は大切な人を守るためにある。
それが、人から恐れられるようなものであったとしても。
「マリア、ありがとう。俺は大切なことを忘れていた。君のおかげで思い出すことができた。これからもよろしくな。」
「えっ。うん、何のことかよく分からないけど、どういたしまして。私が気を失っている間、私を山賊から守ってくれて、ありがとうね。これからもよろしく、クッスー。」
それから俺たちは家に帰るまでの道のりで、連絡先を交換したり、たわいもない話をしているうちに、家にたどり着いた。
「ただいま。親父。」
「おう、おかえり。おや、そんなかわいらしい女の子を連れて、どうした？」
「マリアっていう子だよ。あの森でいつものようにしていたら、出会った。」
「あの森って、あのお前がいつも言ってるあの森でか？」
心底驚いたような顔をして聞く。そんな親父の反応を見て、俺は思い出す。あの森が世間一般では、迷える森とよばれる魔境であることを。
あそこの森は、一小隊の軍の正規軍であろうと、生きては出られな

いほどである。そんな危険な森に何故、こんな少女がいたんだろうか。
気になりはしたが、聞きはしない。あの森に来るのは、なにか理由がある。俺のような現実から逃げる者から、家族を守るために進んだ者もいる。
あの森はそんなところなのだ。
そう、あの森行く人は心に何かしらの傷を負っているのだ。
「とりあえず、今日、うちに子のこの親が来ているみたいだけど、いるか。」
これ以上この話をしないための無理やりな方向修正だったが、そんな俺の心を知ってか話の展開をずらすようなことは親父はしなかった。
「ああ、夫婦が来ている。ちょっと呼んでこよう。」
「いえ、いいです。私が直接行くので、母と父とがいる場所を教えてください。それと、そそっかしい別れになりますが、さようなら。」
そう親父に一礼し、別れを告げると、俺に向きなおった。
「今日はありがとう。また、会えるといいね。」
「ああ、また会えるさ。」
そう言うと、マリアは微笑み、帰っていき、俺は手を振って、見送った。
マリアがいなくなったのを確認してから、突然真剣な顔になって、親父の方に体を向けた。
「おばが死んだときの記憶が、マリアに声をかけられるまで、消えてていたのは、何故だ？」
それを聞いた瞬間、親父の表情は急に深刻なものに激変した。
「思い出してしまったか。なら、仕方がないな。言っておく、今から言うことは全て真実だ。嘘だと思うかもしれないが嘘では決してない。心して聞けよ。お前がおばの死に関する記憶を失っていたのは、おばがお前にかけていた魔法の効果だ。おばは自分自身が早く

死んでしまい、幼いお前を悲しませるというふうにはしたくなかった。それゆえに、おばは、自分が死んだ場合お前の記憶から自分の存在していたという事実を消し去るような魔法をかけていたんだ。しかし、おばは言っていた。お前は特別な子だと。おそらく、この魔法をかけたとしても、この子の持つ特別な力によって、完璧な記憶の消し去りに失敗するかもしれない。そのときは、サポートまかせたよ、とな。確かにお前に特別な力があるのは、実際俺が確認できたし、知っている。今わかっているお前の能力は、魔法の効果を弱める、または消し去る、吸収するといったことが無意識のうちにできるということだ。おそらく、この力がおばの魔法の効果をゆがめたのだろう。そして、今になって、そのおばがお前にかけた魔法の効果を全て消し去ったのだろう。」

「そう・・・だったのか。だが、だとしても・・・。ありがとう。じゃあ、もう今日眠いんで寝る。おやすみ、親父。」

そうあからさまな嘘を言って、俺は逃げるようにリビングを離れて、自分の部屋に入り込んだ。

そのまま、木製のベッドに寝転がった。寝てしまって忘れない気分だった。だが、寝ようとはしても、眠ることはできなかった。

それはそうだろう。

おばが死んだことに関する記憶が消えていたことについて聞いたら、予想外の答えが、返ってきたのだ。

俺に特別な力が宿っている。

それだけのことだとも思いもするが、やはり重要な気がする。そして、これは考えすぎかもしれないが、俺がおばが殺されたことに関して無関係じゃないかもしれないと感じる。

でも、何故だ。何故俺にこんな魔法を打ち消すという力が宿っているのだ？

しかも、無意識で発動するようなものだって？

俺はいったいなんなんだ？

そうして、考え続けている俺に突然、眠気が襲い掛かる。だが、俺

はその眠気に対抗することができず、
眠りについた。

始まりの少女（2）

そして、次の日の朝、自分の能力について調べるため、俺は、ハイデア王立図書館に向かった。
図書館なんて入るのはこれが初めてだった。自分の周りに見えるのは本、本、そして、本だった。
「こりゃ、参ったな・・・こんだけ本があったら、俺の求める本にたどり着くまでどれだけかかるんだよ・・・」
来て早々意気消沈。これからが思いやられる。
そんな俺は昨日、空から降ってきて、色々あって俺と友人となったマリアに出会った。
「やぁ、マリア。」
「あっ、クッスーじゃない。おはよー。」
どうやら、クッスーというあだ名は決定のようだ。まぁ、別にいやというわけでもないから、気にはしない。
「マリア、よくここに来るのか？」
「ええ、よくっていうか、最近は毎日来てるわね。この図書館は王立ということもあって本の数も多いから。」
「じゃあさ、聞きたいことがある。えっと・・・。」
どう聞いたら、いいものか迷った。俺に特別な力があることについて話しても良かったが、まだこの能力について確信がなかったから、話そうにも話せない。
さらに言うと、もしかしたら、おばは俺の能力について知っている何者かにより、殺害されたのかもしれないという可能性がある以上、伏せておくべきか。
「ん、何？もう少し大きな声で言って。」
「えっとさ、俺、最近魔法について勉強してるんだけど、うわさで、魔法を吸収したり、打ち消したりする魔法があるって聞いたんだけど、それに関する本がどこにあるか知らない？」

「魔法を吸収する魔法？珍しい魔法だね。うーんと、魔法を吸収する系の魔法はたぶん、こっからまっすぐ行って、二番目の棚の奥で左に曲がって、三つ進んだとこを右に曲がって、左手のとこに確か一、二冊あったはず。でも、魔法を打ち消すなんて聞いたことがないなぁ・・・。いや、ちょっと待った。そういえば、どっかの英雄の話に出てきていたわね。確か本の名前は・・・。『剣王と悪魔』だったと思う。それはさっき言ったところから、まっすぐ行って、三番目のところを右に曲がって、十番目のところを左に曲がったところの右手にあったはずよ。」

「そうか、ありがとう。マリア。助かったよ。じゃあな。」

「じゃあね、クッスー。」

そして、俺はマリアに指示された通りに進んでいった。すると、そこにはいっていた通り本があった。

それにしても、すごい記憶力だ。

こんな広い図書館にある本の位置を記憶しているなんて。俺には絶対無理だ。

そんなマリアの記憶力に感心しつつ、俺は『魔法吸収学専門書』という、いかにもって感じの本を見つけ、読んだ。

それによると、どうやら、魔法を吸収する方法は三つだという。

一つ目、もともと属性吸収の体質をしている、または装備や魔法をしている場合。この場合に関しては、火や水などの属性によっては吸収できるのがあったり、弱点となっている。属性がある魔法じゃないと吸収できない。

二つ目、先の民の末裔である場合。先の民とは、剣王を指す。しかし、今となっては剣王の血は途絶えているので、二つ目の場合はないと言われている。

三つ目、メフィストである場合。または、メフィストの独自の魔法を受けた場合。

しかし、どれにもあてはまりそうになかった。一つ目のように、魔法の中に弱点があるというわけではないし、二つ目は既に絶えた血

の話だから、論外。三つ目のメフィストに関しては、どんなやつらかは知っているが、見たこともないし会って話したことはない。
もう一冊似たような本があったが、似たり寄ったりの内容だった。
そして、俺は魔法を打ち消すことに関する本『剣王と悪魔』をマリアの指定した位置に行き、見つけた。
どうやら、昔にいた剣王に関する内容のようだ。本の内容はこんなものだった。
　昔、そうそれは、ハイデア王国が造られてから、百年という月日が過ぎ、ハイデア王国の初代の王が、二代目の王に即位した頃の話だ。
突然王都に化け物が現れた。それは、言葉通り突然、何もない場所からいきなり現れ、化け物たちは人を襲い、喰らっていった。
無論、王国も黙って見てはいなかった。その頃の王国の騎士団を派遣し、一気に戦いを収束へともっていこうとしたのだが、化け物たちの強さは常軌を逸していた。騎士団は壊滅させられ、その騎士団も無論悪魔たちに喰われていった。
そこに、一人、そして、一本の剣を携えて、金色の瞳、透き通った髪は白というより、銀に近い長い髪をした男が現れる。
そして、男は人間とは思えないほどの強さで、化け物を一瞬にして、なぎ払っていった。化け物たちは、数百といたが、その男はその数百匹を全てを殺した。
その誰もいない戦場に声が響き渡る。
「殺す、殺す、殺す。貴様はなんとしても我ら悪魔が殺す。」
それに、その男は笑いながらこう返す。
「殺せるもんなら、殺してみろよ。こんな楽勝に倒せるようなやからに俺は殺されはしない。」
「貴様のような人間風情がいきがるなよ。」
最後にその一言だけ残して、悪魔の気配は消えた。
そして、彼は、王国を救った英雄として、城に招かれた。
そこで、彼はハイデア第二代目の王カリスに『剣王』という唯一無

二の称号をもらいうけ、彼はそれ以来王国を守り、王国に魔法という超能力を広めた。
ある日彼は戦場にいた。今回の敵となるのは、比較的小さな国で、だれもが認める勝ち戦であったために、油断していたのかもしれない。
そこをうまく突かれ、剣王の率いる軍の第三部隊が全滅させられた。
「あんな小国が何故？もしかしたら、やばいのを敵にまわしているんじゃないか。」
一人がそんなことを言い、恐怖は伝染していった。
剣王のすぐ近く、右で北に向かって巨大な一筋の光が迸った。光が消えると、そこにいたはずの数万の兵が一人残らず消えていた。
ついに、兵たちの恐怖が頂点に達した。残りの兵が死に物狂いで逃げていく。
「おい、お前ら、逃げるんじゃ・・・・」
そう叫んだが、その続きは轟音によってかき消された。またも一筋の光が生じて、今度は兵の逃げた方向へ、先ほどのものとは違う方向から放たれた。
「おいおい、ちょっと待ってくれよ。このままだったら、この軍は壊滅・・・するだろうなぁ・・・やべぇなぁ。俺が本気ださなけりゃ、終わりだな。」
そう力なくつぶやく。そして、考える。こんなにおかしな破壊力を持ったものを撃ってくるような勢力について。
といっても、知っているものでは、一つしか当てはまるものはない。
悪魔だ。
そして、剣王は一発目の光が放たれた方向を見る。
そこにいたのは明らかに人間とは違う化け物だった。
それは頭に角が三本生え、目が二つ、腕が四本、足が3本で気味の悪いものであった。
そして、二発目を放ったほうを見る。そこには、ぱっと見た感じでは人間とは変わらない化け物がいた。

二つの目に二つのの腕、そして、二本の足。似ているなんてレベルではない。まんま人間だった。
しかし、遠くからでもわかる。そいつから、殺気、嫉妬、怒りといった負の冷たい感情が、激流となって流れ出ている。
「全く、この世界には、どんだけ化け物がいんだよ。」
本当にめんどくさそうにつぶやき、彼は見た目も化け物の方をつぶしにかかることを決める。そして、先制攻撃を仕掛けるため、魔法を唱える。
「我、剣王。古きに我と交わした契約を今こそ果たせ、炎神アグニ！」
そうして、俺は昔に倒して、召喚の契約を結んだ炎神を呼び出す。アグニは全てを焼き尽くすと言われる業火を放った。それは、誰にも防ぐことはできない地獄の業火。
しかし、その業火は消えた。化け物は四本の腕うちの一本を振る。化け物がしたのはそれだけだった。
それは、剣王自身研究はしたが、できなかった、魔法を打ち消すということの理想の状態だった。しかし、今は感心している場合ではない。
体勢を整え、剣を構えて突き進んでいった。
剣王が化け物に剣で斬りかかろうとした。そのときだった。
鈍い音がした、その直後、地面が赤く染まる。
それは、まぎれもない自分の血であった。
剣王の心臓が背中から貫かれ、剣王はあせる。気配は一切なかったのだ。
だが、そこにいたのは、先ほど見た人間みたいなやつだった。
しかし、だとしても有り得ない。奴と剣王との距離はこんな短時間に詰められるような距離ではなかった。
「くそが・・・。」
「言っただろう、貴様は何があろうと殺すと。」
そうして、剣王は殺された。

その後、悪魔は剣王の血筋の者を全て殺した。
だが、人型の悪魔といかにも化け物といった感じの悪魔は争い、人型の悪魔はもう一方を殺し、喰らったのだという。
とまぁこんな感じの話であった。
そこで、俺は考える。
悪魔が使った魔法を打ち消す力について。
おそらく、この話で最後に剣王が使っていた召喚魔法は現代のものであろうと、上にいくものはないだろう。
それを打ち消すとなると、相当なものだと思う。しかし、原理が全くもって、わからない。だが、それは当然のことでもあった。魔法の生みの親である彼にすら分からなかったのだから。
　そうして、結局分かったのは、悪魔は人間とは桁違いの存在で、悪魔が使った力が俺に宿った力と似ているということだけだった。
そして、午前中に調べものを済ました俺は、午後になると、マリアに声をかけ、俺からマリアには体術および剣術を、マリアから俺には魔法を、教えあった。
そして、それ以降、俺は週一のペースで図書館を巡った。
それ以外の日はマリアと修行をした。
そんな日々がしばらく続き、季節は夏を終える。
　そして、秋に入ってから少したったときのこと、俺とマリアはいまだに行ったことの無い山に遠出した。
「ねぇねぇ、クッスー。ここってなんていう山なの？」
「うーんっと。クロリス山だな。ここは、自然が豊かできれいだって聞いたから、来てみたけど、本当にすげぇ景色だなぁ。」
夏の暑さも消え、代わりに、体が冷える風が吹いている。周りは落ち葉のじゅうたんが広がっていて、木は赤や黄色などの葉で覆われていた。
その景色は、空の蒼と雲の白があって、一つの色が飛びぬけていいというわけではなく、それぞれが、お互いの色を高めあっており、全体としてのバランスが良くなっていた。そんなあまりの美しさに

見とれて、ぼうっとしてしまったくらいだ。
「私、クッスーとこんなきれいな景色見れてうれしいな。」
「ああ、俺もだよ。マリア。」
そうして、俺たちが見てまわっているうちに、急に雲行きが怪しくなりだして、すぐに雨が降り出した。
「おいおい、朝はあんなに天気が良かったのに。」
「全くよ、なんで、山の天気ってこう変わるのが速いのかしら。」
文句を言いながら、走っていると、マリアが言った。
「ねぇ、クッスー。あの洞窟で雨宿りしていかない？」
マリアが指した方向を見てみる。すると、そこには、雨宿りが出来そうな洞窟があった。他に行くあてとかもなかったので、これに入り込むことに決める。
「いいな。じゃあ、そうしよう。」
俺とマリアは急ぎ足で洞窟の中に入っていった。
その洞窟の入り口は狭く、大人がぎりぎり入れるくらいであった。中はというと、想像よりも広く、大人三人程度だったら普通に並んで通れる程度の広さで、雨宿りにはちょうどいい感じであった。
突然の雨のせいで、俺とマリアはずぶ濡れ状態であった。雨が降り始めてから、少ししかしていないのにこんなに濡れているなんて。それにまずいと思う。ここは山の中。気温は秋とは言え、かなり低いものだ。それに、着ている服が濡れているという状況。かなり肌寒く感じる。
「さすがにこのままずぶ濡れの状態でいるのはまずい。着替えようと思うが、着替えは持ってきているか？」
マリアはがさがさとかばんの中を調べている。調べ終わると、決まりの悪そうな顔をして言った。
「なんか、持ってくるのわすれちゃったみたい。」
さすがにいつやむかわからないような、雨がやむのを待っている間、そのままの格好でいさせるのはまずい。
「そんな、ずぶ濡れの状態でいて、体調が悪くなってはまずい。俺

の着替えの予備二つあるし、それを渡すから着替えたほうがいい。
体に水がついたままでいて、それのせいで体が冷えるのはまずい。
さらに言うと、ここはある程度高度があるから、気温が低い。まずないだろうが、最悪、凍死してしまう可能性すらある。男モンですまないけど、ほら。あと、タオルも渡すから、それで、体についた水もふき取っておくんだ。」
そう言って、俺はかばんから着替えとタオルを取り出し、マリアに渡した。
「ありがとう、クッスー。じゃあさ、着替えるから、私がいいって言うまで、こっちを見ないでね。」
「分かった。」
そう言って、俺はマリアとは、逆の方向に体の向きを変えた。そして、しばらくたつと、マリアが俺の肩をたたいた。
「いいよー。」
許可を聞くと、体の向きをマリアのほうに変える。
「分かった。大丈夫か？」
そう言って、振り向くと、タオルで髪の毛を拭いているマリアがいた。黒髪のところどころにつく水滴は、そのきらめきで、黒髪の美しさを際立たせている。
「大丈夫だと・・・思う。まぁ、サイズが合わないとかはあるけど、それは非常事態なわけだから、仕方ないしね。他は何も無いと思う。」
「ありがとう。それにしても、よくこんなに持ってきているね。」
「ああ。昔さ、親父と山に行くことが何回かあったんだけどさ、そのときに、『山に行くときは必ず何が起こっても大丈夫なよう、予備なり、必要なものは必ず持っていけ。』ってさ、厳しく何度も何度も言われていたからさ、山に行くときは必ず色々、予備なり必要なものを入れるようにしているんだよ。」
「そんなこと言われてたんだ。ありがとう、クッスーが色々持ってきてくれたおかげで、助かった。」

「困ったときはお互い様だしな。それに、マリアが洞窟を見つけていなければ、こうして、雨宿りもできなかったし、ありがとうな。」
そう言って、俺はかばんの中から、あるものを取り出した。
「それって、なぁに、クッスー。」
「これは、こいつに魔力を供給すれば、このガラスのなかで、火をおこして、外気を暖めるっていう代物でな。一応、炎の一番低レベルな魔法くらいの魔力で確か五時間はもつから、それの四倍くらいの魔力を俺がこれに供給すれば、朝までもつだろう。」
指に魔法のために使う奥底に宿る魔力を集めていく。そして、ある程度集まったのを確認してから、供給を始める。そうすると、ガラスの中に火がともり、外気をどんどん暖めていった。
念のためこれを入れておいて、良かったなぁと思う。
前日持って行くものを決める際に、秋で少し肌寒いかもしれないから、これを持って行こうか、それとも、外気を冷やすタイプを持っていくべきかと悩んでいたが、結局、秋はたまに寒いし、山寒いしってことで、こっちに決めた。
「あったかいね。冷えていた体も、徐々に温まっていくのを感じるよ。」
「確かにそうだな。これは、持って来ていてよかった。」
そうして、体をしばらくの間温めておいたが、それでも、雨は弱まるどころか、強まっていくばかりだった。
「雨やまないね・・・」
「そうだな・・・。もしかしたら、今日はここで野宿かもな。」
「えっ。うん、確かに・・・そうだね、さすがに、この雨の中降りていったら、まずそうだし。でも、私、寝る用の布団なんて、持ってきてないよ。」
「じゃあ、俺が持ってきた布団渡すよ。」
「でも、それじゃあクッスーにわるいよ。」
俺のことを心配してくれる。やっぱり、優しいいいやつだと、こんなときではあったが、ふと思った。

「いいって。おれは気にしなくていいよ。」
「でもぉ・・・。あ、そうだ。いいこと思いついた。その布団借りるね。」
そう言って、布団の中をなにやら手で探っている。しばらくの間、それを続けていた。そして、それを終えると、こっちを向いてきた。
「うん、これなら、入れるな。二人で一つの布団に入ろうよ。そうしたら、二人とも、布団に入れるからさ。ね、いいよね。」
「いいって、気にするなって。」
「ね、いいよね。」
ぐいっと顔をこっちに近づけ、迫られた。こういうふうにきたときのマリアは必ず引かないことを俺は、知っているから、素直に負けを認めることにする。
「分かった、じゃあ、一緒に寝ようか。」
「うん。じゃあ、一緒に寝よう。とりあえず、護衛用の召喚魔法と、誰にも見えなくする隠密魔法、最後に、この洞窟に対して結界を施しておくね、そうしたら安全だし。」
「じゃあ、俺は魔物などの存在をキャッチするための糸などを張ってくる。」
そう言ってマリアは、魔法の詠唱を始めたのを見て、俺は糸を張り巡らせた。そうそれは、獲物を捕らえようとする蜘蛛のように繊細に。
そして、全てが終わり、二人とも布団の中に入った。布団に入って、しばらくの間、恥ずかしさやらなんやらで、沈黙が続いた。
「ねぇ、クッスー。クッスーは私のことどう思ってる?私さ・・・なんかクッスーのこと好きになっちゃたみたい。」
「ふぇっ。」
沈黙を破り、彼女が突然言い放ったあまりに衝撃的な話に驚きのあまり、声が出てしまう。そして、当人はというと、見るからに、顔を真っ赤に染めて、うつむいている。
俺のことが好き・・・?

なんで、こんな俺なんかを。最初はそう思った。純粋に。誰でも思ってしまうだろう。だって、突然、友人に告白されれば。だが、俺自身好きってのが、どんな感じなのか、分からない。そう考えている間にも、マリアの話は続いていく。

「クッスーに会えない一週間のうちの一日があるじゃない。あの日はいつも、クッスーに会いたい、話をしたい、一緒に修行したい、遊びたいって思うんだ。そして、クッスーに会えないっていう寂しさを紛らわすために、クッスーと私の写真を見たりさ、魔法学の勉強をやって、明日会うまでに新しいのを習得して、おどかしてやろうとか考えているんだ。私、クッスーが大スキだよ。」

一人の少女が自分の気持ちをぶつけてきてくれている。

俺は心を開いてくれるような人がいるってことだけでも、うれしかった。

そして、俺も似たような感情をマリアに抱いている。今まで生きてきて、こんなことは初めてなので、よく分からない。だが、これが好きってことなのだろう。

ゆえに、そう言ってもらえて非常にうれしかった。

だから俺は、

「俺もマリアのことが好きだ。俺はあの出会ったときに、マリアは俺に大切なことを思い出させてくれた。そして、俺と正面から向き合ってくれた。その時からだろうな。俺はこういう人は仲良くなれると思った。そして、俺もマリアに会えない、あの日は寂しくて、胸が苦しくてさ、辛かった。」

俺は、心の底からマリアに対して抱いている感情をぶつけた。そのときの俺は、自分でも分かるほど、顔を真っ赤にしていただろう。顔が燃えるように熱い。そうすると、マリアも語りだしていった。

「私もね、あのクッスーと初めて出会ったときさ、心の中は泣いてたんだ。私さ、魔法が好きだった。だから、魔法について小さい頃からずっと両親にばれないように勉強してさ、習得して、使えるようにしてきていたんだ。両親は根っからの魔法嫌いで、私が魔法に

ついて勉強していること、かなりの高度な魔法師であることがばれたときは、こっぴどくしかられてさ。『前に言っただろう。魔法なんか勉強するなって。約束を守れない子供なんか・・・』そう言って怒りをぶつけてきたんだ。それでも、私は魔法の勉強をやめようとはしなかった。だって、魔法が好きなんだから、仕方がないじゃない。私は親を恨んだよ。どうして、私を理解してくれないのってね。そして、私は君と出会った。君は私に『俺が怖くないのか』って聞いてきたじゃない。あのときさ、私は思ったんだ。この人も私と同じように何か別のことで、苦しんでいるんだって。この人なら、私のことを分かってくれる。そう思ったんだ。そして、突然恨んでいた父親が病気で死に、それを追うように、母親も死んでいった。なんでだろうね。あんなに恨み続けてきたのに、親だからかな、悲しかった。そして、泣いた。涙が滝のように流れ出た。それから、あなたのお父さんのガイアスさんが私を引き取ってくれて育ててくれた。それからは、クッスーと過ごす時間もすごく増えたよね。それで、私はクッスーと過ごすうちに、本当に好きになったんだ。」

「マリアは優しいな。俺はそんな親だったら、すぐにでも、殺していたかもしれない。それに、死んだのなら、ざまぁみろって思うかもしれない。」

「いや、君はそんなことはしないし、そんなふうには思わないよ。だって、君の優しさは私がちゃんと知っているんだから。そう、君は優しいよ。」

「ありがとう。マリア、君は俺のことを好きになってくれたし、俺の愛する人だ。だから、もう隠すのはやめることにする。話そうと思うよ。俺がいったい一週間に一度どこへ行っているのか、そして、俺についてを。」

それから、俺はマリアに全てを話した。俺に宿る特殊な力についての全てを。

「ありがとう。その特殊な力がなんなのか、そしてそんな力が宿る自分がなんなのか不安で辛かったんだね。でも、これからは、私と

一緒にその理由を探したりさ、二人で一緒にすごして、楽しくやったりさ、幸せになろうよ。」
ああ、俺は幸せだな。こんな優しくて、しっかりしている人に好きになってもらえて、俺の存在を認めてもらえて。心の奥深くからそう思った。
「ありがとう・・・、ありがとう。ああ、そうだな。一緒に調べたりさ、一緒に幸せになっていこうな。」
そして、俺たちは、色々話している間に、いつの間にか寝ていたらしく、起きると、日の出ごろで、雨がやんでいた。
顔をずらして隣を見てみると、そこには、マリアの顔が。
その寝顔は、まるで、どこか別の世界にいる妖精のようで、あまりの美しくさに俺は、しばらく見惚れてしまった。
だが、俺がその寝顔に見惚れてる間に、マリアは、手を大きく伸ばし、眠そうに目をこすって、
「ふぁーあ。おはよう、クッスー。」
そう言ってきて、俺はそのマリアのかわいらしい一面を見ることができて、うれしく思いながら、言った。
「おはよう、マリア。どうやら、雨も俺たちが寝ている間にやんだみたいだから、帰ろうか。」
「うーん。わかった・・・」
なおも、眠そうだった。そして、そのかわいらしい一面をもう少し見ていたいという気持ちあったが、それを振り切って、俺はマリアに、猫だましをした。
「ひゃっ！」
「目は覚めたか？」
マリアをどうやら、今ので目が覚めたようだ。
「何すんのよーーーー！」
俺は思いっきりビンタを食らった。
それからしばらく不機嫌だったが、俺が、帰ったら新しい魔法書をおごるというふうに言い、それで解決した。

俺たちは家に帰ってから、ガイアスにこっぴどくしかられた。無論だろう、心配をかけてしまったのだから。
だが、最後に、
「無事で良かった。ったく心配かけんじゃねぇぞ。」
そう一言言い残し、その後、魔法書をマリアに買って、その一件は片付いた。
それから、俺とマリアは毎日一緒に過ごした。
俺の力について調べたり、昔と同じように修行をしたり、たまに遠出したりといった感じで俺たちは幸せであった。
　俺はその冬、俺は自分で世界の仕組みについて調べる力を持つメフィストになることを決意した。
メフィストになることで、おそらく自分の力について新たに分かることも出てくると俺は思った。それゆえの決断だ。
無論、それはマリアに伝えた。すると、マリアは、自分も行くと言った。
しかし、俺は、
「すまないが、マリアは魔法について、もっと研究・開発をしておいてほしい。たぶん、メフィストになる上で、もっと高精度かつ難易度が高い魔法を使わなければならなくなると思う。だが、メフィストの数多い試験の中、そんな魔法は作れないと思う。だからさ、それをマリアにはそれを任せたい。」
「で・・・でも・・・。必要・・・なのよね。納得がいかないけど、そうするのが一番いい・・・のよね。また、メフィストになったら、一緒に幸せになれるよね。」
「ああ、必ず。俺たちは必ず幸せになれるさ。」
　そして、俺はマリアと別れ、メフィストになるために旅に出て、試験をこなしていった。

呪われし悪魔

そんなある日のこと、大きな街で、ある話を小耳にはさんだ。ハイデアに、すばらしい才能を持った魔法述師が現れたみたいだ。名前は確か・・・マリアっていうやつで・・・・というものだ。それを聞いたとき、マリアが俺のために頑張ってくれているんだ、俺も頑張って、メフィストになってやる。と再び決意を硬くさせられたのだ。

そして、一年の月日がたち、　今、俺の目の前にそのマリアがいる。

それに、俺は泣きそうになる。

マリアと別れてからの一年間、マリアのことを考えていないことなどなかった。もう一年も会っていないのだ。

「マリア、何故・・・ここに・・・？」

そして、マリアは涙ぐみながら、言った。

「クッスーがメフィストになるために、旅に出た後、私ね、私に何かクッスーの手伝いができないかって考えてね、メフィストになるための試験について、調べたんだ。今存在するメフィストはもともと才能を持って生まれてきた民族だけで、メフィストの試験を受けて、生きていた人はいないんだってことが書いてあったんだ。それで、私はクッスーと二度会えないんじゃないかって心配になった。でも、私は、クッスーを信じて、魔法学の研究に努めた。クッスーは昔から、結構人のためなら、けんかに走るていう性格だったから、どこかからクッスーのうわさがくると思っていたんだ。でも、何もなかった。かなり心配だった。そして、一年がたった先月、私の信用する部下のラファーガがさ、私のことを気遣ってくれててたみたいで、メフィストについて、調べてくれていたんだ。それで聞いてみると、ある一人の男が最終試験まで生き延びて、今、アルディナにいるってのことだったんだ。それは絶対、クッスーだと思った。

でも、研究所放置するわけにもいかないということで、踏みとどまろうとしたら、研究所のみんなが『ここは任せてください、そして、あなたは、あの人のもとまで行ってください。』って後押しされてさ。いつの間にあんなに成長したんだか。それでさ、みんなの気持ちを受け取って、私はここアルディナまで、来たんだ。クッスー・・・生きてて・・・本当に良かった・・・。」
俺にとって大切な少女を俺のために心配をかけてしまったことに心が痛む。
そして、それと同時に、約束を守り続けて、至高の魔法術師とまで呼ばれるようになって、今、俺の目の前まで駆けつけてくれた彼女に感謝する。
「ありがとう、マリア。こんな一年間も待たせ続けた俺との約束を守って、俺のことを思い続けてくれて。これから、メフィストの最終試験だ、一緒に行こう。」
そして、マリアは、
「うん！」
と力強く答えてくれた。
　俺たちは、アルディナで最終選考試験に向けて、準備を始めた。
油断はできない、俺はそう思う。マリアが見た書物に書いてあったことに正直不安を抱いていた。
俺は知っていたから。
そう、メフィストの試験を受けて、生きて帰ってきたものはいないという事実を。
だが、俺はマリアと過ごせたはずの一年間をメフィストになるために使った。
そして、着々と試験をこなしていったため、表舞台には決して出てこなかったにも関わらず、俺を信じてくれていた。
そんな彼女に応えるために、俺は生きて、メフィストにならなければならない。
ゆえに、俺は立ち止まることは許されない。

細心の注意を払って、この試験に臨まなければならない。
そう、俺の心に再確認しつつ、俺は準備を着々と進めていった。
その時、俺の顔から左の触れるか触れないかのところを一直線に何かが飛んでいった。
風を切る音。
その後それは、壁にめり込む。そして、俺は見る。それは銃弾だった。
「一週間も猶予があるなんておかしいとは思っていたが、まさか、こういうことだとはな。ったく、これも一つの試験か、全く。」
マリアが戸惑った顔でこちらを見る。
「心配するな。ちょっとここで待ってろ。」
そう言って、俺は宿屋を闇に潜む獣のようにすばやく出る。そして、銃弾負が飛んできた方向を見ると、そこに黒装束のゆらめく亡霊にも見える人がいた。
そして、そいつを見た後、周りを見渡す。いつもの習慣だ。特に相手に招かれたときは。一見普通ではあったものの、目を凝らすと、ところどころになにか違和感を感じた。
その違和感が俺には周到に配置された罠であることがすぐにわかった。
言うまでもなく、俺の親父にスパルタでたたき込まれた知識で分かったのだ。
無人島耐久の一ヶ月では何も準備はなしで、本当に死にかけたのが今も忘れられない。
その親父は俺が旅に出る前の三日間、罠のこと、サバイバルの方法、馬の乗り方などみっちり叩き込んだ。方法は、思い出したくもない。
そして、親父は俺が旅立つとき、俺に対して久々に見せる真剣な表情で言ったのだ。
「本当に、メフィストの道を進むんだな。」
俺はそれに対し、力強くうなずき言う。
「ああ、俺自身が決めたことだ。ありがとな、親父。」

「俺がこの三日間をかけて、教えたことは必ず忘れんじゃねぇぞ。これから、外の世界に出て必要なことばかりだ。じゃあ、気をつけろよ。」
そう言われ、親父とは別れた。
罠があると思った方向にクナイを投げ込んでみる。すると、予想を裏切らないとてつもない爆音が鳴り響く。煙があがり、熱風が肌で感じ取れるほどに、吹き荒れる。
だが、そんな異常な威力のものに対して、全く驚きはしない。
「ったく、俺の親父は本職なんなんだよ。まじで。あんな知識必要になるとは思ってもみなかったぜ。まぁでもなぁ、あの三日間に教えられたこと、知識として知っていて実践して外れたことがねぇんだよな。いや、待てよ・・・これは推測に過ぎないが・・・。」
だが、今はその思考を止める。ここで、殺されるわけにはいかないから。進まなければならないから。
そして、俺は走る。無心になって。
そして、見る。目の前にいる男を。
男は予備動作を見せることなく銃を撃つ。
だが、それでも俺にとっては遅い。当然のように余裕で俺は黒装束の男の撃つ弾を切り落とす。銃弾を切られたことには驚いたらしく、男は後ろにさがる。
そのとき、俺は確かに見た。
黒装束の隙間から、男の肩に刻まれたタトゥーを。
そのタトゥーは、大きな門が少しだけ開いており、その隙間から翼が生えているという構造で、確か、ブレイトッドという暗殺組織が入れているタトゥーだ。
昔、戦ったその組織の幹部が言っていたのだ。
その殺し合いのとき、俺は全力だった。しかし、言葉の通り手も足も出なかった。そこへ偶然通りかかった王国治安部隊によって、九死に一生を得た。
しかし、ここには誰も助けには来ない。

だが、俺は負けはしない。もう、死ぬことは許されないから。
誰も、悲しませたくないから。
それから、男は、俺の実力を知ったからか、銃弾を連続で、放ってくる。
一つを避ければ、避けた先からまた一つの銃弾が、迫ってくる。
完璧なタイミングだと思う。
しかし、それゆえに弱点も存在するはずだとも思う。
そして、考える。この完璧と思える銃弾の嵐を避けることを。
避けた先に銃弾が撃たれるような銃弾を・・・？
俺は剣を構え、駆け抜ける。そして、水の魔法を放つ。
「自然の恩恵である水を求めて、俺は今ここに契約を捧げる。スプラッシュデリュージ。」
そう唱えると、水の激流が発生する。水はまるで、意思を持った一匹の竜のように力強く、かつ、速く進む。その勢いのまま、銃弾を飲み込む。
そして、その竜が如き激流に飲み込まれた銃弾は徐々に減速していく。
止められはしないが、リズムは崩せる。
そう、これによって、完璧なタイミングで打ち出される銃弾のリズムを崩し、隙を生じさせる。
それを突くべく、俺は一気に加速する。
さすがに、相手が相手だ。この程度ではひるまない。銃をしまうと、何か、魔法の術式を描きながら、詠唱している・・・。確か、あれは、大爆発を起こす広範囲魔法だ。ゆえに、時間がかかるはずだが・・・。
術式を描く速度と、詠唱が半端なく速い。このままだと、俺が攻撃を繰り出す前に発動する。
「おいおい、ありゃ、まじぃだろ。」
と言いつつも、もう、俺は次の詠唱に入っている。
「大地に眠りし、土の力、岩壁となせ。ストーンウォール。」

そうして、即座に土の壁が生成される。その直後、敵の予測どおりの広範囲魔法による爆発で地面が振動する。
「威力が高い！」
そして、その威力のあまり、土の壁は崩れていく。普通なら、魔法使いを十人以上必要とする大規模な魔法ですら、傷一つ付かない壁が。
爆風が来ることを予想した俺は瞬時に地面に伏せる。すると、頭上を業火の熱気が通り過ぎる。
その熱気が収まり始めたところで、起き上がり、前を見る。
「い、いない！！！」
そこにいるはずのやつはどこかへ、消えていた。
俺が戸惑っていると、聞こえたのは、後ろからかすかだが、何かが振り下ろされる音。
それを左手で持つ銃で受け止め、はじき返し、右手に持つ大剣を叩き込むが、受け止められる。
つばぜり合いは危険を判断し、いったん距離を開くため、男の剣を蹴り飛ばす。そして、俺はバックジャンプをした後、剣を構え、駆け込む。
俺とやつの剣が、衝突する。それは何も音のない沈黙した深夜の空間に響き渡る。
そして、その後響いたのは、銃声。
それは、俺のではなく、やつのであった。黒装束の中にハンドガンを隠しながら撃った。ゆえに、気づけなかったのだ。
俺の脇腹に銃弾が貫通する。
やつの顔に笑みが浮かぶ。
だが、それでも、俺は止まらない。足に力を込めて跳躍し、相手の背後に回りこむと、持っていたクナイをやつの背中に突き刺し、その時の体の勢いを利用して、背中を蹴り飛ばす。
こう動いている間も刻一刻と死は迫ってきている。
おそらく、このまま、出血が止まらない状態が一時間も続けば、失

血死するだろう。ゆえに、一気にかたをつけなければならない。
俺は集中して、意識をリアルから遮断する。
俺は、俺とやつだけの世界いわば二次元的空間に意識を集中させる。
しばらくの静寂・・・。やつは、俺と再度剣を交えるタイミングを見計らっているのだろう。
そして、俺とやつが駆け出したのは、同時だった。剣と剣、剣と銃弾、それぞれの武器が交錯する。
俺とやつの剣が接触するたび、空気が揺れ、大地が振動した。衝撃波で、建物が音を立てて、揺れる。
剣技は、俺のほうがやはり繰り出す速度、力としては少し上だ。だが、俺は決着に持ち込めていない。それは、やつのサイドウェポンの銃があったがゆえだ。おそらく、それ単体ではそこまで強力ではないだろう。そして、避けることも容易かっただろう。
しかし、やつは俺が攻撃を繰り出した後や、攻撃をしようとしたときの絶妙なタイミングで隙を狙ってきている。
このタイプの敵と戦ったことがないわけではないし、苦手な戦闘スタイルであるわけでもない。むしろ、その出会うたびにもう一度戦う気が起きないよう徹底的に叩き潰していったぐらいだ。
しかし、こいつは今まで戦ってきたやつらとは、全くもって格が違う。そもそも、俺の剣を受けてひるまないことがおかしい。
剣の振る向きに対してかかる力の大きさを魔法で常に変化させているのだ。こうすることで、大きく降り構えていなくても、高威力のものになるし、大きく振りかぶっていても、低威力のものとすることができる。
要するに、視覚的に得る情報を無効化しているのだ。人は常に視覚から得た情報を元に行動をしている。
それゆえに、このような視覚情報を無駄にする魔法には弱い。
しかし、こいつはひるむどころか、剣だけでも俺と互角の力を引き出している。それに加えて、銃の狙い、弾のリロードの速さが異常だった。もはや、人ではないと思わせるほどに。

そして、俺は元の力を三乗した巨大な力で、やつの剣を弾き飛ばす。
さすがにこれに耐え切れなかったのか、剣は宙を舞い、それにより、相手に大きな隙が生まれた。。
やつは、バックジャンプをし、俺から間合いを取ろうと、体の姿勢を微妙に変化させた。
しかし、俺はそんなことをゆるしはしない。やつを貫いて、終わりにしようと考える。
だが、そうはしなかった。いや、出来なかったが正しいか。
背後から、冷たくて鋭い、それでいて、一般人では気がつかないようなごくごく小さい殺気を感じた、それゆえだ。
「よぉ、クレイデスとやらよぉ。いやぁ、ハルティアと戦っているとこ初めから見させてもらってたけど、まともに渡りあうどころか、押し負かすとは、さすがに驚かされたなぁ。まさか、気づくとは思ってなかったよ。最後にほんのわずかだけど、出した殺気に。」
ばかな。最初から見ていた・・・だと。そして、殺気をわざと出して気づくかどうか見てみただと・・・。全く気づけなかった。
おかしい、そう俺は思う。
俺はメフィストになるため旅にでるまでの間調べていたのは、単に俺の能力についてのものだけではもちろんなかった。
現在の世界情勢、メフィストについて、魔法学・・・など色々調べては、頭に叩き込み、知識をつけていった。
他には世界の勢力の中に俺を潰すことができるような強力なものがあるか、そして、警戒すべき人物についてというものまであった。
警戒すべきと考えたのは、いくら調べても何も有力な情報が、出てこなかったアーミスティシア帝国、今俺が戦っているブレイトッドと呼ばれる暗殺組織、メフィストの組織グラフォース・・・などだった。
そして、その中でも警戒すべき人物は顔も含め、全て覚えているが、俺の後ろにいた人物はいなかった。
夜の闇よりも深い黒い髪に、鋭く光る金色の目、華奢な体つきの割

には、背負っているのが、そいつの身長より長いか短いかの大剣という異様な感じ。
俺と同じ大剣使いか。
しかし、こんなにも、強そうなやつが俺の情報網に引っかからないわけがないと思う。
だが、現にどうやってか分からないが、引っかかっていない。
相当の手練だ。俺なんかが相手にはならないほどの。こんだけの力を持っていながら、世界に存在すら示さないというのは。
思わず、俺は笑った。
自分に明らかな死が迫っていると分かっていながら。
「何故、笑う。お前は、今から俺たちによって殺されるんだぜ？お前も分かっているんだろ？俺たちにはお前が何をしようと、どれだけ、もがいたところで勝てないってことがさ。」
そんなことは分かりきっていた。分かっているから、笑った。力のない自分に。そして、それでも、あきらめようとしない自分に。
そして、自分を捨てようとする自分に。
現実を見れば、この男たちが言うように俺が何をしようと勝てはしないだろう。だが、俺はもう一人じゃない。守らなくちゃならないやつができてしまった。だから、俺は自分を犠牲にしてでも、守らなくちゃならない。
「すまねぇな、ロドス、マリア。俺は死ぬかもしんねぇ。」
そして俺は、禁じられた魔法『禁法』を唱える。そう、それは俺が旅に出てから、習得したもの。
俺の力を利用するからこそ、使える魔法。
全てを変えてしまう人知を超えたもの。
　それは、俺がメフィストになるため旅に出てから、少したったころだった。俺はアーミスティシア帝国で、人間が創り出した禁じられた魔法または呪いと呼ばれるものの存在について知った。
それは、人間のものとは思えない魔法をも越える力だった。しかし、それは、一時的な力だった。

人間はその大きすぎる力に耐えられなかった。使用し始めて一分間がたったとき、その使用者は狂って死んだ。
そして、それは、禁じられた魔法、『禁法』と呼ばれ、使用はおろか、開発した魔法学者やその弟子たちを全て捕らえ、牢獄に入れ、永遠に世の中から消し去ったのだというふうに表ではされていた。
だが、実際は違った。
俺の情報収集によれば、一人の男はそれを知っていながら、牢獄に入っていないのだという。
なぜ、一人だけ残されたのかについては、大体見当が付く。国がもしものための保険のために残しておいたのだろう。戦争とかで、戦力が必要となったときのために。
俺はそのとき、この力は、俺の特別な力があれば、使用しても耐えられるんじゃないかと考えた。そして、俺にはその力が必要だとも。
それを知った上で、そのころに俺がいたアーミスティシア帝国に、ロドスという男に会うことにした。彼は、アーミスティシアにいる魔法師のなかでも、位は低かった。
しかし、俺がアーミスティシアについて、情報収集して、調べつくした結果、彼がこの国で実は、一、二を争う魔法師であることが判明した。
だが、彼は表舞台には出てこなかった。
そのため、位は低く、魔法師として注目されることもなく、強さも不明確なままだったのである。
目立つわけではないのにもかかわらず、だが、実際の魔法の実力は国の中で一番。
国はそんな彼だからこそ選んだのだろう。
そこで見た彼の部屋は、なんというかすごかった。
扉を開けるとその先に広がっていたのは、魔法学についての本や、彼が書いたのであろうレポートなどが山のように積まれており、今にも天井に届きそうで、崩れそうであったのだ。
「おーい、ロドス。」

「ふぁーあ。なんだーい。」
めちゃくちゃ眠そうな答えが返ってきて、男は出てきた。
くしゃくしゃになって寝癖がついた茶色の髪に、今にも閉じそうで、それでも、強い決意の炎がみれる深紅の瞳、あきらか猫背になっている姿勢。これが、この国で最強の魔法師なのかと少し疑った。
そして、心の中で納得もした。
こいつは注目されねぇな、と。
「なんか、お前にききたいことがあるんだとさ。じゃあな、客人さん。」
そう言って、案内してくれた男は去っていった。
「失礼します。俺はどこにでもいるような旅人のクレイデスです。あなたが、魔法についての実力がこの国で一、二を争うようなお方であることが分かったので、魔法について色々聞きたいのですが。」
そう、いきなり本題に近づくための会話を始めた。驚いたのだろう、返事はすぐには返ってこなかった。
「ほぉ。面白いことを言うねぇ。君は。僕がこの国で一、二を争う？そんなの下調べをしている君なら分かっているはずだ。僕ではないと。」
俺は即答して来なかったことから、攻めていき、本当のことを聞き出すことにする。
「そうですか？表向きではあなたは、低級魔法師だ。だがそれは、あなたが表舞台に出て、自分の論文を発表したりすることで、研究時間が少しであろうと減ってしまうことがいやだったためだ。そのため、研究時間が他の魔法師よりも多くなり、今となっては、この国の魔法はおろか、禁じられた魔法『禁法』について研究をし、ある程度習得しつつあるはずだ。」
さすがに、彼は驚いたようだった。
「へぇー。そこまで、調べられているのか。率直に聞こう。君の目的はなんだい？僕について、何の用もなしに、調べただけじゃないだろう。」

俺は迷わず言った。
「俺は、俺の特別な力について調べるため旅に出ている。それについて、教えてほしい。」
彼は少し悩むように考えると、
「とりあえず、立ち話はなんだ。部屋に入ってくれ。そして、扉は閉めるように。」
俺は言われたとおり、扉を閉め、あの山が存在する部屋に入った。
「ここは、話が聞かれる可能性がある。これを使って、ある場所までワープする。このカードを掲げれば、すぐワープできるから、すぐ使える。」
そして、俺とこの男はこのカードを掲げた。
視界がぐにゃりとゆがむ。そして、どんどん、どんどんどこかへ落ちていく。限りなく落ちていく。
そして、足が地面についた。頭がクラクラするし、気分も悪い。
そこで、ふいに声をかけられた。
「さて、ここでなら、じっくり話ができる。」
そう言われて、俺はクラクラしながら周りを見回す。どうやら、どこかの部屋へワープしてきたらしい。
「まず最初に、君の特別な力について教えてもらおうか。」
そして、俺は男に話した。俺の力について、そして、剣王と悪魔という昔のおとぎ話について。
そして、ロドスは俺が話し終わると、しばらく何かに悩むように考え続けていた。
そして、神妙な顔つきになって、言った。
「そうだねぇ。何から話そうか。そうだな、とりあえず君の力についてだけど、おそらく、君は悪魔の末裔だねぇ。それも、伝説級の。おそらく、その『剣王と悪魔』に出てくる悪魔のどちらかが君のご先祖様といったところかな。おそらく、それで、君に魔法を吸収または、打ち消したりすることができるんだと思う。」
俺は心の中では、驚愕していた。無理もないだろう。

自分が悪魔の末裔だって知ったのだから。
いや、違う。俺が驚いているのは、この男が何故こんなにもたやすく俺が悪魔の末裔であることが、分かったのか、だ。
俺自身、俺の力が何によるものかは知らない。だが、少なくとも、こいつは、今まで、旅先で話した魔法師とは違う解答をしてきたのだ。
他の魔法師たちは、この話をバカにするか、調べさせてくれと頼んでくるようなやつだけだった。それで、はっきりとした答えを聞けたことがなかった。
だが、こいつは、俺の聞きたいことをすぐに言ってきた。本当のことかは、分からないし、そのまま信用しようという気もない。まだ調べなければならないことがたくさんあるからだ。
この情報はそのための過程にすぎない。だから、俺はこいつから得た情報、魔法を過程にして、進んでいく。
「いい目つきをしているねぇ。真実を知っても、まだ、何も思わないのか。で、君は何のために僕のところに来た？わざわざ、そんなことを聞くために、ここまで、来たわけじゃないだろう？」
頭の切れる野郎だと俺は思った。こいつは他のやつらとは、改めて違うと思った。
おそらくこいつのことだから、もうすでに、俺が何のために訪ねてきたのかわかっているはずだった。
全くいやらしいやろうだなぁと思いながら、俺はこいつからの質問に答えることにする。
「いやぁ、わかっていたんですか。えっとですねぇ、『禁法』を俺に教えてくれませんか？」
そうすると、彼は、かすかな笑みを浮かべ、
「いいよ。僕もあなたについては興味があるしね。では、教えることにしようか。僕が、知っている『禁法』の全てを。」
そして、彼は話し始めた。彼が知っていることについて、たくさんのことを。

俺は彼からの質問にはできる限り答えて、俺は『禁法』も習得していった。
そして、短期間で叩き込まれ、習得した俺は、また、メフィストになるための旅にでることを告げた。
「じゃあな。世話になった。俺は行くことにする。俺の力については知ることができたけどさ、それだと、メフィストが何故からんでくるのかがわからない。だから、俺はメフィストになって、必ず知ってみせる。」
と力強く言ってみせる。だが、本当は怖かった。メフィストになることが。
メフィストになるための試験で生き残ったものはいないのだと知ったから。
しかし、俺はマリアに誓った。メフィストになると。
「君、死ぬんじゃないよ。君の考えはわかっている。僕に『禁法』を学びにきたのは、『禁法』を使って、自分を犠牲にして戦おうって感じだろ。俺の能力があったら、大丈夫、そう考えてんだろ。はっきり言っておくよ。教えはしたが、使うな。使って生きていられるなんて甘いこと考えんなよ。使ったら、一時的に強力な力が得られる。だが、使えば最後、死ぬよ。」
まるで、心の中を見透かすように、言ってきて、あちゃーと思う。ばれてしまったかーと思う。
しかし、俺は、
「まぁ、じゃあな。」
と軽く別れをいい、俺は去っていった。
　そうして、『禁法』を学び、今に至る。
腕がきしむ。体中に何かが這い回っている感じがする。
視界がぐにゃりとゆがむ。全てが崩れてゆく。意識が遠のいてゆく。
どんどん、落ちる。底のない深い闇へと。永遠に続く闇へと。
そこで、俺は声をかけられる。
俺の上、下、前、後ろ、頭の中、どこからともなく、声が聞こえる。

「落ちろ。落ちろ。落ちろ。堕ちろ！我に意識を、全てを託せ。もう全てを捨てて、楽になれ。俺はお前から現実という名の絶対的な呪いから解放してやる。さぁ、我に全てを。」
そんな声を聞こえた。
すると、もう、託してもいいかなと一瞬考えてしまう。託してしまえば、全てから解き放たれる。
だが、俺が全てをこいつに明け渡したらどうなる？
俺の親父ガイアスはどうなる？
俺がいなくなって、全てを捨ててしまって。悲しませてしまうだろう。
マリアはどうだろう？
マリアは俺を待っていてくれた。俺が旅に出てからもずっと。それどころか、俺を支えにきてくれた。俺は彼女を待たせすぎた。今度は俺が彼女のためにやらねばならないときではないのだろうか？
そうだ、俺は彼女を悲しませてはならない。
「おい、化け物。お前の力を貸せ。お前と一緒に歩んでやる。」
「我とともに、か。そんな答えは初めてだ。お前に我の力を託してやらんでもない。だが、これから先は、ずっと苦痛が続くぞ。そして、人間にはその苦痛は耐えられるわけがないぞ。それでもいいのか？」
それに、俺は
「俺は立ち止まらない。もう、立ち止まりたくはないんだ。もう、マリアを待たせるわけにはいかない。」
そう、はっきりと答えた。
「いい答えだ。我の力を貸すに値すると判断した。だが、苦痛が続くのは事実だ。後悔はするなよ。」
最後にかすかだが、そう聞こえた。
そして、俺は意識を取り戻す。そして、俺は感じる。
この体を這い回っている呪いの力を。
俺は目の前に並んで立っている二人の男を見る。

そして、頭に浮かんできたワードをつなげて、詠唱し、剣に力を付与する。
俺は一気に飛び出す。剣を大きく振り構えて。
さきほど戦っていたほうに剣を叩き込む。
すると、やつの剣と俺の剣が接触する瞬間消えた。そして、やつは驚愕する。
だが、もうそのときには遅かった。
いや、反応ができたところで、何も変わりはしなかっただろう。
体が上半身と下半身が真っ二つにわかれる。
剣が紅く染まる。
俺がさっきあんなにも苦戦していた相手がこうもあっさりと死ぬ。
そう、あっさりと。一振りだけで。
俺はこの力に恐怖を感じた。
だが、俺の手は止まらない。次はもう一方の腹へと叩き込まれていった。もう一人の人間が死ぬ、しかも、俺の手によって。
そう思うのもつかの間、俺の剣は男を斬ろうとしている。
そして、男はまた真っ二つにな・・・・・・らなかった。
男は、俺の剣を手で握っていた。
動かない。剣が消えない。なんだ、こいつは、と俺は思う。
そんな俺の心を見透かしたように男は言った。
「なんで、お前の攻撃を俺が受け止めることができるのかって？そりゃ、簡単な話だ。俺もお前と同じく体に呪いをかけているんだよ。」
と、普通じゃ有り得ないことを言ってくる。
予測はしていた。呪いを自分にかけて、生きているような超人がいることは。だが、実際に言われてみると、驚く。
こいつは俺と同じ化け物ってことか。そう思った。
「狂った化け物どうし殺りあってもいいが、こいつは死ぬよ。」
どすっ。何かが俺に投げつけられた。
キャッチした俺の手は真っ赤に染まっていた。俺がキャッチしたの

は人間だった。それも、長い髪の少女。
そして、キャッチしたその少女を見る。今は血で紅く染まっているが、もともとは、黒髪のロングヘアーに青色の目をしている少女。
そう、マリアだった。
マリアが血だらけになっている。この出血量だったら、しばらく何もしなかったら、死んでしまうだろう。
俺はあせる。目の前で、恋人が死に掛けているのだ。あせらないわけがない。
そんな今にも崩れそうな、そして、殺気がこみ上げる俺に向かって、目の前の化け物は言った。
「これは試験だったりするんだよねぇ。彼女には死の呪いをかけている。さぁ、どうする？君が生きるか、それとも、彼女がいきるか。さぁ、選ぶといい。」
なんてことを。ふざけている。不条理だ。関係者じゃないやつを巻き込むな。そう思いはした。だが、答えは決まっていた。
いや、違う。答えは決まっていたんじゃない。
一つしか選択肢はなかった。
俺は彼女に向かって、手をかざす。
そして、彼女にまとわりつく呪いを自分に取り込んでいく。
全てを取り込む前には死ねないし、やつらを倒さないと俺は死ねない。だから、死んではならないのだ。
俺は精神を強く保つ。呪いを取り込む際は精神を強く保っていないと呪いに耐えられなくなって、死んでしまうから。
マリアに生気が徐々に戻ってくる。
いつの間にか、彼女の出血は止まっていた。
それと同時に、死の呪いが俺を飲み込もうとする。
俺は死ぬわけにはいかない。こんなところで。マリアを一人置いて。
だから、俺の体の中に這い回っている制御された呪いをフルに使って、死の呪いと戦わせる。勝てば生、負ければ、死あるのみ。
だから、俺は必死に耐え続ける。体が今にも砕け散りそうなほどだ。

俺は苦痛、苦痛、苦痛、それしかない状態だった。
「あの禁法の化け物の言ったとおりだな。かなりの苦痛だ。」
それを、マリアが支えてくれる。手を握って。自分が死にかけていることなど気にもかけず。
「クッスー。ごめんね、私のために。」
「無理にしゃべるな。お前も今、苦しいだろうが。」
俺は、そんなマリアを見て、改めて思う。生きなきゃいけない。生きて、生きて、やらなねばならないことがある、と。
俺は一生マリアを守り、進んでいく。
だから、こんなところで、立ち止まっているわけにはいかない。
だから、俺は死の呪いに対して、あがき、もがいた。必死に生きようと。
それから、何分いや何時間がたったのだろう。
俺の体は、ぼろぼろになった。だが、それでも、生きていた。
死の呪いを自分の体に取り込んだ。
俺にこんな特別な力があって、良かったと思う。
力があったがゆえに、生き残ることができたから。
マリアを救うことができたから。
安心したら、力が抜けてきた。意識が遠のいていく。地面に倒れこむ。体が全くもって動かない。
声をかけられる。
「なかなか、やるねぇ。君。第一次試験『肉体』、第二次試験『精神』合格。そして、これから・・・・・」
言葉が途絶えた。いや、違う。
俺の耳が機能しなくなった、それだけだ。
駄目だな、こりゃ。そう思う。
そして、俺の意識深く深く沈んでいった。

信頼

私が目覚めたのは、ベッドの上だった。
目を開けた先にあったのは、木の天井。
私は周りを見渡す。
確か、私は戦っていたはずだ。
そう、クッスーが宿屋に私を残して出て行ったとき、装備を整えて、宿屋を出た。
そこには、黒装束のやつらが三人いた。
もちろん、私は応戦した。
私が編み出した魔法の中でも最高位の炎の魔法『インフェルノ』。
それを放つことでその三人を一気に畳み込もうとした。
だが、だめだった。
やつらは、腕を一振り。そう、それだけしかしなかった。
すると、そこには、まるで、最初から何もなかったように、火の粉すら残らず、魔法が消える。
有り得ない、そう思った。
そして、あのときクッスーが探していた本『剣王と悪魔』に出てくる悪魔と、同じような、いや、全く同じことをこいつらがしていることに気づいた。
クッスーが長年探し続けた答えがそこにある、そう思った。
それと、同時に、自分の心に恐怖が生まれた。
私は、こんな魔法をいともたやすく打ち消すような輩、いや、悪魔かもしれないやつらとまともに戦えるのか。
魔法術師が魔法が使えないのに、勝てるのか？と。
しかし、そんな恐怖はすぐに振り切る。
クッスーを助ける、そのために、自分にできることはするって決めたから。
それは今やこれからの未来のためなのだ。

だから、こんなところで、すぐにあきらめて、負けるわけにはいかない。
だから、私は考える。
どうしたら、この化け物たちを倒せるかを。
こいつらを潰せる、かつ、魔法打消しを受けても問題ない魔法なんてあっただろうか、いや、ないだろう。
だから、私は即席で魔法を考える。
今までに蓄えられた知恵を全て、詰め込んだ最高傑作を。
脅威の速さで構築を最初から構成し、詠唱した。
「我、全てを消す大穴を求め、宇宙の断りに基づき、世界を変革をもたらす。『クローズ・ザ・ワールド』！」
闇が全てを飲み込んでいく。
化け物どもは、腕を振りおろす。
しかし、消えない。その異様な空間は消えはしない。
これは、魔法ではない。魔法とは私の中では制御できるものなのだから。
こんな制御の出来ない、無効に出来ないものなんて魔法ではない。
これは、空間を分離し、成すべきことをするまで、消えない。そんな仕組みだ。
そして、化け物たちのいる空間とが現実とに分断される。
そして、空間は化け物を個々、包み込むと、その空間は圧縮されていく。
徐々にその空間は小さくなっていき、点になる。
そして、ついには、消える。
化け物は消えた。そう思った。
だが、違った。
私は気づけなかった。後ろから迫りくる魔法に。
その魔法は、私を貫き、激痛が走る。
後ろを振り返る。
黒装束の化け物が笑っていた。

一瞬のことで何が起こったのか分からなかった。
そして、自分の体の制御が利かなくなり、地面に倒れこんだ。
その後、目覚めたのは、クッスーの腕の中だった。
クッスーの腕は、血にまみれていた。
一瞬で、それが、私の血だと分かる。
その後、正体の分からない魔法にかかった私をクッスーが助けてくれた。
　それを朦朧とした意識の中思い出した私はベッドの上から飛び起きる。
周りを見渡すと、男がいた。
透き通った短い銀髪に、金色の瞳、引き締められた筋肉、厳しい顔立ち。
それは、見慣れた顔だった。
クッスーのお父さんで、私を娘のようにかわいがってくれたガイアス。
ガイアスは、私が目を覚ましたのに気づくと、すぐに駆け寄ってきて、
「大丈夫か。かなりひどいけがだったが。」
と心配してくれる。
心配してくれのは、うれしいし、優しいなぁとも思う。
でも、今はそんなことより、クッスーのことが心配だった。
「クッスーは無事なの？」
そう、素直に聞くと、ガイアスはしわをよらせて、深刻な顔で考える。そして、言いにくそうに答えた。
「生きてはいる。」
そう聞いたときは正直うれしかった。しかし、ガイアスの言葉が引っかかる。
『生きてはいる』というのはどういうことかを考える。
すると、急に不安になる。
ずっと、遠くにクッスーが行ってしまっていそうで。

「何か問題でもあるの？全てを話してよ。」
覚悟を決め、言った。
「ああ、そうだな。お前は知る権利がある。」
そして、ガイアスは語りだす。
「やつは生きてはいる。だが、最終試験の最中だ。やつは、最終試験の中でも、今、第二ステップを越え、最終ステップに入った。メフィストについて話しておくべきことがある。」
「話しておくべきこと？」
「メフィストには、メフィストのための世界が存在する。人間には人間のこの世界が存在するように。」
「人間には人間の世界があるように、メフィストにはメフィストの世界があるってどういうこと？」
「それは、メフィストは人間とは違うからだ。メフィストの由来は、メジャメンティストと呼ばれるものだと言われるものだというのであり、メフィストと呼ばれているのは知っているな？」
常識なので、すぐうなずく。
「しかし、実を言うとこの由来は間違っているんだ。決して測量士の略じゃない。だって、おかしいだろう。メジャメンティストを略すなら、普通、メティストだろう。」
「そうね。」
昔から自分も疑問に思っていたことを改めて言われて、やはり、なにかがあったんだと納得する。
「そう、メフィストってのは『悪魔』を示しているんだ。メフィストの祖先は、悪魔なんだ。」
私は驚く。
世界常識が覆されたことに。いや、違うだろう。
私が驚かされたのは、今まで追ってきた真実が少し見えた気がしたことに、だ。
悪魔が祖先だというメフィストになるなら、同じように悪魔が祖先である必要があるはずだ。

メフィストの祖先が悪魔ということは、普通の人は、クッスーのように最終試験までたどり着くことすらできないはずだ。
なら、何故クッスーが生きている？
私の推測、おそらくこれが真実だろう。
クッスーの特別な力はもともと、祖先である悪魔が持っていた能力、つまり、あの御伽噺にでてきた悪魔のものであろう。
ゆえに、あの有名な悪魔を祖先にしたクッスーは悪魔の血、その能力がでたのではないだろうか。
それが、私の答えだ。
それを証明するのは、私の目の前にいるガイアスだ。
この答えが正しいのなら、おそらくガイアスも力について、気づいているだろう。
だから、私は聞く。真実を求めて。
「あなたたち、親子はあの『剣王と悪魔』に出てくる悪魔の末裔なのね？」
「ああ、そうだ。メフィストの試験ってのは結局のところ、悪魔の末裔を探すために存在するテストなんだ。メフィストの試験でここまで来たのはやつが初めてだったが、これは必然的に起こったものなのだ。悪魔の血を深く継いでいるクレイデスだからこそなしえた。」
やはり、真実であった。
ようやく、クッスーが悩み続けたあの特別な力についての真実が得られたような気がする。
だから、私は聞く。
「では、改めて聞きます。クッスーはどこですか？」
すると、彼ははっきりと言った。
「メフィストの世界、つまり、メフィストの夢の中だ。やつが向こうで決着をつければ、戻ってくる。」
ガイアスの言葉は続く。
「そう、昔の俺と同じように・・・」

そう、少し、悲しげに告げる。
「やつはあそこの部屋だ。」
そう言って、ガイアスは隣の部屋を指差す。
私は、ベッドから立ち上がり、歩いていった。
隣の、クッスーのいる部屋に向かって。
歩いていく。
本当は短い時間のはずだが、私には無限のように長く感じられた。
クッスーに会いたい、その気持ちが私をせかす。
ドアを開ける。
そこは、白い部屋だった。
真っ白の部屋。
あるのは、白いベッドとそこへ横たわるクッスーの姿だけで。
異世界の空間にも感じられた。
そして、部屋の中央にあるベッドを目指して、歩いていく。
歩いていく。
ベッドはドアから五歩ぐらい先にあったはずだった。
しかし、その距離は一向に縮まらない。
おそらく、これは夢の中に接触できないようにする何か特別な結界、
まぁ呪いとかそこらへんだろうと推測する。
呪いというのであったとしても、それは一応魔法なので、少しは構成を理解できるはずだ。
そう思い、私はその結界の構成について、調べる。
調べるが、全くもって、構成が理解できない。魔法が存在することは分かる。
だが・・・。ありえない、そう思う。
この世界でもトップクラスの魔法術師なのだ。
それに、構成が少したりとも分からないように作るなんて、おかしい。
今まで、魔法学を学んできたのは、無駄だったのか？
何故こんなものが存在する？

私は無力だ。
自分に絶望する。
こんなにも近くにいるのに、触れることもできない。
あんなにも長い間離れていて、ようやく再会できたのに。
また、運命か何かは私たちを別れさせようとする。
さらに、この試験に合格できなかったら、クッスーは死ぬかもしれないのだ。
そして、おそらく何百いや何千人の人がこの試験で命を落としている。
つまり、その人数の倍ぐらいの人が悲しんで、泣いたのだろう。
こんな不条理があっていいのか、そう思う。
だが、クッスーは何があろうとメフィストになると言っていた。
全ては、クッスーが決めたこと。
そして、クッスーは約束してくれた。
必ず、生きて私の元へ帰ってきてくれる、と。
だから、私は信じる。
私が信じなくて誰がクッスーを信じるというのだ。
私には、ただ、クッスーを信じて待つことしかできない。
だから、帰ってくるのを信じ、見守り待つ。

与えられた世界

俺は死んだのだろうか。
そんなことを思いつつ、俺は目を開ける。
すると、そこは、レンガの壁、一定間隔に置かれているたいまつ、一本道の通路という単純な構造の場所だった。
「全く、俺は死んでしまったのかねぇ。これを進んでいって自分で地獄か天国。いや、俺はマリアを置いてきてしまった、そして、待たせすぎた。他にも・・・。だから、地獄だろうなぁ。自分で反省しながら歩けってことか？」
と小さくつぶやくと、俺は地面から起き上がり、歩いていった。
そして、歩き続けた。
歩き続けた。
だが、続いているのは、最初に起きた場所と変わらない風景のみで。
「何も変わらないんですけどーーーーーーー！」
あきれ果てて叫んだ。
こんな通路だから、向こうの壁にでもはね返って、声が聞こえてくるかとも思ってはいたが、結局何も聞こえなかった。
俺は、銃をサブ武器として持っている。今度はそれを使ってみることにしようと思った。
とりあえず、撃ってみて、壁までの距離を測ってみることにする。
銃弾を装填する。
そして、構えて・・・。引き金を引いた。
俺の銃特有の空気まで振動するような轟音鳴り響き、弾は打ち出された。
音どおり、威力は大層なもので、発射の際にかかる手に対する負担は大きなものであった。
もう、この感覚にも慣れてしまっている。
そして、俺はそんな銃に慣れてしまった自分に対し、考えながらも、

耳を済ました。
風を切る音が聞こえる。どんどん遠ざかっていく。
どんどん遠ざかっていく
遠ざかっていき、ついには聞こえなくなり、しばらく待ったが、銃弾が壁に突き当たる音はしなかった。
「おいおい、うそだろ。この通路はいったいどこまで続いているんだよ。」
あきれたように俺は言い、その場に座り込んだ。
とりあえず、状況を整理することにする。
一つ目、通路があるが、出口は見当たらない、または存在しない。
二つ目、ここが俺が死んだためにここに来たのか、それとも、これは俺の夢なのかが判断がつかない。
三つ目、ここが、何のために存在するのか分からない。
この三つが今の状況および問題点だ。
一つ目に関しては、普通に出口を見つけるのではなく、なにか特別な方法をつかわなければ、出られはしないということだ。
つまり、その特別な方法を発見すればよい。
と言っても、それが一番の難題なわけだが。
二つ目に関しては、はっきり言って判断しようがないだろう。なんか、使い魔みたいなのが現れて説明してくれるんだったら、話は別だが。
三つ目に関しては、この一つ目と二つ目が分かれば、わかるんじゃないかなーって思っている。
さて、どうしたものか、と悩んでいると。
前から足音がした。まだ、距離は遠い。あの銃弾にあたってしまった不幸な方が怒り狂ってきているのだろうか。それだったら、ごめんなさい。そんな俺の気持ちなんか他所にどんどん迫ってくる。
俺はすぐに警戒モードに入る。俺のスイッチが入る。
足音からして、人数は一人だと思うが、何か違和感を感じる。なんなんだ。

今まで、こんなに歩き続けたが一人たりとも会わなかった。
こんなに簡単に現れてくるものなのか？
俺の中にそれが違和感として、出てくる。
そして、俺の勘ってやつなのだろうか。一人ではない気がする。
俺は、隠れられそうな場所がないか周りを見渡す。
しかし、やはり、そこにはさっきからずっと見てきた通路が広がっているだけで。
この状況はまずいと俺は思う。
迫ってきているのが、味方であれば問題はないだろう。
しかし、今迫ってきているのは、味方であるという保証はないし、俺に気取られないように、動いてきているやつらもいて、はっきり言ってこいつらの実力は計り知れないものだ。それに、もしかしたら、俺の銃弾が当たった不幸な人の仲間かもしれないし・・・。
それらの可能性を考えると、逃げなければと思う。
だが、一体どうすれば・・・。
「ねぇ、君もしかして、困ってる？」
急に後ろから声をかけられ、驚く。なぜなら、そこは気配はもちろんのことなかった。さらに、俺の範囲魔法『サーチング』を発動していたため、人がいたなら、気づかないわけがないから。
この魔法は俺が旅に出てる際に思いついた魔法で、精度は非常に高く、引っかからない人間なんて今までは、あの現実で最後に戦ったあの男しかいなかったから。
そして、俺は声のした方を振り向く。
そこには、金髪のショートヘアに、金色の瞳をして、背丈は俺と比べて、少し低いぐらいの同年代であろう女の子が立っていた。
「助けて・・・くれるのか・・・？」
そう聞くと少女は
「もちろんよ。こっちに来て。」
と彼女は、俺の手を引き、走っていった。俺はそれに追いつこうと必死になるような速さで走っていく。

後ろからは、なおも、近づいてくる足音が聞こえるし、俺の『サーチング』により、ようやく敵の存在は確認できるような距離にはなった。しかも、俺の予想通り、一人ではなく、かなりの大規模な集団が。
それに、魔法の範囲内のそこらかしこで、そいつらは増えていってる。しかも、有り得ないほどの速さで。
「おいおい、大丈夫か？敵の数がかなり増えてきてるけど・・・？」
と聞くと、
「たぶん大丈夫じゃない？それと、今、後ろから、迫ってきているのは、一定時間間隔で巡回している化け物だから。そいつらは、まじで強いから、戦うなんて考えたら、死ぬから。」
と、軽々しい口調で恐ろしいことを言ってくるもんだから、あのままだったら、俺まじで、危なかったーなどと考えてはいたが、そういうことは今は必要ないので、奥深くへ沈め、聞く。
「俺たちはどこに向かっているんだ？」
「もうすぐ、分かると思うよ。」
と一言満面の笑みで言ってくる。
こりゃ絶対なんか隠してやがるなと思う。
そう警戒し始めてから、すぐのことだった。俺はどこからともなく現れた穴によって、足場がなくなり、落ちていった。
「まじかよーーーーーーーーー。」
俺の叫び声がその穴に響き渡った。
俺の予想は当たっていた。やはりなんかあった。こんなふうに落とされるとは思ってもみなかったが。
落ちた先は、どこかも分からない場所。俺はこけていたが、隣にいた女は普通に体勢を崩していなかった。
そんな女の姿を見て、知ってたんなら教えろよと、ちょっとしたいらだったが、一応恩人であるから、文句は言わないことにする。
そして、少女は俺には目もくれず、進んで行く。
俺はそれに遅れないように、少女が進んでいくとおりに後ろから付

いて行く。
少女は何本にも別れ、わけが分からなくなるような複雑な道を足早に進んでいく。
しばらく、進み続けた後、突然少女が止まる。
すると、そこには、大きなドアがあった。周りのドアの二倍はあろうかという大きなドアが。
異常にでかい部屋のドアが音を立てて、少しずつ、そして、少しずつ開いていき、ついには、その巨大なドアは完全に開いた。
そこに、広がっていたのは、春を感じさせる風。広大な緑の木々。
そして、とても巨大な城、そして、城下町だった。
「えーっと・・・」
彼女の名前が分からず、声をかけられなかった俺に対して、彼女はそんな俺の心情が分かっているかのように言う。
「私はミラよ。」
「ミラか。分かった。そういや、俺の自己紹介もまだだったな。俺はクレイデス。よろしく頼むよ。」
「ええ、よろしくね。」
「この世界について、教えてくれないか？ここは死後の世界なのか？それとも、違うのか。」
彼女は、少しだけ考え込んだ後、言った。
「この世界は『メフィストの夢』と呼ばれる世界なんだ。いや、正確に言うと、メフィストの夢の一部にあたるのか。とりあえず言うと、決して君は死んでいるわけではないよ。」
俺は死んでいないのかと少しだけ安心した。
だが、今おかれてる状況がいまいちわからない。
とりあえず、考えるのはやめにして、聞くことにする。
考えるのは聞いてからの方がいいだろう。
「『メフィストの夢』というのは、全メフィストが繋がるネットワーク、まぁ、大きな樹の根っこみたいなものなの。分かれてはいくものの一番もととなる部分はいっしょなの。なかでも、この世界は

あなたが創り出した世界。あなたの心を基に作られた、あなたの心が望んだ世界。この世界で、願いを果たせば、現実でも願いが叶う。このような世界が各メフィストに一つずつ存在する。そして、重要なのはこの『メフィストの夢』という世界の時間は現実世界より六十倍の速さで流れていく。けど、あなたが現実で体感している時間間隔とこの世界の時間間隔は変わらないわ。つまり、この世界での一分は、現実では一秒ってだけのこと。それと、あなたの年齢がそういうふうに進むわけじゃないわ。例えば、あなたがこの世界で六十年過ごしたとしても、向こうでは一歳しか歳をとっていないことになるの。」

話を聞いていて、唖然とする。

メフィストが格違いなのも、うなづける。

ここで、現実の六十倍の速さで進む時間の中で、色々すれば、狂ったような強さも出来上がるし、おそらくあの『禁法』もたやすく使えるようになるまで、いや、アレよりすごいものも作れるだろう。

それから、考えると、最後に俺と互角、または、それ以上の力を持ったあいつは、現役のメフィスト、もしくは、元メフィストだろう。

そしてあれも、最終試験の一部だったんだろう。

だとすると、この世界はなんだ？

何を俺にさせたいんだ？

そう考えていると、ふと声をかけられた。

「ねぇ、聞いてる？聞いてるの？」

俺はその突然の声に驚き、声をあげそうになるが、こらえる。

そういえば、ミラがいたんだった。どうやら、俺は考え込みすぎていたのか、周りがみえなくなっていたらしい。

「すまない。聞いていなかった。もう一度、言ってくれないか。」

そういうと、彼女は、

「もう、聞いてなかったの？しょうがないわね。もう一度だけ言ってあげるわ。この世界は、あなたの心を元にしてつくられたものなのは、今言ってわよね。」

「ああ。そう言っていたな。」
そう、うなずく。
「オーケー、それは聞いてたのね。それじゃあ、一つ質問です。あなたはまだメフィストじゃない。ですが、今、こうしてここに自分の心を基に作られるメフィスト一人一人に与えられる世界が存在します。それも、メフィストじゃないあなたの世界が。それは何故でしょう？」
考えもしなかったが、当たり前の質問をされて、俺は困る。この世界に来て、まだ、まもないのだ。わかるわけがない。
そうは思うが、それでも考えてみる。考えずに、わからないと答えたくない負けず嫌いな俺は、頭をフル回転させて、考える。
だが、答えは出ない。出ないが、考え続ける。
「おい、クレイデス。」
すると、そこに、ミラの声とは違う、男に不意に声をかけられた。
男の声がした方向を向く。
しかし、男はそこにはいなかった。
聞いた事のある声。どこで、聞いたものだったか。俺はどこかで、この男の声を聞き、会話をした。
それはどこだっただろう。この世界で会ったのは、ミラだけだから、この世界ではないだろう。
なら、向こうの現実の世界なのか？
あの俺を襲ってきたメフィストか？いや、違う。やつの声は、もっと軽さがあって、冷たいものだった。
なら、俺を最初に襲ってきた男か？いや、やつも違う。やつはもう死んだし、こんな重たい声をだすようなやつではなかった。
じゃあ、誰だ。ここ最近出会ったような気がするんだが。
もしかして、あの宿屋に来たあの歴戦を潜り抜けてきたような男みたいなやつか？やつなら、声に重みがあったし、鋭かった。そうだ、やつだ。思い出した、あのメフィストなのか。
それで、俺は気付く。

一週間後に会うということの本当の意味に。
一週間とは向こうでの一週間のことを指すのではなく、この『メフィストの夢』と呼ばれる時間の進む速さが違い、速く進むこの世界でのことを指していたのだ。
つまり、現実では、二時間四十八分後の事を指していたんだ。
どおりで、準備期間にしては長過ぎるはずだ。
だが、実際は長くはなかったわけだ。
俺は苛立つ。こんなわかりにくい言い方をしてきたメフィストのあのじいさんに。
違うだろう。俺が本当に苛立っている相手は自分だ。
常に、先を読んで、正しい道を目指していくはずなのに、こんな予想外の出来事をあの言動から予測できなかった自分に対してだ。
先を読めずに行くことは、これから、いつ死んでもおかしくないことを指し示しているんだ。
死なないと決めた俺がこうもあっさり、ミスをしてしまってはならないんだ。
だが、俺は完璧ではない。そんなことは分かっている。
分かっているけど、完璧な道を踏み外さないようにしなければならない。
そしてそのためには、それをするための強さや洞察力があると過信してしまっていた自分を、実際に強さと洞察力がある自分にならなければならない。
そう心に誓い、耳を澄ます。風の音、動物の泣き声、その他の音を耳から削除する。
そして、やつの声を探す。
空気が微妙に振動する。
「そこか。」
それによって俺の斜め右前そこにそいつはいると突き止めた俺はそこに向かって、猛ダッシュする。
そいつはそこにいた。メフィストの最終試験について、言いに来た

歴戦をくぐり抜けてきたという雰囲気をかもし出す男。
「よく、見つけることができたな。では、最終課題の説明をしよう。今回の最終試験の未開の場所とは個々に作られた世界のことを指す。つまり、今回の課題は、このお前の世界の探索だ。」
「わかった。」
「地図が完成したら、俺を呼べ。俺の名はアーサーだ。」
そう言うと、突然砂煙がのる突風が吹いて、俺は思わず目をつぶった。そして、その突風がやみ、もう一度目を開けると、そこにいたはずの男は消えていた。
まるで、幽霊のように、いつのまにかいなくなっていた。
前もこんな感じだったので、今回は気にはしない。
どうやら、ここが最後の試験の会場のようだ。俺の心を基に作られた世界それの地図を完成か・・・。
「おもしろいことになりそうだ。」
そう、俺はつぶやいた。

限られた選択

俺は、城に向かって歩いている最中、考えていた。この世界について。
この世界が本当に俺の心が望んだ世界だと言うのなら、俺の闇となる部分とも対面するだろう。
俺は、それに対面して、まともにやりあうことができるのだろうか。
俺の闇となる部分はだいたい見当がつく。
だが、俺にそれを克服するほどの力があるのかどうかわからないし、あったとしても、立ち向かってゆける勇気があるか分からない。
そして、ここが俺の望んだ世界であるなら、俺の求める答えも見つかるだろう。
そう、俺は一体何者なのかという最大の疑問の答えが。
真実を知りたい。だが、それは恐ろしくもある。真実を知って今の自分のままでいられるのか分からないからだ。
だが、俺がどう思おうと、この真実は知るようになるはずだと、なぜだろうか、思ってしまう。
だが、俺の旅の目的は、マリアに対しては俺の特別な力について知るだと伝えていた。ゆえに、俺は知らなくてはならない。そして、その上で真の目的も果たさなければならない。
そう考えていると、マリアのことを思い出す。
彼女は全身から出血し、俺の周りに血の海を作っていたほどの重症だった。大丈夫なのだろうか、心配でならなかった。だが、俺にはそれでも、まだ彼女が死んでいないのが分かっていた。
俺は必ず生きて帰る、そう心に誓い、俺は前を見る。
あんなにも、小さく見えた城も、ようやく、大きく見えるようになってきた。
見るもの全てを魅了しそうな、雪のように白い城がそこにはあった。
しばらく、俺はその城を見て、見とれてしまう。

ようやく、城から目を離すことができた後、俺は周りを見渡す。住宅街ではあったが、時間帯が時間帯で深夜だったため、静寂に満ちていた。
その静寂の中、俺とミラの足音が響く。どうやら、起きているのは、俺たちだけのようだ。
さすがに、歩きっぱなしで疲れがたまってきていたので、宿屋を探す。
周りとは一世代、いや、二世代ぐらい昔の古びれた建物があった。建物は、建っているのが、不思議なくらいであった。そこあるのは、今にも落ちてしまいそうな感じがする垂れ下がった宿屋の看板。値段を見てみると、激安だったので、ここで寝ることにする。
非常に趣がある古いドアを壊さないように慎重に開くと、カランカランと客が入ったことを知らせるベルの音だけが今まで宿屋で保たれていた静寂を崩して、鳴り響く。鳴り響いたが、返事はない。宿主は寝てしまったのだろうか、そう思いつつ、宿に入る。
周りを見る。一見したら、何もいないように思うだろう。だが、俺にはわかる。
ここにはなにか、いや、だれかがいる。
俺が気配を感じ取った方向には、本当に何かがいた。最初は、亡霊か？結構まともに疑った。しかし、よく見ると、違った。それもそうだろう。一応、ここは町の中だ。突然亡霊でも現れたもんなら、ここはモンスタータウンとか幽霊屋敷なのかもしれない。
そいつは、寝ているのかと疑いたくなるように、重たく閉じられた瞼、長い年月をかけて作られたのであろうしわ、肌の色は抜け落ち、白くなり、骨しかないように細く、腰が曲がった老婆だった。
老婆は無言で机を指差す。指差した先には、なんか木の入れ物があり、そこには、値段が書かれている。
俺はこの老婆がここに代金を置いていけというのを言いたいのだと悟る。
「ここに代金を置いていくな。」

俺はそう言うと、周りを見渡す。とりあえず、空いていそうな部屋を探そうとする。一歩ふみだしたところで、背中をくいっと引っ張られた。
振り向くと、老婆がなにやら、指を指している。
指している方向を見ると、そこには、部屋があった。どうやら親切に、俺に部屋を教えてくれたようだ。どうやら、部屋を案内するくらいはしてくれるみたいだ。
「ありがとな、婆さん。」
そう一言とだけ言うと、俺はその部屋に向かう。扉を開けるときに、一度振り向く。そのばあさんの気配が急に消えたのだ。感じたとおりで、そこには、ミラがいるだけで、老婆は消えていた。
「あのばあさん、まじで幽霊なのかもな。」
そう小声で呟く。そう、あまり、気にはしなかった。だが、ミラはどうなのかわからない。急に悲鳴でも上げられて走り去っていった暁には、俺が探しに行かなければならないはめになる。それに、今まで旅をしてきてこういうやつには、結構会っているものだが、何も起こらないことのほうが多いという経験もあったからだ。
ゆえに、俺は最低限の警戒をするだけにとどめておく。
さらに言うなら、疲れた。なぜなら、今日は色々と起きすぎたのだ。暗殺者の襲撃、『禁法』の使用、そして、試験の開始。
頭の中を整理する時間が必要だ。おそらく、これから見ていく世界は俺の望んだものであり、俺が拒んだものでもあるだろう。だが、それを見ないかもしれないし、見なければならないかもしれない。見てしまったとき、それを受け入れる覚悟、それが、俺にはあるのだろうか。
ふと、そんなことを考えてしまう。だが、俺は決めた。全てを受け入れ、俺について知る。
そして・・・・マリアを救う。
そのためには、なんでもする。
そう、それが俺のメフィストになる真の目的だった。未来を変える。

それが俺の目的だった。
マリアが死ぬという、しかも、殺されてという残酷な未来を。
　それは、俺とマリアが洞窟から帰ってきた後のこと。俺は町に未来を予言する者、要は預言者が来ていることを知った。
世界に対戦が起こる時期を予言し、完璧に当てたり、国の革命が起こることを当てたりと、有名な預言者。
図書館からの帰り道。偶然にも、その預言者を見つけた。闇のように深い色をした藍色のローブを身にまとっているだけという特長の。
俺はその周りには誰もいないことを確認し、その預言者に予言を頼んだ。
金を先に払おうとしたところで、その預言者がただで、未来を見てくれると言うので、見てもらった。
初めはどんな未来が予言されるのか楽しみだった。そう、興味があった。だが、その浮かれた気持ちは次の一言で、絶望という一つの言葉に摩り替わってしまう。
「あなたの幼馴染は死ぬよ。」
突然、そう告げられる。
俺は、動揺する。いきなり、幼馴染が死ぬと告げられたのだ。正気でいられるはずがない。しかも、予言してきたのが、予言して外れることはない言われるような預言者なのだ。動揺しないわけがない。
「うそ・・・だろ・・・。」
俺は、冷静な考えができないほどになる。だが、俺は心を落ち着かせようとする。簡単にはできなかったが、徐々に自分の心を落ち着かせることに成功する。死ぬのだというのなら、死に方次第では俺の力でマリアを救うことができるのではないか。そういう考えが生まれたからだ。その考えで、心は絶望の淵から少しだけ救い出される。それゆえに、俺は聞く。
「何故、いや、どうやって死ぬのだと言うんだ。」
「殺される。」
俺は少しほっとする。なぜなら、そいつがマリアを殺す前に俺がそ

いつを倒す、または俺が守り続ければいいのだから。簡単に考えてしまったが、俺にはそれが出来る自信があったのだ。そう、変えることができる未来だと思ったから、安心することが出来た。
「誰に？」
俺はそう聞く。
「『終焉の騎士』によって。」
俺は先ほどまで出てきていた希望の光が、闇に飲み込まれて行くのを感じる。なぜなら、そいつは、この世界で悪魔と呼ばれるものの末裔だ、死神だと呼ばれ、狙ったやつは必ず殺す。そういうやつなのだ。先月、この国最強の騎士アーサーもやつによって殺されたそして、殺された現場には、その殺したやつの血は一滴たりとも、見つからなかった。
それは、無傷でアーサーを倒した、そう、アーサーを圧倒していたことをさすのだ。
アーサーには俺も手合わせさせてもらったことがあったのだが、引き分けという不本意な結果に終わるだけだった。
それは、俺には勝てるわけがないということを指し示していた。しかし、勝たなければならない。
俺はそう決意して、世界について図書館を調べまわった。なにか、救う方法があるはずだと信じて。
そして、俺は未来を変える力を持つメフィストになることを決意し、現在に至る。
　それが、俺をここまで、動かした源とでもいうべきものだ。暗闇の奥深くに沈んでいた俺の心を手を差し伸べて、救い出してくれたマリア。
そんな彼女を死なせるわけにはいかない。そんな現実、なにがあろうと認めない。俺がこの腐った未来を変えてみせる。その意志が俺をここまで導いた。
だから、俺はこの、未来を変える力を持つこの世界で、『マリアの死』という未来を必ず変えてみせるのだ。

そして、昔のように一緒に笑って過ごすんだ。
そう改めて決意を硬くすると、俺に急激な眠気が襲い掛かる。
「すまない、ミラ。もうもちそうにない。おやすみ。」
そう一言だけどうにか口にすることができた後、俺の意識は夢の世界へどんどん落ちていった。
その最中、
「おやすみ。クレイデス。」
というミラの声が聞こえたような気がする。だが、それに答えるほど、意識は保たれてはいない。俺は返事することもできず、眠りについたのだった。
　夢を見ていた。
よく思い出せない。確か・・・俺と誰かがいた。それしか、思い出せない。それどころか、それ以上思い出そうとすると、頭痛が生じる。
まるで、なにか、真実を隠そうとするかのように。
だが、俺は何もできない。思い出そうとすればするほど、頭痛は増していき、耐えられないほどまでになる。
「めんどくせぇなぁ・・・。」
誰にも聞こえないような小さな声でそう一言だけつぶやく。
そして、夢に対する思考をとめる。
何故、俺にこんなことが起きているのかについては、興味がないと言えば、嘘になるだろう。
だが、すぐには分かりはしないだろう。そう判断したからだ。いずれ、旅をしているうちに答えはでるかもしれない。それまで、待てばいいし、出なかったら、出なかったで、この旅が終わったら、自分で調べればいい。ただ、それだけのことだ。
俺の目的は『マリアが死ぬ』という未来を変えることだ。
そう、だから、今はそんなことより、どうやって、『終焉の騎士』と呼ばれるマリアの暗殺者を倒すかについて考えなければならない。
そういう風にして、思考の切り替えに成功した俺は立ち上がり、窓

を開ける。窓を開けた瞬間、一筋の風が吹き抜ける。
「気持ちいいなぁ・・・。ふぁーーあ・・・。」
大きなあくびが出てしまう。だが、気にはしない。。だって、今ここにいうのは、俺と最近親しくなったミラの二人だけなのだから。
ミラをそろそろ起こそうかと思い、彼女のほうに振り返る。
気のせいだろうか。俺のほかに二人いた気がする。一人はミラだ。
じゃあ、もう一人はいったい誰だ。後ろでくくられた青い長い髪。
そして、明るい感じの服で、年は、俺と同年代か年下か。そんな少女がミラのベッドに入り込んで一緒に寝ている。
全くもって、面識がない。
ミラの連れだろうか。そうだったら、起きてから説明してもらおう。
そう考え、起こそうという俺の思考を止める。
だが、違ったら、どうなる？
起きたら、なんかまずいことになりそうだと俺の勘が告げる。
だが、起こしたところで、まずそうだったので、
「まぁ、起きるまで待てばいいか。」
そう小声で呟く。とりあえず、俺はこの少女について、俺が今、置かれている状況をもとにして、考察する。
まずは、この少女は俺の敵なのか味方なのか。
しかし、この答えはすぐに出る。おそらく、敵ではない。こんなスキだらけなのだ。敵だったら、こんなスキはみせはしないだろう。
かといって、味方かと言われるとどうなのかは、はっきり言って、わからない。
とりあえずは、起きてからだ。
さて、状況を整理しよう。
俺はメフィストになるための試験の最中だ。それで、試験の内容が地図の完成だから、旅をしている。そして、メフィストになったら、未来を変える。ただ、それだけだ。
だとすると、この少女はどこの人だ。
もちろん、なんの変哲もない部外者という可能性もないわけではな

い。だが、こんなときに限って、見知らぬ少女が突然、ベッドの中にいたなどという偶然が起きるはずがない。
だとすると、メフィストなのか？それとも・・・・・。
いろいろと考えられるが、とりあえず、状況からある程度の考察ができたので、今は良しとしておこう。
「全く何なんだよ。最近は色々と忙しく考えなきゃだめだなぁ。おい。」
そう、ため息をつく。
ていうより、こんな二人の健やかな寝顔を見ていたら、こっちも眠くなってくる。うつらうつらと、意識が遠ざかり始めているときに、彼女は目覚めた。
目が合った。
一言目になんと言えば、いいのだろうか。それに迷い、少しの間、沈黙が流れる。
「やぁ。」
とりあえず、一言。それから、向こうは少しの間、固まっていたが、ようやく、その口が開かれた。
「おはようございます・・・・・・何故、あなたが、この部屋に・・・。殺しますよ。アハ。」
えっと、今なんて言った？なんか、最後の方にまずい言葉が混じっていたような。まぁ、気のせいだよな。てか、気のせいじゃなかったら困る。気のせいだと信じて、もう一度彼女を見る。
・・・・・視線が鋭い。
あれ？もしかして、なんか俺悪いことした？ていうか、まじなの？
「ここは私の部屋ですよ。何故あなたのような男というのがいるんです？」
やばいぞ、顔では作り笑いしてるけど、その笑顔の奥底に非常にまずい殺気がある。
というか、それは間違ってるぞ。少なくとも。ここは、俺とミラの部屋のはずだ。絶対イレギュラーはお前だ。だが、なにかの手違い

で本当はこの人の部屋でした。または、あのばあさんにだまされました。なんてことが有り得ても不思議ではない。
なら、素直に謝って、その上で聞かなければならない。
「すいませんでした。この部屋ならいいと、宿のおばあさんに案内されたものでして。間違っていたのですね。本当に申し訳ないです。」
「えっ。」
ほんの一瞬の沈黙。彼女はベッドから飛び起きると、ドアを開け、外に出る。おそらく部屋があっているのか確認しに行ったのだろう。そして、すぐに顔を真っ赤にして帰ってきて、
「・・・。」
何があったのだろうか。とりあえず、この様子だと、俺は悪くはなさそうだ。ちょっとだけほっと肩をなでおろす。
「まぁ、突然のことだったんだし、気にしないで。ちなみに、何があったんだ？」
聞きはしたものの、だいたい推測はついている。彼女が間違っていて、俺たちが合っているという状況だ。
「・・・ここはミラと私の部屋です。」
うそだろ。おい。なんだ、この意味の分からないイベントは。これは、非常にまずくないか。さっきの赤面はもしかして、怒りのか。そして、目の前の少女は相変わらず、笑っている。心の中がどうかということは別として。
「ハハハ。」
思わず笑ってしまう。朝という一日の始まりが不幸から始まりそうな俺自身に。
そして、俺はこれから、どんなふうになるのだろうかと考える。おそらく、答えは簡単だ。
そう、このままいくと、この少女に俺は殴り飛ばされるという展開にいたるであろう。
そう考えた後、俺の頭に彼女の拳が飛んできた。

そして、俺の脚が地面から舞い上がり、奥へと吹っ飛ぶ。
朝から不幸だ。そう思いながら、飛んでいき、向こう側の壁に激突。
「いってぇ。」
起きたばかりでまともに働かなかった頭はこの壁との激突によって、どうやら稼動し始めたみたいだ。
そして、一番速い解決法を見出そうと考える。
それは何だ。
考えろ、俺。考えるんだ。待てよ、この部屋に案内したのはあのばあさんじゃねえか。それだったら、あのばあさんに聞けば、本当のことがわかり、解決法が見出せるんじゃないか。
そう考えた俺は、いまだに残る壁に激突した際の頭痛が響くが、起き上がり、ゆっくりと歩き出す。
とりあえず、入り口のカウンターまで探しに行く。だが、そこにいたのは小さなねこだけで。
「ったく。どこにいるんだよ。あのばあさんは。」
意気消沈した声で言う。しかし、ここにいないというのはだいたい予測できていた。なぜなら、あのどことも知れない場所から突然現れたようなばあさんだ。
そんな簡単な場所に。そして、そんなすぐには見つかることはないだろうと。
ならば、どうする。俺は昨日出会ったばかりのばあさんのいそうな場所について考える。
考えてはみるが、思いつかない。
ならば、どうする。決まっている。この宿にあるすべての部屋を回ってみる。一応、あのばあさんは宿主のはず。なら，この宿を離れることはあまりないはず。
思いついたら、すぐ行動というふうに行きたいところだが、踏みとどまる。
これで、いいのか。こう進んでいいのか。なぜだろうか、なぜここまで、これからの行動が気がかりになるのだろうか。

理由はわからない。
だが、これから先の選択一つで、未来は変わるからではないかと俺は思う。この世界に来たのはマリアの死という未来を変えるためだ。それのためにしなければならない選択というものがある。
この世界は未来を変えることができる。それは、素晴らしいことだと思いはする。
だが、それは裏を返せば、この世界で間違った、現実で不具合があるようなことになれば、現実でもそのようなことになる可能性があるいうことだ。そうなるのかは俺自身この世界について詳しく知らないから、どうとも言えない。
だが、それを考えたら、この単純なひとつの選択であろうと軽視することができない。
どの選択が、現実にどのような影響与えるのかわからないのだから。もしかしたら、この選択による現実に対する影響はごくわずかかもしれない。だが、非常に大きな可能性だってある。
そう、人に未来を見ることはできないのだから。
だから、俺はもう一度考え直す。この選択について。
ばあさんを探すため、すべての部屋を回って時間を使うか、あの少女に謝って、すぐにでも旅を再開するか。
そのどちらかを。
そして、それをすぐに決めなければならない。時間は止まってはくれないから。
なら、俺は・・・
俺はもちろん旅をすぐに再開することを決意した。この旅の本当の理由を考えたら、当然のことだ。
とりあえず、今来た通りに戻って、部屋に戻ることにする。あの少女に誤らなければならないことを考えると、気持ちがだるくなるが、そんなことは言っていられない。
そこから、部屋までは本当は短い距離であったが、俺には長く感じられた。それはそうだ。わざわざ、謝って怒られるために、行くの

だ。
それを考えたら、自然と体の動きも遅くなる。
何もなければ、俺は止まっていたかもしれない。
だが、違う。何もないわけじゃないのだ。俺はこれからの旅でマリアの未来を変えなければならない。そのために、この世界の地図を完成させる。
それで、メフィストになる。それが、本来の目的への過程なのだ。
だから、重くなる足を動かし、部屋の前まで行く。
そして、無造作に開けられたままの扉の中の部屋に入る。
「すまなかった。俺が悪かった。」
「素直に最初から謝ればいいのに。」
意外と優しい答えが返ってきた。本当に意外だった。だって、初対面の相手を殴り飛ばすようなやつだぞ。起こらないわけがないと思っていたのだが。
「許してくれるのか・・・。」
「ええ。それに、君の旅を手伝いたくなった。」
予想だにしなかった答えが俺に対して返ってくる。手伝いたくなったという言葉が引っかかる。それは、つまり、俺の旅について知ったみたいな漢字ではないか。俺は単刀直入に聞くことにする。
「何故、俺たちが旅をしていることについて知っている。」
「その答えは簡単よ。あなたたちの身なり。そういう動きやすい服装をしていて、安い宿に泊まっていることから、考えたら、あなたたちは旅人ではないか。ということになるわ。それに、聞いたら答えてくれたから。」
そう言って、隣にいる少女を指差す。そこにいたのは、もちろんのことながら、ミラであった。
「アハハ・・・。」
ミラはちょっときまずそうに笑っている。要は、ミラに聞いたが、聞いたというのは敗北感があるから、理由を適当に取り繕ったといったところなのだろう。

「そうか、それで。だが、何故俺の旅を手伝いたくなった？」
「それは、とりあえず、ミラが信じているあなたが進む道を見てみたいからかな。」
そして、少し悲しげな顔をして、
「あなた、寝言を言っていたのが聞こえたから。私も寝ぼけててね。その時はその寝言を言っているのはミラだと思った。けど、朝になってみると、そこにいたのは、君で。ミラとは真逆の位置にいた。その寝言の内容。未来を変えるという衝撃の内容。それを聞いたら、手伝わないわけにはいかないでしょ。」
寝言で言ってしまっていたのか。俺としたことが不覚だ。だが、聞かれてしまったのなら、しょうがない。
「じゃあ、一緒にくるのか？」
「ええ。一緒に行くわ。」
そうして、新たな仲間を迎え入れた。

誓い

その後、俺たちは考えた。とりあえず、どうやって、この世界の地図を完成させるかについて。
とりあえず、出た案は三つ。
一つ目、今分かっている地図の概略をこの世界の測量士に教えてもらう。その上で、測量のギルドに協力を要請し、一緒に地図を完成させるという案。
二つ目の案として、この世界に存在すると言われるメフィストの魔法を習得し、地図を完成させること。
三つ目はの案として、このまま旅を続け、独力で地図を完成させる。一つの地域の地図を完成させるのとはわけが違う。そう、仮にも一つの世界の地図を完成させるのだ。
それから、考えると、この三番目の案は完成するのに何年かかるかわかったもんじゃない。
そう考えると、妥当なのは一つ目の案か、二つ目の案ということになってしまうわけだが・・・。だが、考え方によっては、一つ目の案が出来ないわけではない。おそらく、それが、この世界に来て、測量をさせるための理由なのだから。
この世界の時間は現実と比べて、六十倍の速さで進んでいるわけだから、仮に、六年かかったとしても、現実では一年なのだ。だが、それでも、時間が進んでいるのは変わりはない。ならば、この案はできれば避けたいところだろう。
そして、一つ目について考えてみる。とりあえず、この案の長所について。人がかなり多く動員されるため、地図の完成はある程度時間がかかったとしても、ある程度ですむことだ。さらに、もともとある完成された地図を使うことが出来ると言う点だ。しかし、長所があるということは短所があるということだ。
この場合だと、測量士たちが持っている地図を全て揃えるのに莫大

な金がかかるし、測量ギルドに依頼するためにも金がかかり、今持っている金の量じゃ絶対に足りないということ。
そして、顔も知らないような人間に委託しなければならないこと。
別に信頼できないわけじゃないが、こういうものは自分でやったほうがいいと思う。
二つ目の案に関しても考えてみる。とりあえず、この案の長所は、メフィストの魔法を習得すれば、すぐに地図が完成すること。だが、それは短所でもある。そのメフィストの魔法が習得できなければ話にならないと言うことなのだ。
ここは、大きな選択になると思う。前の選択によって、ここまで来ることが出来た。だが、あの選択に関してはここに至るまでの時間が変わるだけで、おそらく、今の状態まで至っていただろう。
だが、今回は違う。今回は。なぜなら、今回の方法次第で、地図そのものが完成するか否か自体が変わって来るのだ。
だから、これは本当に誤った選択をしてはならない。だから、俺が生きて培ってきた脳をフルに使って思考する。
本当に、ベストな選択はどれなのかを。
そして、一つのことを閃く。そう、これが、本当に俺が望んだ世界なら、俺の望みはメフィストになって、マリアを救うことだ。なら、この世界に、その魔法を習得するための方法も存在するだろう。
俺は決める。これから、先の俺の運命ともいうべき道を。
「じゃあ、二番目の案でいく。メフィストに会って、そのメフィストの特殊な魔法とやらを、習得させてもらう。」
「そう。分かった。」
二人同時に言う。そして、俺は後ろに体を向け、歩き出す。これから、メフィストを探す。そう決意して。だが、俺は聞き逃さなかった。二人のかすかな声での呟きを。
「また、同じ道をあなたは進むのね。」
という理解できない一言を。これに関してははっきり言って意味が分からない。だが、聞いたところで教えてはくれないだろう。そう

感じる。なら、これについても自分で考えなければならないだろう。
だが、来るべき時が来れば、二人から聞ける。そんな気がする。
だから、一旦忘れることにする。
そう、決断した俺には、立ち止まって、考えている時間も、おしかったのだ。
そうして、メフィストを探すための作業に取り掛かり始めた。
とりあえず、ここは城下町なので、大きな図書館ぐらいはあるはずだ。そう思い、俺は図書館を探し始めた。そして、探している最中なのだが、日が暮れ始めている。思っていたより、この城下町は広かった。一日かけて回りきることが出来ないとは想定外だ。
「どんだけ、広いんだよ。全く。」
そんな誰も聞く人のいない中、一人で呟く。
ここで、図書館を手っ取り早く見つける方法を思いつく。人に聞けばいいのだ。何故、こんな簡単なことに気付かなかったのだろうか。理由は、簡単に思いついた。そう、俺が幼いころから、人との付き合いが少なかった。そして、それが、そんな簡単なことに気付けなくなるような足かせになるとは。
だが、今は、そんなことを気にしている場合ではない。
とりあえず、思いついたのだから、すぐ、実行。といきたいところなので、周りを見渡す。
すると、頑丈そうな重装備に身を固め、馬に乗っている一人の騎士がいた。他には、井戸の水を汲んでいる人、木の上で寝ている人、逆立ちをしながら、歩くというよく分からないやつ等がいた。
とりあえず、この国のことだったら、ああいう騎士にでも聞けば、図書館の場所くらい分かるはずだ。
「すみません。図書館の場所を教えてくれませんか。」
「ああ。ったく何だよ。今。休憩中なん・・・！すみません。閣下でしたか。城まで護衛させてもらいます。」
わけがわからない。俺が・・・閣下？閣下ってのはあれか。王様という立ち位置のあれなのか。いやいやいや、ありえねぇだろ第一、

俺とこいつは初対面だし。
こいつの勘違いか？だが、さすがにねぇだろ。
国のトップを間違えるなんて。
どんなにサボりであろうと、一応は騎士だぞ。そいつがそんなこと・・・。
とりあえず、このまま連れて行かれるのは避けたいわけだが。そんな俺の思いとは裏腹に、こいつは、どうしても、連れて行きたいみたいだ。
こいつをここで、さくっと気絶させてもいいが、さすがに、かわいそうだ。
なら、いっそ、付いて行ってしまおう。そう考えた俺は、その騎士の後に続く。周りを見渡すと、ミラとあの少女・・・名前を聞いていなかったな・・・が遠くにいた。俺は軽く二人に目線で行ってくると伝える。その目線に対して、彼女たちはうなずき返してくる。
そして、間違ってもドタバタ騒ぎは起こすなよという視線と、何が起ころうと死なないでという視線が送られてくる。
俺もそれに対して、思うことはあったが、何も言わず、その騎士について行くことにした。
そういうふうなことがあって、今俺は城にいるわけだが・・・。これは一体どういうことなんだ？
「何故、俺が二人もいる？」
驚きのあまり、口に出してしまう。だが、そんなことは気にしない。いや、気に出来るほどの余裕はない。だって、自分が二人もいるのだ。そんなことがあったら、普通、落ち着いていられないだろう。だが、すぐにその動揺も押さえ込む。そして、この現象について、自分なりの思考を展開する。
とりあえず、これが幻影であるパターン。
二つ目に、この世界においての俺がこいつで、現実世界における俺が俺であるというパターン。
三つ目には、こいつらは俺を語る偽者というパターン。

他にも色々考えついたが、まだ可能性がありそうなのは、この三つだけだ。一番確率が高いと考えられるのは、二つ目のパターンのこの世界の俺ということだろう。
なぜなら、この世界において、こいつは王だ。そんなやつが偽者でしたなんてことがまず有り得ない。それに、偽者ではない気がする。そして幻にしては効果範囲が広すぎるし、俺が発動に気づかないほどの高度な魔法を使えるやつは早々にはいないからだ。
このような理由を基に考えると、この二つ目のパターンが一番妥当だと考えられる。だが、そうだと、説明がつかないことが出てくる。同じ時間に同じ人物が違う場所で存在しているということになるということだ。これに関して考えた場合、問題なのは、普通は俺という同じ存在はこの世界には存在できないはずだ。まぁ、これも仮説なわけだが。そう、それが起きているということについてだ。
だが、これについては考えていても仕方がないだろう。なぜなら、ここは俺が望んだ世界であり、メフィストの夢であるのだ。何が起こっても、はっきり言って不思議ではない。
考えるのはここらへんにして、もう一人の俺と話をすることにする。
「よお。とりあえず、お前は誰だ。」
というこの事態の本質を聞いてみる。もしかしたら、答えてくれるかもしれない。そして、これが、もう一人の俺だったら、返ってくる答えは決まっている。そう、この会話はこれが本当に俺なのか確かめるためのものだ。
「お前こそ何だ。」
予想通りの答え。だが、これだけでは確定しない。だから、もう少し続けてみることで、判断していこうと考える。
「いいだろう、答えてやってもいいが、お前に一つ聞く。お前の真の生きる目的を教えてくれ。」
これが、俺かどうか判断するためのキークエスチョンだ。そう、俺なら・・・。答えが予想できるから。
「アハハハ。面白い質問をしてくるやろうだな。いいだろう。その

質問にこたえてやろう。その代わり、お前に対してもその問いの答えを要求する。その質問の答えは、ある黒髪の女を守り続けることだ。」
目の前にいる俺は俺がなにがしたいのか感づいたようだった。
やつの質問の答えからして、こいつはこの世界での俺だ。
この世界が俺の望んだ世界なら、この世界の俺はマリアの未来を変えることに成功しているはずだ。それはつまり、これから先、マリアを守り続けることを意味する。
「そうか、やはり、お前は・・・。俺の目的はある黒髪の女の未来を変えることだ。だから、お前に頼みがある。」
マリアの未来を変えることに成功していることはつまり、俺がメフィストになっていることも指す。だから、俺は頼む。
「何だ、言ってみろ。」
「メフィストの魔法を教えてくれ。」
すると、目の前の俺はだれも気付かないような一瞬だけ悲しそうな顔をして、言う。
「ああ、いいだろう。だが、これを習得することは、分かっていると思うが、過酷なものになるぞ。」
「ああ、いい。それが、マリアの先に待つ腐った未来を壊すためのてだてになるなら、俺は何でもしよう。」
そう、必ず。必ず、俺がなんとかしてみせる。そう、心に誓う。
「・・・。」
目の前の俺は何かい言いたそうに見えたが、何も言わなかった。
　そして、その日から、三日間みっちり俺は俺にしごかれた。身体的にも精神的にも。
思い出したくないぐらい苦痛を強いられるものだった。
だが、それのおかげで、俺はそのメフィストに託されている魔法を習得した。いや、違う。今回したのは、その魔法を受け入れることができるようにするために鍛え上げたのだ。
メフィストの魔法はもともと、人間が持っている力なのだ。ただ、

それを使う方法と、それを使えるだけの身体と精神がないだけで。
一応、彼はもう、使えるだけの状態にはなったとは言うが、はっきり言って、よくわからない。だが、それが最初に使うときには普通なのだという。
そして、ミラとあの日出会った少女、アリシアが見守る中、俺は魔方陣を描く。この魔法は地面に魔方陣を描く必要があるのだという。理由はわかりやすい。
地図を得るということは大地の情報を得るということなのだ。それは、つまり、大地から力を借りるということ。それと、人間のもともと持つものを組み合わせるということを指す。
「汝、なにゆえ地図を求める。」
大地の声が聞こえる。地面から這い上がってくる声。耳に残り響く低く、冷たい声。
始まった。今、これより俺と大地の精神比べの始まりといったところか。俺は思考を、現実から切り離し、大地と俺だけの思考に集中させる。五感から伝達される信号の一つ一つを止める。
「俺は、あの世界を変えるために。現実世界をこの世界に導くために地図を求める。」
「それが、不可能な世界への地図だとしてもか？」
俺は心の中で、震撼し、今の言葉がぐるぐるとまわる。それが、不可能な世界への地図だとしてもか？その言葉が持つであろう意味は明白だ。この世界には現実の世界はなりはしないということだ。だが、そうだとしても・・・。
「俺はこの世界まで、導いてみせる。それが、メフィストの真の役目だから。」
「ほう。そのような答えを聞いたメフィストは初めてだ。いいだろう、この世界の地図託してやる。だが、いいな。その役目忘れるなよ。」
そう言うと、俺の目の前に光が集まる。あまりの眩しさに目を閉じる。ようやく、眩しくなくなった。そう思い、目を開けると、その

先には一つの地図があった。
それを広げてみる。そこに広がっていたのは、大きな大きなこの世界の地図だった。それは、細かいところまで、記されている。住宅街があれば、それが誰の家なのかといったことまでだ。
地図は完成した。これで、俺は晴れてメフィストだ。
「来いよ、アーサー。」
「呼んだか？」
そう背後から声が聞こえる。全く毎度のことながら、何でこう気配を消して現れたがるんだか。そう思いはするが、口にはしない。
空気の振動源を探す。すると、やはり声のした方向ではなく、目の前が振動していた。さらに言うと、声のトーンがかなり変わっている気がする。まるで、若返ったような、そんな感じだ。
だが、そんなことにはもう驚きはしない。メフィストに対しては常識を持って、接したところで、意味がないのだ。
だから、俺はそのまま会話を続ける。
「この世界の地図を完成させたぞ。」
「おや、思っていたより早くできたな。」
「ああ。」
「そうか、見せてもらおうか。」
俺は手に持っていた地図をやつに手渡す。
「ふむふむ。よし・・・オーケーだ。この地図は完璧だ。これで、君も晴れてメフィストだ。」
ようやく、なることが出来た。これで、俺は・・・未来を変えることが出来る。そう、だから。
「ああ。じゃあ、これから、好きにさせてもらうぜ。」
「ああ、別にかまわない。」
そう言って、男は消えていく。まただ。また、この男は、姿も残らず、消えていく。だが、もうそんなことはどうでも良かった。
ようやく、俺はメフィストになることが出来た。だから、しなければならないことがある。

そう、未来を変える。俺の望んだこの世界を現実にする。一人の少女を救うために。

進むべき道

メフィストになった今なら感じる。どうやって、未来を変えるのか。その方法を。そして、この世界は現実と切り離された世界でないことを。
それは、つまり、この世界で起こしたことは向こうの世界で起きることがあるということなのだ。
そう、つまり、罪のない人々を殺してきた暗殺者のやつを、ここで、倒すことが出来れば、向こうの世界のやつにも影響を与えるということ。それが、この世界での効果。
今の俺なら、やつと戦うことが出来るかもしれない。
そして、この世界の地図を完成させることのできるメフィストの魔法の力を習得した俺になら、この世界のやつの居場所が分かる。そう、さっきの地図製作の際に調べておいた。
ここから、東に半日ほど歩いたところにある町にやつはいる。
ルーフェン、それがその町の名。その町の名を思い出した瞬間、急に頭痛が走る。だが、まるで、何事もなかったかのように、耐える。
「俺は今から、目的を果たしに行く。お前たちはどうする？」
そう、二人の少女に尋ねる。
「その前に話があるわ。そう、今から行く町について。」
「ああ、だが、後じゃ駄目なのか？」
「ええ、今じゃないと。」
そう言って、ミラは語りだした
「この町はもともと、ある程度栄えていた町だったらしいよ。だけど、この町は廃れてしまった。何故だか分かる？」
ミラは俺に対して、問いかけを提示してくる。
「うーんと。この町の家には崩れてる場所が少々見られる。それから考えると、戦争に巻き込まれたとか、そんなところだろ。」
「正解だけど、不正解でもある。まぁ、半分正解といったところか

な。この町は、ブラックギルドと、ホワイトセブンの対決、いや、戦争といっていいぐらいのことが起きたの。」
ブラックギルドと、ホワイトセブンの二つの勢力の対決か・・・。
それを聴いた瞬間、また、一筋の痛みが走る。
この世界に来てからの徹夜での情報収集で得た情報の中にも、そんな二つの勢力があったな。確か、ホワイトセブンは確か王の直属の七人の戦士で、ブラックギルドは暗殺や窃盗を主とする裏ギルドだったはずだ。確か、ホワイトセブンがゆく戦場は全てがリセットされたかのごとく、生きたものはいなくなる。そして、ブラックギルドに関しては、現れたら、周りは血で染まるという。
はっきり言って、どちらもいわくつきの集団だ。
ただし、人数で言うなら、ギルドというぐらいだから、ブラックギルドの方が多い。
ゆえに、ホワイトセブンもまだまだ、殲滅は出来ていないとのことだったが。
「その戦争は、恐ろしい被害を生んだわ。家は消し飛び、辺りには毒液の蒸発した跡が残り、そして、小さな村一個が入りそうなくらいの、でかい穴が開いたわ。」
ミラは悲しそうに言う。そりゃ、そうだろう。この町で、人が大量に死んだのだ。だれだって悲しくはなるだろう。
それにしても、村一個が、入るような大穴を開けるなんて、どんだけ、規模のでかい戦闘しているんだよ。
そりゃ・・・戦争と言いたくなるな・・・。
「それでも、この町は再び立ち上がることが出来る・・・はずだった。資金の問題はなかった。そのときには充分すぎるぐらいあったから。」
「なら、何故なんだ。ある程度栄えている町だったら、そのまま再建するだろ。」
普通はこう思う。だが、何かイレギュラーなことが起こったのだろう。

「何も起こらなければ・・・ね。だけど、その何かが起きた。そう、その戦争で戦っていた一方の勢力、ブラックギルドの中でも、一番最前線で戦っていたブレイトッドがその町に拠点を敷いた。」
「ブレイトッドだ・・・と・・・。」
ブレイトッド、それは、俺が現実で最後に戦った敵。暗殺ギルド。やつらの強さは半端じゃなかった。いや、正確には勝てなかった。そんなやつらが来たのなら・・・。
今の話にも頷くことが出来る。
だが、話を聞くたび、俺の頭の痛みはいっそう増していった。なぜだ。いったい。
「そう、そのせいで、町民は逃げ出した。もちろん、戦った人たちもいたそうよ。でも、その人たちは殺された。そして、あなたの目的の人がそこにいるのなら、その人はブレイトッドの一員のはずよ。」
そうなのか、やつらの中に、俺の標的である『終焉の騎士』がいるのか。
だとしたら、俺はやつを倒すことが出来るのだろうか？
俺はあの組織に負けた。そんな俺にやつは倒せるのか？だが、やらねば、ならない。必ず。
「そうか、だとしても、俺は行く。」
「なに、ばかなこと言ってんのよ。行っても、勝てるわけないでしょ。」
アリシアの叫び声は響き渡る。
この言葉・・・前にも言われた気が・・・
何故だ。この会話を聞くたび、頭痛は、ひどくなっていく。何かあるのか、この会話には。一体何が。
考えていくうちに、三つの単語がループし始める。ルーフェン、ブレイトッド、終焉の騎士・・・。
ループするたび、頭痛はひどくなっていく。
だが、俺はそれでも、その繰り返しを決してやめない。頭痛はつい

には、自分自身では立てないほどまでになってくる。そして、前に倒れる。
だが、俺の体が地面に触れることはなかった。
支えられている。誰に？そうか、この手は、ミラとアリシアか。二人が支えてくれてるなら、体は大丈夫だ。
「すまない。俺の体任せた。」
「うん。」
「いいわよ。」
二人の返事を完全に聞いている余裕はない。ただ、頭の中で単語を繰り返す、それだけの作業。
それなのに、やけに、しんどい。
そして、頭を銃で撃ちぬかれたような頭痛の波が走る。
それらの単語の先にあった壁を粉々に破壊していく。
そして、思い出す。忘れさせられた記憶を。そう、俺が前に終焉の騎士に体を、上下に真っ二つにされ、殺されたこと。単純に後ろから串刺しにされて、殺されたこと。
何回も、終焉の騎士に殺される俺の記憶。
一度たりとも勝つことが出来なかった俺の記憶。
マリアの未来を変えられなかった俺の記憶。
「アハハハハ・・・。アハハハハハハハ・・・。」
もう、笑うしかなかった。全て、俺がこの世界で、終焉の騎士に挑むが、殺されるという絶望的な記憶だから。
当然だ。今の自分と同じように、終焉の騎士を倒そうした自分が何人もいた。だが、それらは全て、どんな手を使おうと殺されているのだ。
なら、どうすればいいというのだ。
こんな絶望的な状況で。
「ようやく、思い出したみたいね。」
突然、横から声が聞こえる。一体誰だ。左右を交互に見る。そこには、見慣れたミラとアリシアがいた。そうか、確か俺の体はミラと

アリシアに支えてもらっているんだった。そんなことも忘れてしまうほど、俺はあせっていた。
「お前が初めてだよ。ずっと繰り返されてきたこのお前の世界で、その記憶の存在に気付いたお前は。」
そうか・・・。だから、ミラたちは俺にあんな言葉を・・・。俺は同じことを繰り返してきたのか。そう、勝てずに殺されるという単純なループのなかで。
「お前はここで何回繰り返してきているか分かるか。」
突然の質問。数えてみようとする。だが、浮かびはするものの、数が多すぎて考えられない。一体何回俺は死んでいるんだ・・・。
「分からない。数が多すぎて、数えられない。」
「まぁ、そうだろうな。現実の世界で、三年の時が流れている。これが、どういう意味を指すか分かるよな。そう、この世界では百八十年の時が流れている。そして、君の一回殺されるまでのループが平均五日間だ。それから、一体何回お前が何回殺されたかの回数が分かるはずだ。何回か分かるか？」
アリシアに言われて、はっとする。現実では三年のときが流れている・・・だと。俺はマリアを三年も待たせているのか。俺は一体何をやってんだよ。
何で、一万三千百四十回も戦って、一度たりとも勝ててないんだよ。運命は俺のことを呪っているのか・・・？
そして、答える。
「一万一万三千百四十回といったところだろう。」
「ええ、そうよ。」
何故、俺は生きている？そんな素朴な疑問が生まれた。おかしいはずだ。なぜなら、俺はこの世界で、何度も死んでいるのに生きている。
「おれは何故生きている。俺は殺されたんじゃないのか？」
「いいことを聞くな。お前はメフィストになった。それゆえに、お前は不死身の存在となった。いや、ちょっと正確ではないな。この

世界でお前は、死んでも死にはするが、死にはしないという存在になったのだ。そして、何故かは分からないけど、メフィストになった最初のころはこのことに気付かせないために、死んだ際に、記憶が消えるようになっている。そう、メフィストの夢に入ってからの記憶をな。そして、その記憶の存在に気付くことが出来るようになってからは、死んでも記憶は消えない。そう、メフィストとして覚醒したということだ。」

「そうか、だいたい、仕組みは分かった。」

俺は。要するに、俺はこの世界では一定時間が過ぎれば、蘇生するといったところだろう。

俺のこの世界での時間はこの世界にいる限り永遠に進まないといってもおかしくない状況だ。だが、現実ではこの世界よりはるかに遅い速度だが、進み続けている。おそらく、俺がこの世界で、やつを倒さねば、現実には戻れないだろう。

なら、これから、俺の記憶を元に勝つための戦略を練っていこうではないか。次は必ず勝つために。

「よし、今から、しばらく、やつに勝つための作戦でも練るか。」

「ええ。」

「いいわよ。」

そう言って、俺たちは地面に座り込んだ。

「とりあえず、向こうは暗殺ギルド。つまり、大人数だ。それに対抗するにはどうしたらいい？」

「一応、相手が暗殺ギルドである以上、こっちの半端な勢力程度じゃ、私たちは殺されるわ。」

分かってはいたが、明らかにこちらが劣勢だ。そうだとすると、どうすればいい？自分の中で問答する。

「ねぇ、それなら、ホワイトセブン辺りに頼むのはどう？それだったら、暗殺ギルドとまともにやり合えると思うけど。」

「だが、仮にそいつらに頼むとしよう。そいつらは俺たちにようなどこの馬の骨とも知れぬやつらの手助けなんかするか？」

そう言うと、ミラは深く考え込み、黙ってしまう。だが、その代わりにアリシアが、俺に言う。
「それは実際に行ってみたら、分かるわよ。」
「なぜそうだと言い切れる？」
「そんなの簡単よ。勘よ。私のね。」
俺は唖然とする。適当にもほどがあるだろう。だからといって、俺にわかることではないし、案がない。
「勘・・・か・・・。他・・・。」
とりあえず、そこまで深く触れずに、華麗にスルー。
「華麗にスルーかましてんじゃねぞ。」
ミスった。まさか、軽くでも怒るとは思いもしなかった。だが、ここで、謝るのもこっちの面がない。
「じゃあ、他。」
俺の心の中で開催される議会では、スルーし始めたら最後まで。というふうに賛成多数で、決定した。
「・・・。」
決定し、実行したまではいい。どうやって、この冷酷な怒りの視線を送り込んで来ているやつはいったいどうする？議会の議題はすぐさま、それに入れ替わる。
「このまま、スルーしようぜ。」
という案も俺の心の中の評議会では出てくる。
だが、さすがに、今回は賛成多数というわけにはいかない。なぜなら、この後、無視すればどうなるか分かっているやつが多数だからだろう。
「そんなことして、どうなるか、分かっているだろ。」
「ああ。分かっているさ。だからこそだ。俺の本質はエムだ。」
その一言の瞬間に、議会中が静まり返る。
そして、その発言をしたやつに対して、うわぁ、こいつ何言ってんの。という視線を送り込む。
それによって、あんなにガンガン言っていたやつが静まり返る。

「とりあえず、スルーをもう一度したら、俺に命はないと思ったほうがよさそうだと思うが、みなはどう思う？」
静寂に包まれた評議会がその一言で、あの発言の前の状態、つまり、お互いで話し合っている状態に戻る。
「とりあえず、謝るのが妥当かと。」
「だが、それはわがプライドが許さん。」
その発言後、そいつは両隣、そして、前後、周りに座っているやつらに、叩きのめされた。それは当然だ。プライドなんかより、今は生き残らせることができる命を選ぶのが普通の精神であろう。なぜ、あんな発言をするバカがいるのだろうか、全くもって分からない。
「みな、多数決を取る。このまま、謝るでいいとおもうやつ、手を挙げろ。」
みんな、一斉に手が挙がる。これはぱっと見ただけでも、過半数は軽く超えているだろう。
「よし。じゃあ、謝るに決定。それじゃ、現実の俺頑張れ。」
そうして、俺の心の中評議会は終了した。
「すまなかった。」
俺の中で開かれた議会の決定どおり、心を込めて、本当に申し訳ないという気持ちで謝る。これで、許してはもらえないだろうが、生きてはいられるだろう。
だが、その数秒後、俺は悟る。現実はそんなに甘くはないのだということを。
鳩尾の部分に鉄拳がフルで入る。そして、俺の体は宙を舞う。いや、宙を舞うという表現は正しくないな。
宙をきる。そんな言葉はないが、それが正しいのであろうと思わせられるほど、吹っ飛ばされた。
木に衝突したかと思ったら、かかと落としが脳天に直撃。意識が完全に飛んでいってしまいそうになる。
だが、それをこらえて、意識を保つ。
それも束の間、次にはもう一度鉄拳が飛んでくる。今回は狙いが頭

だったので、気合で何とか避ける。
風を切る音。
何かが木に突き刺さる鈍い音。
木が向こう側に向かって倒れる非常にやばい音。
俺・・・さっきので、意識失ってたら・・・死んでたんじゃね・・・。
今になって体に急な寒気が走る。
「すまなかった。すまなかったって。俺が悪かった。俺が悪かったです。」
必死に謝る俺。それを上から見下ろすアリシア。その二人を遠目で見ながら、空を見ながら、空は青いなぁと呟くミラ。
そんな異様な光景がそれから、一時間続いた。
なんとか、一時間を乗り切った俺は、いまだ、機嫌が悪いアリシアとなんか空をずっと見ていたミラに声をかける。
「おーい。そろそろ、話し合いを再開しようぜ。」
「次、スルーしたら、どうなるか分かっているわよね。」
「ええ。分かってます。」
さすがに、もう、俺は何もいえない。本当に、次は・・・俺が生きているかどうかに関わってくるだろうから・・・。
とりあえず、そちらはさておき、ミラからの返事がない。一体、さっきからずっと、空を眺めて、どうしたのだろうか。
「おーい。ミラーーー。」
「・・・。」
まだ、返事はない。ならば、近くに行って、もう一度呼んでみることにするか。そう決めると、ミラの方向に向かって歩き出す。
そして、ミラのすぐ近くまで来ると、もう一度言う。
「おーい。ミラーーー。」
「ふぉえ。」
突拍子もない声を出して、俺のほうを向く。どうやら、意識が別の世界に行っていたみたいだ。

そして、赤面すると、どこかへ行ってしまった。
なんか、最初出会ってから、ミラのだいたいの感じはつかめてきたと思っていたが、こんな一面があるとは意外であった。普段の彼女からは、想像が出来ない。
とりあえず、俺から見た彼女は優く導いてくれるしっかりしたやつだったのだ。さすがに、そこから、こんなイメージは出てこない。そんなこんな思っているうちに、向こうからミラが歩いて帰ってきた。
「どうしたんだ？」
「なんか、意識が別のところに行ってたみたい。」
やっぱりか、そう心の中で納得する。
「どんなところに意識は行ってたんだ？」
「見渡す限り、青い青い空しかないというところ。すごく綺麗だったよー。一人だったら、おそらく、ずっとあそこに意識が行ったままだったりしたんじゃないかな。」
「それはすげぇなぁ。俺もそこ見てみたいなぁ。」
俺は純粋にそう思った。周りに雲がなくて青い空しかないって光景を想像したら、最高でたまらない。
「どんな感じでいいと思うの？」
「だって、考えてみろよ。広大な空が雲もなく、青一面なんだぜ。なんか、自由な感じとかするじゃんか。それに、単に、見ているだけで、最高なんだよ。そういう、美しい景色ってのは。」
そう、俺は自由、いや安定を望んでいるのかもしれない。そのために、俺はまだ進まなくてはならない。
そして、俺たちは考えた。
勝つための方法を。
そして、俺は思いつく。だが、隣の二人には詳しくは話さない。いや、話せない。なぜなら、それは俺の記憶から導き出された答えで正しいかはまだわからないから。
「おい。ミラ、アリシア。俺、思いついたぞ。だが、内容について

は伏せておく。そして、今から言うことをやってくれないか？」
「ええ。その前にちゃんとした説明をね。」
ミラから迫られる。顔から息がかかるほどに。だが、俺はそんなことは気にしないで、話を進める。
「すまない。今は話せないんだ。本当にすまない。」
俺はいつになく真剣な顔で言う。その顔を見たミラとアリシアはともに大きなため息をつくと、
「仕方ないわね。」
「しゃあねぇなぁ。」
と言い、俺に対して同意をしてくれる。
いつの間にか、俺を信用し、ついてきてくれるやつらがいる。昔と俺は少しずつだけれど、変わってきているようだ。そう、それも、マリアのおかげ。
マリアがいたから、俺は変わることが出来たのだ。
あのときの俺に対して、声をかけ、救ってくれたマリア。
「今度は俺がお前を救う番だ。」
青く広い空に向かって、そう呟く。
「ん。なんか言ったか？」
「いんや。言ってねぇよ。じゃあ、とりあえず、これからの動きについて話す。」
「分かったわ。」
「了解だ。」
「では、作戦について説明させてもらう。今回の作戦において、一番の目的は終焉の騎士、やつを倒すことにある。だが、その上で障害と成り得るものがある。それが何が分かるな。」
「ブレイトッド。」
その名を聞くのも、言うのも、もう、いやなものだ。なぜなら、俺だけではなく、他にも様々な人が暗殺されかけたり、暗殺されてしまっていたりするのだ。そんなやつらのことを口に出して、思い出したくもない。今はそれでも、そいつらと向かい合わなくてはなら

ないのだ。
「ああ、そうだ。ブレイトッド。そいらが壁となる。その巨大な勢力を俺たちだけでは潰すことはできない。ならば、こちらも勢力を増やせばいい。ホワイトセブンはよく考えてみれば、王の直属の戦士だ。俺から頼み込めば、容認してくれるはずだ。」
「どっから、そんな自信が出てくんだよ。最初に言ったのは私だが、あれに頼むのは、不可能だ。」
確かにそんなことをアリシアが冗談で言っていたのは分かる。だが、それは、よく考えてみると、実現可能なことなのだ。今の状況でなければ不可能なことなのだ。
「ああ、普通はな。だが、この世界は違うだろう。この世界の王は俺の願いをこの世界で叶えた俺だ。それなら、やつは俺に対して手助けしてくれるはずだ。そう、これが俺の望んだ世界なら。」
「ふぅーん。面白いことを考えるのね。確かによくよく考えると、そうなるわね。」
「確かに、そうだが、本当に協力するのかね。この世界でのお前は。」
「それだけなら、俺たちに協力しないかもしれない。だからこそのブレイトッドなんだよ。先のルーフェンの戦いを思い浮かべてくれ。」
ミラとアリシアは少しの間だけ、考え込むと、俺の考えが分かったかのような顔で、俺を見る。
「そうだ。やつらはその戦いでブレイトッドに勝ててはいない。それなら、話は早い。やつらにもう一度、ブレイトッドと戦わせるんだ。俺自身のことは俺のことが、良く分かってる。俺は言わずとも分かるとは思うが、負けず嫌いだ。」
うんうんと深々とうなずく二人。普通の状況なら、ここまで頷かれてしまうと否定したくなるものだが、今回は自分で言ったことなので何も言わない。
「つまり、なんとかして、この世界の俺もブレイトッドを潰したい

はずだ。だが、その機会がない。そして、終焉の騎士がいることを知っているから、手出しが出来ないのであろう。それなら、終焉の騎士を俺が何とかして、ブレイトッド殲滅の機会を与えてやればいいってことだ。」
そして、俺の話は続く。
「ミラ、アリシア。お前らには、この世界の俺との交渉を頼みたい。交渉については多分、今話したとおりで充分なはずだ。明日の早朝、太陽が昇り始めたときぐらいに、にここに集合。」
そう言って、西に見える純白の城を指差す。
「わかったわ。」
「了解した。」
そう言うと、二人は西に向かって歩き出す。
たとえ、交渉相手がこの世界の俺であったとしても、完璧に信用できるわけがない。
それゆえに、ミラ一人ではなく、アリシアも命じたわけだが、何とかしてくれるだろうか。いや、何とかしてもらわねば。
やつらは俺をを信用して、行ってくれたんだ。
それなら、それを有効に使えるように、俺は俺の進むべき道を進むのみだ。たとえそれが、戦争と言う名の茨の道であろうと。

予期せぬ再会

「さて、と。そろそろ、俺も動くとしますかね。」
まず、テレポを使い、俺に禁法を教えた男、ロドスに支援を求めることにした。
師の研究所の扉の前まで来ると、二度扉を叩いた。扉の中から返ってくる声はなく、沈黙がしばらく続いた。
留守なのか・・・？あまりにも長い沈黙は俺に対して、そんな予感を想起させた。
だが、その永遠に続くかと思われた沈黙も、あの頃聞いていた眠そうな声でかき消された。
「ふぁーあ。やぁ。」
「ういっす。お久です。」
この人は相変わらずだ。こんなに時が流れているというのに、全然変わっていない。眠そうにたるんだ目にだるそうに曲がった腰。だが、今はかつての師を懐かしんでいる場合ではない。俺はこの人に協力をしてもらうために交渉に来たのだ。
「えっと・・・」
「ええ。言いたいことはだいたい分かってるよ。こうだろ。『師匠。俺もうこんなに大きくなって、こんな女性を連れて歩けるようになったんですよ。俺たち結婚するんですよ。てへ。』みたいな感じだろ？」
「師匠。すんませんが、一度・・・宙に舞え。」
言うまでもなく、宣言どおりロドスは宙を舞い、地面に叩きつけられた。
「ったく。ていうか、こんな女性ってどんな女性だよ。」
俺はそう、ぼそっと呟くと、師匠は力なく指で俺の後ろを指した。
そんなバカみたいなというよりバカな師匠はほっといて、振り返ると、そこには見慣れた黒髪の少女がいた。

俺は、久々にマリアを見て、心になんとも言えぬ感情が渦巻く。この世界のマリアは死という未来を避けている。それはいいことだ。だが、彼女を見ると、現実にいる彼女を思い出してしまう。そう、彼女自身は知らないが、彼女は殺されるという未来から開放されていないのだ。その事実を知らないで、俺が眠りにつき、一週間、一ヶ月、一年、そして、三年の月日が流れていった。彼女はまだ俺のことを待ってくれているのだろうか。もう、三年にもなることをさっき知った。三年。それはなにも知らずにただ、待ち続けるにはつらい日々であろう。そんなつらい日々の中で、今になっても待ってくれているのだろうか。

だが、待ってくれていようと、待ってくれていなかろうと、俺には関係ない。ただ、俺はマリアを想い、慕い、愛している。そして、マリアも俺のことを愛してくれていた。ただ、それだけでいいのだ。お互いのことを想っていれば、たとえ離れ離れになったとしても・・・。

「やぁ、マリア。」

「やっほー。クッスー。」

「今日はどうしたんだ？」

「今日はね、クッスーがブレイトッドと戦うって聞いたから、戦争で勝つために仲間として、加わろうかなと思ってね。もう覚悟はできているよ。クッスーのためだったら、戦える。」

なん・・・だと・・・。マリアがこの戦争に加わるだと・・・。確かに、マリアがこの戦争に加われば、かなり戦力が増すだろう。だが、だとしても、マリアをあの戦場には連れては行けない。もう、マリアがあんなふうに血だらけになって倒れる姿は見たくないんだ

「だめだ。マリア。君はこの戦争には来ないでくれ。」

「でも・・・。」

「でもはなしだ。もう、俺はお前が傷つくのは見たくねぇんだよ。

「クッスー・・・。ごめんね。この戦いも私のためのものなんでしょ？現実かこの私かは分からないけど。私・・・、何で、こんなにクッスーに助けられているんだろう。自分のことは自分でなんとかしなきゃけないのに。」
マリアは言葉どおり無力な自分を悔いるように、力なく呟く。
「そんなことはないさ。マリアは無力なんかじゃない。今の俺があるのは、マリアのおかげだし。この世界にやって来れたのも、マリアのおかげだ。そして、マリアは無力でもいいんだよ。好きな女を守るってのは男の特権ってもんだろ。」
俺は後半になっていくにつれて、自分で顔が頬が紅潮していくのが、分かるほどになっていった。
そんな俺を見て、マリアは一笑いすると、言った。
「そうなんだ。じゃあ、私の大好きな王子様。私を救ってね。」
そんな言葉に、二人とも、頬を紅潮させる。
「ああ。救ってみせるさ。こんなかわいいお姫様をな。」
「あの・・・。お二人さんラブラブですね。」
さっきまで、地面に倒れていた俺の師はいつのまにか起き上がっていた。
「さっきの会話きいていたんですね・・・」
二人そろって、同じことを言う。
「あ・・・ああ。そうだけど。」
「じゃあ、今すぐ記憶からそれを消しましょうか。」
「えっと・・・。それは無理じゃないかな・・・。」
「無理ならいいです。これから、ちょっとした制裁を加えることで、強制的に忘れさせますから。アハ。」
さすがに俺たちの言葉にかなりの危険な感じであったのを感じたのかあせりだす師。弟子に制裁加えられる師匠って一体・・・。そう思ったが、遠慮するつもりはない。
「わかった。分かった。今、忘れた。忘れたよ、うん。いやぁ、忘れちゃったなぁ。何だったけ？」

「そんな嘘見え見えです。」
そして、師は避けるまもなく、今度は二人に突き飛ばされ、壁に激突。
「ぐはぁ・・・。」
「じゃあ、これ以上の制裁を受けたくなかったら、明日の戦いには来てくれよ。ちなみに、明日来なかった場合の制裁は死より恐ろしいものにする予定だからよろしく。」
笑いながら、そう告げると、俺はマリアに向き合う。
「すまない。もう、お別れだ。」
そう言って、テレポする瞬間、マリアは俺の腕を掴んできた。
「んなっ！！」
俺は突然の出来事に驚きを隠せない。あきらめてくれたとばかり思っていたが、あきらめるどころか、こういうふうに出るとは。
そして、視界がぐにゃりと歪んでいく。どんどん空間が歪み、崩れていく。ここからは止めたくても、止められしない。
視界が一瞬だけ真っ暗になり、徐々に視界が普通になってくる。
「ったく。何すんだよ。来るなって言っただろうが。」
「ふふっ来っちゃった。」
「ふふっ。来ちゃったじゃねぇ。」
ったく、どうしたものか。
「本当にどうしたものか。お先真っ暗だよ・・・。」
「まぁ、戦力が増えたんだし、いいじゃない。」
「やれやれ。どうしてこう悩みの種の人間は元気なんだよ、全く。」
「ぶつぶつ言わないで、とりあえず、今日の宿をとるよ。」
言われて気づく。どうやら、いつの間にか、もう夜になってしまったらしい。空は真っ暗になり、満点の星が輝いている。
「綺麗だ。」
そんな星空を見て、思わず呟く。
「そうだね。」
俺たちはしばらく我を忘れて、その星星に見入った。

「よし、もうそろそろ宿探しを始めるか。」
「うん。」
俺たちはその日の宿を探しに歩き始めた。
そして、たどり着いたのは、今日泊まったあの変なばあさんがいる宿だった。
宿に入る。すると、例のごとく鈴がなる。だが、周りを見渡した感じでは、だれもいない。だが、この後、おそらく、前と同じように右から現れるんじゃないかと右を警戒する。
だが、ばあさんはそんな俺の心理を見抜いていたかのように、左から現れた。
「ばぁっ！」
「ったく。驚かすなよ、ばあさん。」
「ふぇっふぇっ。驚かすのは楽しいんじゃよ。」
意外だった。このばあさんの趣味にではない。あのばあさんは永遠にしゃべらないのではないかと思っていたのだが、しゃべったことに関してだ。
「前と同じように部屋を借りたいんだけど、部屋は余っているか？」
「一部屋だけなら、余っているぞい。」
一部屋か・・・。一応、マリアに相談してみるか。
「マリア。この宿に余っているのが、一部屋だけみたいだけど、その一部屋に一緒に泊まるということでいいか？」
「ええ。クッスーとならいいよ。」
「じゃあ、ばあさん。その部屋に案内してくれ。」
火の明かりのあるわけでもない。ただ、月と星のひかりが差し込むだけの通路を迷う様子もなく、歩いていく。
「よく、こんな暗い通路をそんなにも速く歩けるなぁ。」
「まぁ、長いことこの宿の主をしておるからの。」
「ばあさんはこの宿では一人なのか？」
「ああ、そうじゃよ。じいさんもいたけど、じいさんはあの戦争で戦い、死んでいったからね。」

軽い感じで聞いてしまったが、実は聞いたらまずいことであったのに気づき、申し訳ないという気分になる。
「すまないな。そんなことを軽々しく聞いてしまって。」
「いいのさ。うちのじいさんはホワイトセブンとして死ぬまであの村を守るために戦い抜いた勇者だからね。悲しいけど、どっちかっていうと誇らしいね。」
ホワイトセブン・・・。その七人について、詳しくは知らなかったが、このばあさんのじいさんがその一人だったみたいだな。
そして、最後まで戦い抜いた顔も知らぬそのじいさんに対し、心の中で敬礼する。
「その勇者の仇は明日、俺が取ってきてやるよ。」
「えっ。あんた・・・。」
そう声をかけられたときには、俺はばあさんの目の前にいない。もう、そのときには部屋の中に入っていた。
「クッスー。かっこつけちゃってー。」
指でくいくいと突付かれる。
「あんな話聞かされたら、あういうふうに言うしかねぇだろ。」
「でも、そういうヒーローみたいな感じのところも好きかな。」
「そうか。俺も・・・。」
かぁぁぁ・・・。顔が熱くなっていくのを感じる。よく考えてみると、俺が今から言おうとしたことめちゃくちゃ恥ずかしいじゃんか・・・。
そんな顔を真っ赤にした俺を見て、
「クッスー。照れちゃって、かっわいいー。」
「照れてなんかない。」
「じゃあ、私のこと嫌いなの？」
「いや、嫌いなわけあるか。むしろ、その・・・。」
また、赤面。三年も会えずにいて、久しぶりだとこんなふうにもなるのか・・・。これからは別れることがねぇだろうから、関係はない話だが。そんな俺の心情を知らず、俺に対してマリアは続けてく

る。
「その？」
「逆だ。」
「つまり？」
言わなくても分かっているはずなのに、マリアはなおも言葉を止めない。
「マリア、お前が昔と変わらず、好きだってことだよ。」
「やっと言ったねぇ。久しぶりにその言葉を聞くけど、やっぱり、うれしいな。私も愛してる。明日、必ず生きて、私たちが二人一緒にいられる世界を作ろう。」
「ああ、そうだな。おやすみ、マリア。」
「おやすみ、クッスー。」
そう言って、俺たち二人は眠りに落ちた。

夢の戦（1）

俺は、まだ太陽も昇っていない、月が地面を照らしている早朝に目覚めた。ベッドから起き上がった俺は、ベランダに向かう。

「この選択は正しかったのだろうか・・・。これから、俺の導く戦いは犠牲なしではすまないだろう。この行動は本当に善なるものなのか。」

自分に問いかけるように、呟く。

毎回行動するたびに考えてしまう。気にしてしまうのは、今回の選択は、本当に死者が出てもおかしくない戦いを起こすものだからであった。。

「そうね、どうなんだろう。誰かがその行動に対して、人がそれの正しいか正しくないか、そう、善悪を決めることはできない。というより、それで決められたのは、単なるその人による見方であり、真の答えではない。真の答えは、存在しない。そう、例えば、私たちが世界を救うために、ある人を殺さねばならないとする。それは私たちから見たら、善なんだよ。でもね、その人の家族から見たら、私たちは悪となる。全ての人に対する善は存在しないし、悪は存在しない。それが、善悪。それなら、自分が善だと思ったら、それを善だと信じて進めばいい。私はそう思うよ。」

「えっ！」

誰も起きていないような時間で、一人でいたつもりだったので、その突然の答えに、驚く。

「だから、私が言えることじゃないことかも知れないけど、クッスーは正しいと思う。クッスーは自分を信じて、今を生きているんでしょ。その上で、今回の選択をしたんでしょ。だったら、正しいはず。人によっては、それは正しくない、悪だと言う人もいるかもしれない。けれど、私はクッスーは正しいことをしているのだと思う。クッスーは自分自身でどう思っているの？」

「自分自身・・・・。」
自分自身か・・・・。考えたこともなかった。ただ、この行動は正しかったのかとかを気にするばかり、本当に大事なことを見失っていたようだ。
「俺自身は、この行動、いや、選択が正しいと思っている。」
「そう、なら、もう悩むのはやめにしなよ。自分を信じようよ。それが、たとえ悪いことと見られることがあっても。」
「・・・・。」
「決めたんでしょ。私を救うって。そんなふうに、選択で迷うようなら、やるべきことも出来なくなるよ。」
確かにマリアの言うとおりだ。こんな一つ一つの選択に対して、迷いを抱いていたら、話にならない。自分を信じる・・・か・・・・。
「ああ、そうだな。もう、迷うことはやめにするよ。自分を信じて進めばいい。」
「ふふっ。そうでなくっちゃ。私のヒーロー。」
「そうだな、俺の姫君。」
そう言って、お互いに手を握る。俺はマリアを救う、それだけを考えて自分を信じて、行動すればいいんだ。
その後、二人で空を眺めていると、山の合間から、太陽が昇ってきて、その金色の輝きを見せ付ける。それは、俺の晴れた心を映し出すように、きれいなものだった。
「綺麗だなぁ・・・・。」
「ええ、そうね。綺麗ね。」
「これから、長い長い一日が始まる。準備はいいのか？」
「ええ、もちろんよ。」
「じゃあ、行くか。」
そう言って、俺はテレポする準備をする。簡単な準備なので、すぐに終わり、
「テレポ。」
そう唱えると、紙の術式は光りだし、視界がゆがみ、目の前に広が

る太陽が遠ざかっていく。視界は歪み、ついには、何も見えない闇に包まれる。
だが、その闇も一瞬で、今度は集合場所にいた。
「うっ・・・。」
やはり、テレポしてからの視界が歪んでいく感覚を克服できない。
今回はまだ、気分が悪くなるだけですんだ。最初のほうはひどかったものだ。だって、テレポして終わったときには気絶していて、倒れてしまったらしいから。まぁ、これはガイアスが言っていたことだから、真偽は分からないが。俺はそのときの記憶が完璧に消し飛んじゃっているから。
それに比べると、少しは成長しているなぁと思う。
周りを見回すと、誰もいなかった。どうやら、俺たちが一番乗りらしい。
「さてっと。こっからが本番だ。必ず生き残るぞ、マリア。」
「ええ。私は必ずクッスーを守るわ。」
「だったら、俺がマリアを守るぜ。」
「ふふっ。ありがとう。じゃあ、よろしくね。」
「任せろ。」
そうこう会話しているうちに、テレポの際に生じる光が多数できていた。もうそろそろみんな来るのか。
もう、始まるんだなと改めて実感する。これから、起こるのは、俺が経験したことのないもうそれは戦争とよんでもいいほどのもの。しかも、その戦争を始めることになるきっかけは俺が作るのだ。
もう、この人の流れは俺にはとめることは出来ないだろう。そもそも、止めるつもりもない。
全てが始まる。そう、俺が何回も死んで止まっていたこの世界の全てが。
光に包まれた場所から、二人の少女が現れた。この世界で出会い、親しくなった友人である。
「やぁ、ミラ、アリシア。」

「お久しぶりです。」
「久しぶりだな。」
「と言っても、一日ぶりだけどな。」
「そうでしたね。でも、少し長く感じてしまいました。」
軽い挨拶にも似た会話を済ませた俺は本題に入ることにする。その本題とはもちろん、説得はどうなったのかだ。それ次第で、この戦いに大きな影響が出る。
「で、結果はどうだった？」
「なんとか、説得には成功しました。クレイデスの言うとおり、あちら側もこちらと利が同じことを踏まえたら、それがいいだろうとのことで、ホワイとセブンの派遣を決定しました。もうすぐ、来るはずです。ほら。」
そう言うと、光から、今度は男女入り混じって、合計六人の人が出てきた。
「一人は、先のルーフェンでの戦いで命を落とし、今はまだ、空席だそうです。」
「ああ、知っているさ。」
「どこで、それを。」
「あの宿のばあさんから、聞いた。どうやら、あのばあさんの身内がその人だったらしい。」
「そう・・・ですか・・・。」
そして、見る。俺たちを含めると、十人か・・・。いや、やつも来るはずだから、十一人か。ったく、俺の師はこんなときでも寝坊とか言うんじゃねぇだろうな、全く。
まぁ、いい。後から来るだろう。
「いいだろうか、みんな。これから、俺たちが行くのは、案差嘘織のブレイトッドの本拠地だ。今回の目標はそれぞれ思惑は違うだろうが、本質的な目的はブレイトッドの殲滅とおなじはずだ。やつらの中で一番強いとされる終焉の騎士は俺が何とかする。他のやつらも強いが、そちらは何とかしてもらいたい。」

「了解。」
全員がそろって、威勢のいい声をあげた。
「それでは、作戦を説明する。今回はホワイトとセブン内で三人のグループ二つに分かれてもらう。ルーフェンのやつらのアジトまでは三本の大きな道でその交点に位置する場所に存在する。そこをたたくために二人のグループ、つまり、ミラとアリシアは正面南からの通路を、三人のグループは、それぞれ、北西から伸びる道、北東から伸びる道を通っていけ。俺とマリアは、地下水道を通り、アジトまで向かう。」
「地下水道なんてものはないはずだ。」
その意見はごもっともだ。なぜなら、その地下水道は地図に載っていない。そして、住んでいる人も知らない。
知っているのは、それを昔使用したことがある人か、俺のようなメフィストで測量のスキルを持ってるやつぐらいだろう。
「俺はメフィストだ。その意味が分かるよな？」
「そういうことか。なら、その情報は正しいのだな。」
「ああ、そこの地下水道に残るものから推測して、あれは相当昔からあるものだ。それも、百年とかそこらではない。三千年前あたりのものだ。」
「だが、何故、そんなものが地下にある？」
「さぁな、それに関しては俺は考古学者でもないからわからねぇ。だが、これを有効に使わない手はない。」
「分かった、でも、それなら、そちらに人数を回したほうがいいのでは？」
「無論、それもありだ。だが、この作戦の成功率を上げるためには、地上に敵の目を出来るだけひきつける必要がある。だとするならば、地下に人数を割いて、地上の人数を減らすなど、やってはならない。」
「確かにそうだな。」
「どちらも、作戦としてはメインだが、地上を地下のための陽動と

して使わせてもらう。」
「分かった。」
そう、地上は陽動にしてはかなり大きな勢力をつける。それが今回の作戦の要だ。ホワイトセブンを陽動に使うなどということ自体が普通は有り得ない。それに、陽動だと仮に分かったとしても、人員を減らせば、その陽動に押し負かされるっていう算段だ。
「さて、おそらく、途中参戦しやがる眠そうなバカがいると思うが、来たときは鉄拳制裁をよろしく頼む。」
「了解した。」
「では、行くぞ。必ず、生きて帰ってくるんだ。」
「おーーーーーーー!!!」
全員がうなり声をあげた。
　そして、辺りは無数の光に包まれる。それは、テレポの光。そして、これからの戦いへののろし。これが、俺とマリアの未来を変える導きの光であることを願う。
いつもどおり、視界がおかしくなり、すぐに普通に戻る。
「さて、と。行くか。」
「じゃあ、行こう。」
俺たちがやってきたのは、ルーフェンの町はずれにある一つの巨大な屋敷だ。明らかに普通の家とは格が違う。大きさ、造り、強度・・・。レンガ造りの二階建てで、中央に一つ大きな扉があり、窓は左右対称になるように配置されている。
この屋敷の庭の二つある大きな樹の根元を掘り起こせば、どちらかにあるはずだ。地下水道への入り口が。
「とりあえず、一方ずつ見ていこう。とりあえず、あの樹を銃で撃ってみよう。」
「えっ。きちんと近づいて調べるんじゃないの？」
「ああ。そうだ。俺の勘が正しければ、どちらにも何かしらのトラップがあるだろうから、近づかないほうが身のためだ。」
そう、ただの俺の勘だ。だが、今は慎重にならなくてはならない。

ここで、死ねば終わりなのだ。
また、リセットされる。今までの行動が。たとえ、記憶が残っていたとしても、今までの行動は記憶されるだけで。
勘とは言え、ある程度理由もある。俺たちの戦おうとしている相手、ブレイトッド。
そいつらと、現実世界で戦ったから知っている。
あいつらは、実戦面でも強く、巧みに寝られた戦略を使ってくるようなプロの暗殺集団だ。こんなところにぼろが出るわけがない。
だが、それでも、この通路は地上の通路より確実性があると睨んできたのだ。
「とりあえず、撃つとしますか。」
そう言って、マリアを自分の胸に抱きかかえる。腕はマリアの頭を包み込み、耳を塞げるようにして。
「きゃっ。」
突然のことにマリアは驚きの悲鳴を少しあげる。だが、そのときには、俺は銃をホルスターから取り出し、引き金を引こうとしている。
「一応、塞いでいるけど、ちゃんと、耳塞げよ。」
引き金を引くと響く銃弾の風を切るうなり声にも似た轟音。そして、それが樹に直撃する。
その直後、もう一つの轟音が辺りを包み込む。さっきのものとは比にならないほどの大きな轟音が。そう、樹は銃弾の直撃の寸前より爆発が始まっていた。おそらく、ある一定の範囲に規定の大きさ以上のものが入れば、爆発するという魔法でもかかっていたのだろう。
このままだと、敵に俺たちがここにいることが知れてしまうだろう。
まぁ、そのためのこの大規模な爆発なのだろうが。
「収束しろ。」
そう俺が小さく呟くのを合図に大きく広がろうとしていた爆発は、爆発した場所まで大きさを縮めていく。
これが、あの銃弾に付与した魔法。
俺の『収束しろ』という言葉を合図にどんどん小さくしていくのが

効果だ。これは、爆発の規模を抑えたり、爆破音が周りに聞こえないようにするための魔法だ。
かといって、エネルギーが消えるわけではない。
一点に全てのエネルギーを集めているのだ。そう、銃弾に全てを収束させているのだ。それは、その膨大なエネルギーに耐えられるような銃弾にしなければならないことを指し示している。
「まぁ、これがいつか必要な時が来るだろうから、持っておくといいよ。ちなみに、それは、僕が作った特別なものだよ。それで、収束させたエネルギーを何回にも渡って、蓄積させることが出来る。普通の品は一回使えば、それまでの使い捨てさ。それに、収束させたエネルギーを開放することも出来ないしね。」
そう言われ、ロドスに渡された品だ。
そんなことを思い出しながら、周囲にトラップがないか注意して確認しながら、樹に近づいていく。
そこには一つの銃弾があり、とりあえず、それを拾った。
「あっつ。」
あまりの熱さに持ちきれず、落としてしまう。こんな状態じゃ持っていくのもままならない。
とりあえず、ビンに入れて、持ち歩くことにしよう。ビンならば、熱の伝導も銃に装填しておくよりかはましなはずだ。
そして、次に樹のあった場所を見る。
「ビンゴ。」
そこには、地下に続く穴があった。おそらく、こっちが当たりで、もう一方は外れだろう。
「行くぞ、マリア。大人数には気づかれてはいないだろうが、この爆発の魔法を仕掛けたやつは、この爆発に気づいているはずだ。」
「ええ、そうね。この規模が起きる瞬間に一瞬だけ出た魔法の術式を見たわ。その術式は魔法を使用した者に、爆発したことを知らせるようなものも含まれていた。それは、つまり、クッスーの言うとおりのことだわ。」

あの一瞬でそんなことまで・・・。マリアはどうやら、俺がこのメフィストの夢の世界
に縛られ続けているときの間に、また、一段と成長したようだ。
俺の知っている三年前の現実では、術式の解読は不可能とされていた。それは何故か。それは、簡単な理由だ。魔法を使う際は、術式は見られても困らないように、暗号化されている。意味の分からない記号や形などによって。
そして、それは魔法が使われ始めてからずっと、そのままだった。
そして、その暗号の規則性は全く持って見つからなかった。
俺もその規則性の解明に挑んだことはあったが、不可能だった。いや、不可能だったのではない。あれには、そもそも、規則などはない。
それが、俺の答えだった。
それは何故か。その暗号には全くもって、同じ記号や形がなかったのだ。そんなふうであるのなら、規則性もあるわけがない。
よって、魔法の発動の際に出てくる術式は解明不可能とされていた。
そんな不可能を今、目の前で実行して見せたのが、俺の幼馴染、マリアであった。
「どうやって、そんなものをできるようにしたんだよ。」
「あの夜、私は自分の無力さを知った。」
マリアは俺の質問に答えるために語りだす。
「悔やんだ先に、決めたんだ。必ず、クッスーを守るって。それが、私にとっての人生なんだって。」
黒髪のロングヘアーの少女は遠くの空を見据える。その瞳には迷いはなかった。
「実は私、クッスーと同じ、悪魔の末裔だったみたいなんだ。悪魔の血を引く者。」
バカな。マリアが俺と同じだと・・・。いや、そもそも俺は悪魔の末裔なのか?そんな疑問を見透かすように話は続く。
「クッスー、あなたは、ガイアスと同じ血が流れている。ガイアス

自身に聞いたんだけどね。あの人にも悪魔の血が流れているんだそうよ。それは、クッスーが悪魔の末裔であることを指している。」
あまりに驚きの事実に俺は絶句してしまう。かもしれないとは思っていた。だが、実際に言われてみると、やはり、違うものだ。
「そして、こうも言っていた。『メフィストの試験は俺たち、悪魔の末裔を集めるためのものなのだ』ともね。」
そうか、これで、完璧に話が繋がった。俺の予想が正しければ。
終焉の騎士が何故マリアを狙うのかも、俺のおばが何故殺されたのかも、ガイアスが何故、メフィストの試験に役立つようなことを知っているのかも。全て。
そう、全ては悪魔の末裔ということが関わってきていたんだ。、マリアとおばの件は、悪魔の末裔を滅ぼそうとする者がいたということ。
悪魔に身内を殺されたものがいない世の中ではない。この世界には魔物、悪魔がいるのだから。
しかも、ただの悪魔の末裔と言うわけではなく、有名な話『剣王と悪魔』に出てくるような強力な悪魔だ。
悪魔に恨みを持つものが野放しにするわけがない。真実を知ったら、なんとしても、殺そうという気持ちになるだろう。
そして、それを知ったガイアスは俺と同じように未来を変えて、おばを救うために、メフィストになったが、失敗した。
そして、その息子である俺は、今度は、マリアが死ぬことを知った。それを知った親父は、自分のような失敗を繰り返してはならないと思ったのだろう。
そうして、俺に未来を変えるために、必要で、託せることを全て託したといったところだろう。
現に、親父の託したもののおかげで、俺は、メフィストの試験に合格し、メフィストとなった。
「悪魔の繰り返される現実か・・・。」
「そう、あの『剣王と悪魔』に書いてあった人型の悪魔と化け物型

の悪魔の因縁はまだ、続いているのだと思うわ。」
「だったら、俺たちが、化け物側の悪魔ということか。」
「ええ、そうよ。おそらくね。そして、おそらくは『終焉の騎士』ってやつは人型の悪魔の末裔ね。」
「俺たちは、こんな昔から続く物語の上を歩かされていただけだと言うのか。」
久々に、怒声をあげる。もちろん、それは目の前にいるマリアに向けられたものではない。
悪魔同士の因縁、それに向かってだ。
「頼んだよ、クッスー。この世界にいれる時間もこれが限界みたい。」
「マリア、どういうことだよ。」
マリアの体は向こう側が見えるぐらい透き通っていた。今すぐにも消えてしまいそうな弱々しい感じになっていた。
「私はね。この世界の望みなの。つまり、クッスーの望み。そんな人物は本来、この世界に干渉できないの。それを、元メフィストであったガイアスさんに無理言って、魔法で空間維持をしてもらっているの。だけど、さすがに、これが限界みたい。そして、予言では、もうすぐ、私は殺される。おそらく、この作戦に失敗したら、私は・・・。私は・・・。」
マリアの瞳から涙が流れるように、涙は出てきて、ほおを伝っていくと、地面に落ちていく。
「それ以上言うな。必ず、俺が何とかしてやる。だから！」
「クッスー・・・。」
マリアは泣き崩れながらも、はっきりと俺の名前を呼ぶ。
「心配するなよ。俺だぜ。お前に認められた。こんな腐った過去から続く因縁なんて、俺がすぐ、ぶち壊してやるさ。」
「信じてる。信じて待ってる。三年という長い年月待ってる間に、どんどん、絶望に打ちひしがれていった。今日の今日まで、絶望しかなかった。もうすぐ、私は死ぬのだということも知ってしまった

しね。でも、今までクッスーと過ごしてきて、安心できたんだ。私、信じて待ってる。だから、クッスーも必ず帰ってきてね。」
そう言って、彼女は徐々に薄れていき、消えた。
「必ず、変えるさ。」
そう、空に向かって呟く。それが届いたかどうかは分からない。だが、それでも、俺は必ず。

夢の戦（2）

「誰だ、そこにいるのは。」
「いやぁ、ばれちゃったか。今回は本気で気配消していたのにな。いつの間にか、弟子に超えられてしまったよ。」
俺自身、だれかがいるのには気づいていたが、敵にしては隙を見せても襲ってこないし、味方にしては、気配を消しすぎている。だからこそ、とりあえず、放置していたのだが・・・。
まさか、師匠とは・・・。
「聞いていたのか。」
「ああ、君の意志の強さを確かめるためにね。」
どこか、この世界ではない何か遠くのものを見る目で師は告げた。
「私は、君たちに協力するよ。それが、私の一族の昔からの因縁なのだから。だから、知らなければならなかった。君が私の一族に課された因縁を打ち砕く力があるのかをね。まぁ、合格かな。もし、駄目だったら、君を殺さねばならなかったんだけどね。」
「それが、あんたの本性か。」
「本性？笑わせてくれるね。人にはもともと一つの顔しかない。それを分割して、できる一部を人に見せているんだ。つまり、もともと本性は一つしかない。だから、いつも見せているのも、本性。今見せているのも本性さ。」
言葉で攻められて、負けた気分になるが、気にしない。この人を論破するのは無理難題なのだ。
「まぁ、いいです。師は付いて来てくれるのですか？」
「ああ。そうしたいところだが、僕はここで、やつを迎え撃つ。」
彼の見ている方向を俺も見てみる。
すると、そこには、俺が現実で最後に戦ったあいつとその部下と思われる集団がいた。そいつらはぱっと数えただけでも、五十人は超えている。マリアの情報から考えて、来るだろうとは予測は出来て

はいたが、まさか、これほどまでとは。
こんな戦力を回してしまっては、少なからず、向こうの戦闘に支障が出るはずだ。しかも向こうにいるのは、この世界でも屈指の王の直属の戦士。そんなやつらに、手抜きをして、勝てるわけがない。
まさか、向こう側は捨てたのか。
そんな思考を次々と進めていく俺に遠距離通信魔法が行われた。つながる回線。
「クレイデスさんですか。こっちの南の通路を守護していた部隊が、そちらに行きました。大丈夫ですか。」
「いいや、結構まずい。そっちは、こちらに応援を送れるか？」
「どうやら、やつらはこっちを持久戦で倒そうと考えているみたいです。敵は無限に湧き出てくる土人形です。今、術師の捜索を行いつつ、戦っていますが、今すぐには抜け出せそうにはないです。他の北西、北東の通路に関しても同様だと通信が来ました。すみません。」
そう言って、通信魔法は切れた。おそらく、通信をしているほどの余裕がなくなったのだろう。と考えると、応援は期待できない。そして、ということは、この集団はブレイトッドの主力のはずだ。
「おそらく、ここにいるのは、敵の主力。俺もここに残ります。」
「いやぁ、クレイデスも冗談が過ぎるなぁ。」
俺がそれでも口を挟もうとするも、そんなことができないように、言葉を続ける。
「・・・。ざっけんなよ。てめぇは、ここまで、何しに来たんだ。俺のために残って一緒に戦うためか？いや、違うだろうが。てめぇは、マリアを助けるために、この作戦を執行しているんだろうが。こんな俺なんかほっていけよ。なんのために俺が来たと思っているんだ。」
ロドスの今まで一度たりとも見せたことのない怒りをぶつけてくる。こんなに怒り狂っている師は初めてだ。そんな今までに経験したことのない異様な光景に、俺は驚きを隠せない。

だが、師匠はおれのために、ここまでしてくれている。
その師匠の意志を無駄にするわけには行かない。
「すまない、後は任せる。」
「ああ、任せとけ。必ず、成功させろよ。」
「ああ。」
お互いにうなずきあうと、一斉に逆方向に走り出す。
俺は穴の中に、師は敵の集団の中に。
「さてっと。弟子にはあんなこと言っちゃったし、久々にがんばらないとね。」
自分のことを誇るわけではないが、あの子と会った時点で、僕はあの国でも屈指の魔法師であった。ただ、それを表舞台にもって行こうとはしなかっただけで。なぜなら、めんどくさかったのだ。強いことが表舞台に知れれば、軍には駆り出されるし、自分が強いことを主張したいがために、僕を襲ってくるような輩が出てくるから。
別に、叩き潰せばいいとも思いはするのだが、なんかいやだ。
そんな理由もあったが、一番の理由は彼に指摘された通り、研究時間の減少だ。それだけはなんとしても避けたかった。
よって、実戦は久しぶりだった。
とは言えども、俺が戦っているのをを見た事がある者はいない。それが、意味するのは戦ったときの生き残りが僕一人だったということだ。
僕は禁法を唱える。いや、この表現は僕にとっては正しくない。封印を破って、禁法を発動する。そう、僕は禁法を体に埋め込まれた一族の生き残り。悪魔について知った者たちの実験に使われた子供。
「消し飛べ。」
そう一言告げるだけで、人を消し飛ばすことが出来る。それが、宿った力の一つ。口にした言葉を現実にする能力。はっきり言って、僕一人がいるだけで、戦場は姿を変える。これがいやなのだ。人を難なく殺してしまう力。そんなものをもって嬉しいはずがない。
だが、その現実改変の能力を宿した僕の一言を受けても、消し飛ば

ずに立っている一人の男がいた。
他には、もう誰もいない。
「あら、まだ生きているやつがいたのか。」
「どうやら、君の首はここで、取らないといけないみたいだ。まぁ、苦をさせずに殺したということだけは、ありがたく思うよ。だけど、仮にも仲間が殺されたんだ。黙っているわけにはいかない。」
目の前の禁法をもろともしない男はそう告げると、自分の中に溜め込んでいた全ての殺気を放出する。
そんな姿を見て、彼は驚きを隠せなかった。自分以外に禁法を体に取り込んだやつがいることに。だが、同情などしない。
「ふふふ。面白いね。君に僕は殺せはしない。君は何も出来ずに、ここで死ぬだけだ。」
そう言って、術式を光速展開する。それは、もう人知の域ではない。光の速度で展開される複雑な術式。
「遅い。」
そう聞こえたときには、彼は目の前まで迫ってきていた。光速で展開される術式を遅いと言うというのは、こいつ自信もかなりの化け物であることを指し示している。それを一瞬で判断した彼は即座に左手で刻む術式を変える。右手では先ほどから進む術式を進めながら。
そちらの術式は複雑である禁法とは違い、簡単な加速の魔法だ。身体の細胞一つ一つを活性化させ、身体の速度を急上昇させる魔法。それが完成し、発動するまでにかかる時間はないといても過言ではない。完成した術式を自分の体に対して、発動させると、後ろにジャンプする。
すると、さっきまで、自分がいた場所に腕がたたきつけられる。腕と地面が接触した瞬間、地面が溶けた。
「あらら、相当の化け物だねぇ。」
「君に言われたくはないな、君の術式の展開速度も狂っているよ。」
そう会話をしながらも、やつが何をしたのか分析をする。溶けると

いうことは、温度の急上昇が見られたということだろう。それはつまり、地面を高速振動させ、分子同士の接触回数を極限まであげたということを指す。
だとすると、やつの腕に触れたら、さすがにまずいだろうなぁ。
「なら、一気に決めようかな。」
右手で光速展開させていた術式をようやく完成させて、発動する。すると、あたりに冷気が満ち溢れ、男を包み込む。包み込んだかと思ったら、次の瞬間には男が凍り付いていた。
「この程度じゃ俺はまだ死なない。」
氷付けになっても、男はしゃべる。だが、それも、もうすぐ終わりだ。
「なっ。バカな。なぜ、俺は・・・。」
ようやく、気づいたらしい。自分が死ぬということに。
「この世界における温度は、分子や原子の振動によるものだ。最低の温度というのは、分子や原子の振動が停止したときのことだ。だけど、僕の魔法はその向こうを行く。完全なる停止、その後に起こる原子や分子の消失。それが、最低温度を超えるための業だ。一般的には不可能だ。だが、僕にだから出来る。君の空間はもう囲われているんだ。その空間内の全てがこの魔法の対象。じゃあ、死にな
よ。」
そして、その空間には空気を含めた全ての物質が消えていた。
　俺は地下に続く水道を人間の本来の力では有り得ない速度で駆け抜けていった。道中、変な魔物もいたが、魔物の追えないような脅威の速度で走っていたため、視界に入っては消えて、入っては消えての繰り返しが続いた。
そう、身体の細胞を活性化させる魔法を使って。無論、師のことが心配ではないわけではない。だが、俺は俺を先に進ませてくれた師を信じなければならない。信じて、俺の目的を果たさなければならない。
それが、俺に出来る唯一のことだから。

そして、それは長い間に渡った俺の望み、メフィストの夢の目標点であり、未来へのスタート点なのだから。
そう、決意を強くしている間に俺はルーフェンのブレイトッドのアジトの真下にたどり着いた。
なぜ、アジトの下にたどり着いたのか分かったのかというと、地上で起こっている戦いによる魔法のぶつかる衝撃音や爆発音、剣同士の衝突の音、銃声が鳴り響いていたからだ。
さらに言うなら、誰もいなかった地下水道に、人影がひとつ見えたからだ。
それは何度も見た、もう見間違えることのないタキシード姿に、腰からぶら下がった刀というよくわからない服装の男だった。
そう、こいつこそが、俺を万を超える回数殺してきた男。
マリアの未来を壊す者。
『終焉の騎士』
俺は今、細胞を活性化させ、身体能力を向上させている。そう、今使っているこの魔法は身体の本質に触れる。本当の実力に触れることが出来る。
体の奥に眠る力に火をともす魔法なのだ。
だが、これは、まだ一部。この魔法でも、俺の奥底にある悪魔という火種にはふれることも出来ていない。
なら、それに触れることができるなら、どうだろう。そう、禁法だ。
それなら、最も近づくことが出来る。禁法は発動者に対して肉体的に、そして、精神的にダメージを与える。ダメージを受け続け、禁法に負けてしまえば、体を禁法に乗っ取られてしまう。それが、禁法。
そう、禁法は己の奥底に眠る本質が表に出て、己を飲み込まんとする魔法なのだ。そう、だから、使っている間は注意が必要なのだ。
俺にとって、それは、悪魔という本当の自分が俺を飲み込もうとしていることを指す。
それならば、俺がやつに対して、火を灯し、制御すればいい。

それしか、俺には勝つ方法がないと思う。
師はこのことを知っていて、俺に禁法を教えたのだろう。
なにげなく、やりたくなさそうで、眠そうな顔をしながらも、そんなことを考えて、俺に結局、禁法を教えたのかもしれない。
考えすぎだとは思わない。
見た目は眠そうで、怠け者で、バカだけれども、やるときはやる俺の師だ。
結局、あの時はまだ、俺もそんなことはわからず、ただ、教えてもらっていた。
だけど、今、ここで気づいた。
これが、師の俺に対する最大の気遣いなのだと。
俺はいろいろな人に支えられている。
マリア、ガイアス、ロドス、ミラ、アリシア、ホワイトセブンのみんな。
そう、いつの間にかこんなにも、支えてくれる人が増えたんだ。
そう、みんながいる。
だから、俺は悪魔なんかに飲まれたりはしない。
そして、禁法を使い始めることにより、ゆっくりと、悪魔という俺の本質に火を灯していく。
それは、小さな火から始まり、業火まで大きく膨れ上がる。
「行くぜ。」
俺は戦いの一歩を踏み出す。
俺は今までにないほど、背中に背負っている大剣を振り回す。それは、まるで、自分の腕のような滑らかな動きで。
無音だった地下水道に俺の剣とやつの刀の衝撃音が響き渡り、銃声が鳴り響く。
俺は俺の中の本質の思うがままに、剣を走らせた。その剣とあうタイミングで、銃を撃ち放った。
やつは俺の一振りを受けるごとに後ろに下がっていく。今回は前とは違う。万単位殺された記憶の蓄積によって、わかったことがある。

やつは、連続した途切れない攻撃を受けているときは、消えることが出来ないということだ。俺が特殊な銃弾を用いて戦ったときもそうだった。
あのときも、最後の銃弾を避ける以外の場所でも、本来その能力を使うべき場所があった。
そう、あの普通の銃弾の牽制、そして、連発射撃に大振りの剣技のとき。
だが、そうだと言うのに、やつは俺の連続攻撃が終わり、俺の腕を跳ね飛ばし、距離をとった後に使っている。
他にも、使えばいいときに使わず、連続攻撃ではないときに使っていた。
そして、問題となっている消えると言うことについても原理も、これによって、だいたい分かった。やつは、自分自身を分解して、魔法化させている。
それゆえに、俺と近くにいるときには、消えようとはしない。
消えてしまえば、魔法化した自分が俺によって、吸収されてしまうからだ。
だから、俺はこうして、近接攻撃の連続でやつを追い詰めている。
「ぐはっ。」
今まで、銃弾、剣技を全て刀で、防御し、反撃してきたやつ。だが、そんなやつにもどうやら、ぼろが出てきたようだ。
銃弾がやつの左腕を貫通する。
だが、それで、空いた穴は何か魔法の術式が浮かび上がり、消えてしまう。
「まだまだぁぁぁぁ！」
俺の攻撃は止まらない。驚きもしないのは、それがやつの中にいる悪魔による異常なまでの身体回復能力であることを知っていたからだ。
こんな程度の傷ではやつはひるみもしない。
剣でやつの体を真っ二つに裂く。しかし、これに対しても、その悪

魔の身体回復は働いて、空中で元に戻そうとする。
だが、そのときには、もう俺の魔法の詠唱は終わっている。
「チェックメイトだ。」
そうやつに告げると、やつの全身は炎に包まれる。それは地獄の業火。全てを消し去る炎。さらに言うなら、そこにある魔法を源として燃える炎。つまりはやつ自身を源として燃えているのだ。
「ぐぁぁぁぁぁぁっ。焼ける、熱い、死ぬ・・・・。」
そんな絶叫が聞こえる。だが、もう、そちらへは目を向けない。そう、それは実に無残だった。
そう、いくら魔法化するのだとしても、そこにいるにはいる。それならば、剣などは避けることが出来たとしても、炎は避けることが出来ないし、魔法を源とするものだったら、避けようがないのだ。
「甘いな。」
何か鈍い音が聞こえる。何かを突き刺したような音。それが、自分に突き刺さった刀であると気づくのに時間がかかった。
「甘いのはお前だ。」
服の中にある銃を入れるためのポケットに手を突っ込むと、自分の腹を貫通させ、やつを撃つ。
「ぐはっ。」
二人はほぼ同時に声を上げる。
だが、それでは俺の攻撃は終わらない。剣を構えると、やつの懐に踏み込む。そして、剣を振り構えながらも、蹴りを入れた。
「なんだと。」
どうやら、俺がそのまま斬りかかってくると思っていたらしいやつは驚きを隠し切れずに言った。
そして、銃にあの銃弾を装填し、撃つ。もちろん、やつは逃げようとする。だが、やつは動けなかった。
目には見えないほどの細い糸。金属で出来たもの。それが、やつの周りを囲んでいたから。
そう、俺の銃弾のほとんどにはその細い糸がついていたのだ。そう、

二対の銃弾。俺はこの戦いで、銃が壁に突き刺さらないような撃ち方はしていない。
さすがに、自分の治癒能力をもってしても、厳しいと判断したのだろう。俺に対して充分距離があることを確認してから、消えようとする。
「バカな。」
消えようとはするものの消えることは出来ない。俺の銃弾に俺の血を含ませたのだ。そう、やつが俺を突き刺し、俺が自分もろとも銃で撃ったときに。
俺の血を含んだ銃弾はそのまま、やつの体に侵入した。
それは、俺の悪魔の力が向こうに働いていくことを意味する。
そう、全てはこの戦いが始まってから、このラストを目的として練った作戦による戦いだったのだ。
「言っただろう。チェックメイトだと。」
「ハハハ。まさか、お前に負けるとはな。もう一人の悪魔よ。貴様は私に勝ったのだ。悪魔の末裔であるお前がな。どうやら、これで、長きに渡った貴様と私の因縁も終わりのようだ。もうお前の仲間であるあの女に手を出すのはやめにしよう。」
そう言うと、銃弾に溜め込んだエネルギーの爆発によって、終焉の騎士は消し飛んだ。
「勝った。俺は勝つことが出来たんだ。」
そう、あまりの嬉しさに声を出して、叫ぶ。だが、その元気もどこに行ったのか、疲れが押し寄せる。やはり、悪魔の本質に触れるというのは、かなり身体に触れるようだ。
疲れのあまり、だんだん眠くなってきた・・・。
まぁ、もう誰もいないし大丈夫かな・・・。
そして、俺は眠りに付いた。

エピローグ　二人の少年少女の物語

俺が目覚めたのは、地下水道の湿気た床の上ではなく、どこか分からないベッドの上だった。とりあえず、周りを見回す。すると、そこには、俺のベッドの横にいすに座り、俺のベッドに倒れこみ、眠り込んでいるミラとアリシアの姿があった。
ずっと、俺を見ていてくれたのだろう。そして、俺をずっと見ていて疲れ果て、眠ってしまったのだろう。
そんな二人を起こすわけにはいかないので、そのままの体勢でいることにする。
すると、奥にあったドアから一人の男、そう、俺の師であるロドスが入ってきた。
「君はようやく、古くから続く因縁を断ち切れたようだね。」
「ああ。」
そうだ、俺はあいつを倒すことに成功したんだ。そして、確かあそこで倒れた。
「そっちはどうだったんだよ。」
「こっちかい？こっちはブレイトッドとの戦いに勝利した。まぁ、僕は僕で、久々に本気を出せたかな。この子達はこの子達で、大変な戦いをしたみたいだよ。そして、勝った後、俺たちはお前のいるであろう地下水道に向かった。思っていたより、ひどい有様だったよ。」
そりゃ、あんだけ、ド派手に戦ったのだからな。炎でやつを焼き尽くそうとしたり、あのエネルギーの塊を爆発させたりしたからな。
と心の中で思ったが黙っておく。
「そしたらね、君が倒れているんだから、驚いたよ。死んでしまったのかと心配したけど、なんか眠ってるだけみたいで良かった。」
やっぱり、ここまで運んできてくれたのは、みんなか。
「ありがとうな。ここまで、運んでくれて。」

「いやいや、礼はいいよ。礼を言うなら、この二人に言っとけよ。
あと、君はこの世界での目標を果たした。それは、この世界からの一時的な、強制退場を意味する。ちゃんと、言うことがあったら、言っといてね。」
薄々、そんなことになるのではないかと思っていたが、本当にそうなるとはな。
「ありがとうございました。師匠。」
「だから、礼はいいって言ってるだろ。じゃあね。」
そう言って、俺に背を向けると、手を振りながら、この部屋を去っていった。
そして、もう一度、ミラとアリシアを見る。
いつの間にか、二人とも起きたみたいで、俺に寝ているところが見られたのが恥ずかしいのか顔を二人そろって、真っ赤にしている。
「ありがとな。おれをここまで運んできてくれて。そして、俺のためにがんばってくれて。」
「気にしなくていいですよ。」
「みずくせぇこというなよ。」
二人は俺に対して、なにも変わらず、接してくれているが、俺との別れを知ってか、少し悲しそうな顔をしている。
「じゃあね。」
「じゃあな。」
そう二人は俺に対して、別れを告げ、椅子から、立ち上がる。そして、ドアに向かって、歩いていった。
「ああ、じゃあな。また、会えるといいな。」
それから、二人は振り向くことはなかった。いや、振り向きたくなかったのだろう。二人が背を向けてから、聞こえたかすかな泣き声。
それが、俺の心に響き渡った。
そして、俺の体は徐々に透けてくる。
「ああ、このメフィストの夢とも、もうお別れか。」
そして、俺の体は完璧にその別世界から姿を消した。

次に目覚めたのは、一面真っ白な部屋にあるベッドの上だった。
周りを見ても、全てが白。特殊な部屋だった。
俺は起き上がろうとする。だが、思うようにいかない。なぜならば、俺の体はさっきの世界での俺とは異なっていたからだ。筋肉が抜け落ち、細くなった腕、足・・・。そう、全身が劣化している。
だが、それも当然だろう。
なぜなら、俺はメフィストの夢という別世界に三年間もいたのだ。
そして、その間、俺は現実に戻ってくることもなく、普段使うはずの筋肉も使わなくなった。
そうやって、俺の体は弱ってしまったのだろう。
だが、体が思うように動かなかったとしても、俺のマリアに会いたいという高ぶる気持ちは止まりはしない。俺は、本当にマリアの未来をあの世界で変えることに成功したのか確かめなければならない。
俺はそんな思うように動かない体に無理をさせて、起き上がる。
「使わないとこんなにも、弱ってしまうものなのかね、体ってのは。」
そう悔しい思いを口にしながら、ベッドから床に降りようとする。
そうして、ゆっくりと地面に片足ずつ、つけていく。
そして、両足がつき、自分の体重が全て、足に任せられる。こんなにも、立つことが苦しかっただろうかと思わされた。そう、俺は今にも倒れそうなぐらい苦しい。
だが、倒れないように、踏ん張る。
そして、一歩を踏み出す。そうすると、全身に苦痛が伝わり、足は悲鳴を上げる。
それでも、俺はまた、一歩。そして、一歩と着実にドアに向かって近づいていく。
「ガキのころとか、ずっと修行に明け暮れてたはずなのに、三年間動かないだけで、これかよ。だが、体力を失ったかわりに、マリアが救えていたなら、俺はそれで、良しだけど。」
もう何歩歩いたかなんて、分からない。どうやら、思考もまだ、ま

ともにできないらしい。でも、着々と、ドアに近づいていっているのは確かだ。それなら、マリアのことだけ考えて、ただ、進めばいい。それだけだ。
そうして、ようやく、ドアの前までたどり着く。
重く閉ざされたドアを俺の持つ限りの力で開く。すると、無数の光が差し込む。あまりの眩しさに目が開けられない。
しばらくして、目が開けられるようになり、目を開く。
すると、そこには窓の外を眺める一人の少女がいた。
ずっと、会いたかった少女。ずっと救いたかった少女。俺の恋した少女。
艶やかで、長い黒い髪が特長のマリアがそこにはいた。
「マリア。」
声がかすれてうまく出ないが、そう名を呼ぶ。何度も、何度も。
ようやく、声が届いたのか、彼女はこちらに振り向くと、昔から見てきた笑顔を涙でぬらしながらも言った。
「おかえり、クッスー。ありがとう、私の未来を変えてくれて。」
「ただいま、マリア。」
そう言って、お互いおぼつかない足取りで、近づいてゆき、抱き合った。
これで、俺はマリアを救うことが出来た。
そして、俺はこれからもこの一人の少女の笑顔を守り続けていく。
それが、俺の望みであり、俺にとってのメフィストの夢の意義なのだから。

エピローグ　二人の少年少女の物語（後書き）

これにて、メフィストの夢完結となります。
これまで、読んでいただいた方ありがとうございます。

完結ということで、何か寂しい感じもしますが、
これからも、いろいろと書いていくので、よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8968v/

メフィストの夢

2012年1月8日20時54分発行